国語解釈学

古代解釈学

山岸徳平・川瀬一馬

國語科學講座

－X－

國語解釋學

古代解釋學

山岸德平・川瀨一馬

株式會社

明治書院

國語科學講座

— X —

國語解釋學

古代解釋學

山岸德平・川瀬一馬

株式會社
明治書院

目次

古代解釋學

〔前篇〕古代文學の環境と諸相

山岸德平

一　序言

此處に古代と稱したのは、上古から平安時代の末までを含めたものである。故に一般に近江朝・奈良朝及び平安朝の各時代は、勿論抱括せられて居る。蓋し奈良朝と言ひ、平安朝と稱するが如き名稱は、政治史的の區分に從ふものである。從來、これを文學史の時代區分に適用して來たことは、唯、便宜上のものに過ぎなかつた。勿論、文學作品や作家や文學現象等が、一國の政治的勢力の消長と平行する場合もあらう。けれども、文學史の時代區分は、又、政治史から獨立して獨自の區分が要求されなければならぬ。たとひ、その結果が、政治史的區分と平行するとしても、右の如き要求は、文學史に於ける當然の義務で無ければならぬ。かゝる事柄は、こゝに改めて吹々を要さないものであるが、古代の語義を明示すると共に一言附加するものである。

次ぎに、解釋學に關して一言する。これに相當するものは、たとひ不完全な點が多かつたとしても、我が國にも勿

論存在して居た。又、學者は各自の解釋學を持つて居た。然るに、近來、解釋學に關して多數の著述も現はれ、一般からも特に關心を持たれる樣になつた。それは多くの人々が、古典の解釋に關する見解を一層組織だて、理會を完全にしようとする意圖によるものと見える。同時に又、完全なる理會の要求が、解釋學への關心として現れて來たものである。

解釋學の歴史や變遷は、今此處に述べないが、解釋とは理會するための操作であり技術であり、又手段である。その操作或は技術乃至は手段が、方法的に實行せられた時に、吾々の理會はその目的に到達するであらう。即ち理會とは「わかる」又は「わかつた」と言ふ事である。「わかる」又は「わかつた」といふ事實は、理會が完全に遂行せられた場合には、著者自身の考へて居たよりもより以上に、その著者或は作品を吾々が理會し得ると稱せられるものである。その意味に於て、解釋は創作でもあり、或は內なるものを外に出して現はす事でもある。若し、解釋が方法的でなく、又、獨斷や、偶然的の感想等によつて遂行せられたならば、その理會は完全な、又、合法的なものではない。

こゝに、古代解釋學と稱したのは、主として古代の文學に關係する、あらゆる方面に從來なされて居た解釋學の業績を掲げ、それを基礎又は參考とし、更に將來に於ける古代解釋學の補助として、古代文學のあらゆる方面に亙つて完全な理會の便に供しようとするものである。

然し、一般に藝術的作品の完全な理會卽ち、「完全にわかる」又は「完全にわかつた」といふ事實は、果して如何なる程度の理會を意味するであらうか。理會の限界の問題が吾々の前に展開せられる。たとひ、吾々の立つて居る道程の終點に、その限界が横たわつて居ると言ふ事實を知つて居ても、完全にわかる事、卽ち完全なる理會の限界如何は、

旣にフイードレル氏等も述べて居るが如く根本的に解決し、又決定し難い問題となる。卽ちそれは或は心理學の問題であり、又、哲學の問題である。「わかる」又は「わかつた」と言ふ事程、內容の曖昧な語は無い。「あの人間はよくわかつて居る」とか、「この本の內容はよくわかつた」とか、「彼奴はわからない顏をして居る」「彼はわからない事を言ふ」「彼の文はよくわかる」と、「わかる」「わかつた」及びその反對に「わからない」と言ふ中に、理會の段階が幾階級にも區別せられる。恐らくその最終への段階へ到達する事は、恰も影法師を踏むが如く、解釋者の解釋能力卽ち歷史的理性の向上と共に永久に先きに進む事であらう。それは、數學等の如きものと異なつて、文學等の如き藝術的作品の場合には、當然な事實である。故に、理會の段階は、個人が或る作品乃至は或る著者に對して有する解釋能力によつて、その作品乃至は作者又は現象等を消化し類化する程度に依存する。さうして、社會人として持つ人間共通の精神活動によつて、同一共通な理會の段階にも勿論到達するが、一方には、又、理會の限界が個人的に規定せられて來る。同一作品に對しても、中學生の理會と大學生の理會には共通の部分もあり、共通でない部分もある。更に又、斯道の專門家の理會は、一層深いに相違ない。されば解釋學が適用せられた結果は、其處に個人の學識、經驗の深淺・廣狹、性格上の傾向卽ち精神活動の特色が顯現せられて來る。

　卽ち、解釋學としては、それが、たとひ文獻の理會を完全ならしめようとする普遍的な技術學であつても、特殊な個人の學識・經驗・傾向等によつても規定せられる事は當然であらう。同一對象に對しても、此の如き個人的性格を發揮した幾多の解釋學の性格が綜合せられた場合に、一層完全な理會への接近、若しくは到達をなすものである。若し、個人にして各種の性格或は傾向を有し、解釋學の性格を多樣に發揮し、それらを綜合して完全なる理會へと導く

事を可能とする者があれば、かゝる個人の理會は最も尊重すべきものである。けれどもそれは不可能である。又、個人として、或る對象を完全に理會したと考へて居ても、それは、單にその個人の有する學識・經驗・傾向・性格等の範圍内の理會に過ぎない。他の個人は、それよりも完全なる理會をなして居るかも知れない。或は、或る時代に完全な理會と考へられて居たものも、學術の進歩した次ぎの時代には、より高く又深い理會へと進められる事は言ふまでもない。それ等の例は、心理學や病理學や精神分析學や神話學や土俗學等の進歩と共に、それ等の學科の補助によつて、理會の深められて行つたものの少くない事實によつても知られる。

但し、解釋學卽ち Hermenentik の意義は、歷史的に變遷がある。シュライエルマッヘル氏もディルタイ氏も、これに對しては、各自の哲學の立場から說明して居るもので、必ずしも一致するものではなかつた。故に、吾々が古代解釋學を實行する場合には、哲學者の理論をも精確に理會し、これを如何にして古代解釋學に適用するかを考究して後、我が國に於ける古代解釋學を樹立しなければならないものである。

要するに、解釋學は右に述べた如き性質のものであり、これを適用した結果、卽ち、理會が成し遂げられた場合には、前記の如く個人的の規定によつて段階が生じて來るものである。故に、完全なる理會をなさんとする者は、解釋學の理論を理會し消化すると同時に、個人としての學識・經驗——特殊な作品に對しては特に、それを完全に理會するに必要なる學識・經驗・及び性格つまり解釋能力を養はなければならぬ。かくして理會の確實性は獲得せられる。解釋學は一個の寶刀であり、これを使用するは正に個人の腕に在る。

されば先づ、作品の理會をなす人々は、その作品に於ける表現の論理的意義を正確に完全に理會する事を第一とす

る。淵に臨んで魚を羨むが如く、作品を眺めて居るよりも、先づそれに食ひついて、表現の論理的意味を鮮明にしなければならぬ。つまり、表現面の論理的理會である。それによつて、文中の一要素としての語、語の構成した文、或は逆に文中の語等の理會により、部分的要素の連絡から作品全體の結合の頂上迄は、略ぼ完全に近きまで、又は完全に理會せられる。同時に、理會不能の部分の存在も肯定する事が出來る。此處にも亦解釋學の必要を特に意識するであらう。更に又作品の內面に自らを置いて追構成をなすが如き心理的理會へ進まなければならぬのである。

さて、古代解釋學に於て取扱つた上代、卽ち上古から平安時代までは、文學作品に就いても、文學現象や作家に關しても、最も豐富であり、又、潑剌たる生氣が存在した。然しこの期の作品を理會する事は、時代と言ふ霞の彼方に於て眺めるが如き狀態にある。從つて現代の人々が、現代の作品を理會するよりも、より多くの準備工作が必要である。先づ、その作品、或は現象乃至は作家を生んだ母胎に對する、確實にして深い認識を必要とする。然かも、こゝに掲げた上代は、その年數に於ては甚だしく長いものである。故にその間に於ける社會活動の波動をも知り、文化をも知らなければならない。現實に對する確實な認識を持たないで、單に抽象的・概念的にのみ走つて、學問的な建築癖からする思索では何事も出來ないであらう。

今、その波動や文化を此處に述べる事は、限られた紙數に於ては不可能であるが、特に文學方面と密接な關係を有する部分を見れば、外來文化の理會や、社會生活史の理會、美術史、特に佛教美術史と建築史の理會や、政治史・經濟史方面の理會等は重要なものである。又、作家或は作品に對しては、作家的理會の必要は言ふまでもない。作家的解釋は勿論、作品を解釋し理會する事では無いが、作家的解釋によつて、作品の理會は一層、確實性と深さとを增す

ものである。今日、作家的解釋方面に完全な業績は少い。僅に、本朝高僧傳や元亨釋書の類、乃至は三十六人歌仙傳や、中古三十六人歌仙傳や、後のものではあるが大日本史列傳の如きものによる外には、特に注目すべきものが無いのである。

又、創作過程等の理會も重要である。創作過程即ち動機・目的乃至は創作心理の展開等も、作品の本質に關する直接の理會では無いが、作品の本質への理會の確實性を增すであらう。次ぎに、作品の理會に關しては、本文整定の如き準備工作が必要である。古い文獻として存する作品には、特にこの工作を必要とするものが多い。けれども、この準備工作は、原著者の自筆本文に一致するか、又はそれに最も接近したと何人も認定し得る本文に復原するにある。從つて校訂用の本文の多數を資料としても、それらの全部は決して十分な價値を發揮するものではない。それ等が何れかの系統に配列分類せられた時、その各系統中最も參考すべき價値ある一・二のみが重要なものである。同一本文の轉寫本等がたとひ多數存在し、又、誤寫等の異同がそれらの相互に多少存在しても、それらには、悉く校合用に使用すべき價値の無いものが多い。それらの點に關しては、誤れる本文整定即ち校合作用を實行してはならないのである。即ち本文の數よりも質に重きを置くべきものである。

次ぎに、題名の理會を必要とするものもある。正三位物語の岩清水に於ける、さよ衣の異本堤中納言に於ける、濱松中納言の一部が松浦物語となつて居る如きも亦、作品理會の前に當然吟味せらるべきであらう。

それらの後には、前記の如く何人も、先づ作品に直面して表現面の論理的理會をなさなければならぬ。其處には語義・語法の確實なる理會の基礎を必要とする。これが作品理會の基礎となる。この理會が不完全であれば、それ以上

の理會も亦不完全なるを免れない。
更に、表現面の明確な論理的理會の基礎の上に立つて、始めてシユライエルマツヘル氏の所謂心理的理會の方面へ、即ち表現層へ突入して本質的の理會を獲得する事が出來る。或は又、心理學的の理會や美學的理會や、病理學的理會や、道德的理會等も存在しよう。尚ほ又、歷史的理會——研究史的理會等、各角度から解釋學は適用せられて居る。

即ち解釋學は、理會の技術學であるけれども、普遍的な技術學も、これを取扱ふ人の理會の確實さや、廣さ深さに於て各々、理會の特殊的な學的組織を建設するものである。故に、解釋學は自ら解釋者の性格を以て性格とするとも言ふ事が出來よう。從つて、解釋者は先づ自らの解釋能力を鍛錬せよと言ふ事になる。

二　上代文學の環境

今、外來文化即ち佛教及び支那學方面の中、佛教的方面を主として略記して見る。他は紙面の都合上割愛に從ふ。
佛教上、最初に信仰の對象として尊崇せられたものは、彌勒であつた。彌勒信仰は敏達帝の代に鹿深ノ臣が、彌勒の像を將來したに始まる。所依の經典としては佛說彌勒下生經や、佛說觀彌勒上生兜率天經の如き類がある。
蓋し、彌勒の淨土は兜率天であつて、其處は彌陀の極樂に相當する。然し兜率天に五十六億七千萬年も住し、再びこの娑婆世界へ出現して、有緣の衆生を得度する將來佛としての彌勒の事は、佛說彌勒大成佛經の說く所である。かくの如き將來佛であれば、その間に衆生は輪廻轉生して、幾多の苦患を受けなければならぬ。その缺陷を補つたもの

が佛說觀彌勒上生兜率天經である。この經典は、彌陀淨土に對する觀無量壽經に匹敵するもので、彌勒信仰の頂點を示して居る。卽ち人が若し熱心に彌勒を念じ、又、名號を稱へると、死後に兜率天に生れる。或は花香を供すれば、死期に臨んで來迎を受ける。又、禮拜すれば罪障は消滅し、來世に無上の正覺を得る。兜率天卽ち彌勒淨土の狀況も亦、物質的・精神的共に善美を盡して居る。その間に飮食・利便・老衰の三病を現した事も彌勒を信仰させる所以であつた。

要するに、彌勒信仰は彌勒所問本願經の如きものから發達し、更に彌勒上生兜率天經の如きに至つて完成せられて居る。それらの信仰は、藤原仲麿の記した大職官傳に初めて見えて居る。彌勒會の如きは、天平勝寶八年(一四一六)三月、兵部卿正四位下、橘朝臣奈良麿が、志賀の崇福寺に行つて以來、續いて行はれた(榮華物語疑の卷參照)。文學方面には、この彌勒會の外に、龍華三會の事や、兜率天の事や、御嶽詣でや、千日の精進や、南無當來の導師等が見える。何れも彌勒に關する思想や信仰に關係するものである。それらに就いて二三の例を示せば、次ぎの如くになるであらう。

宇津保物語の俊蔭卷の「……我は昔、兜率天の內院の衆生なり」や、佛が天人に對して「……汝等は、昔、勤深く犯し淺かりしによりて兜率天の人と生れにき」など見えて居る。枕草子の「遙かなるもの」の條には「……千日の精進始むる日」とあるのは、大峯に參詣するために千日間精進をなし、その間は、毎日、早く起きて彌勒の名號を稱へて禮拜する。それは、大峯におはします金剛藏王が、彌勒の化現なりといふ信仰に基づいて居る。千日の精進を又、御嶽精進とも言ふ。源氏物語の夕顏の卷には、

鳥の聲などは聞えで、御嶽精進にやあらん、只翁びたる聲にて額づくぞ聞ゆる　：いと哀に何を貪る身の祈りにかと聞き給ふに、南無當來導師とぞ拜むなる。

なども見える。枕草子の「あはれなるもの」の條に「よき男の若きが、御嶽精進したる」なども同じ事である。これ等を通して見ても、平安時代には修驗道が盛に行れたために、その點からも、彌勒信仰は實際生活と可なり密接な關係を持つて居た。枕草子の「思はん子を……」の條に「……驗者などの方はいと苦しげなり、御嶽・熊野かゝらぬ山なく…」などによつても、彌勒信仰に對する理會の必要は明かであらう。これらの外に、榮華物語の疑の卷には、後一條帝が高野に參詣し給うて、弘法大師の入定の樣子を覗き見給うた時にも、

あはれに、彌勒の出世、龍華のあしたこそはおどろかせ給はめと見えさせ給ふ。

などがある。大鏡の道長の條にも、南都の大安寺は間接に兜率天を移して作つた由などを記して居る。又經筒の如きも彌勒信仰に關係するものである。

次ぎに彌陀に關する方面を一瞥する。この方面は文學方面にも甚だ多くの影響を及ぼして居る。

人間が靈魂不滅を考へる時に、輪廻轉生の思想を生じて、未來に理想的な世界が建設せられる。前記の兜率天の淨土がそれであり、又、彌陀の極樂淨土がそれである。彌陀信仰に關する所依經は、所謂、淨土三部經である。

但し、阿彌陀經は彌陀淨土の莊嚴を說いて居るが、西方以外にも極樂が存在し、その佛も亦彌陀に限つて居ない事を述べて居る。これは民衆の信仰を散漫ならしめる故に、信仰の中心點を定め、民衆の信仰心を集中させようとした。その思想的變化は、智者大師の淨土十疑論にも述べて居るが、觀無量壽經によつて推察する事が出來る。即ち觀

無量壽經は、極樂を唯心論的に解釋して居る故に、思想的には進歩した段階を示して居る。尙ほ、阿彌陀經に於ける廿四願、無量壽經に於ける四十八願などによつて、一佛淨土の思想は完成せられて居る。

かゝる淨土思想を見るに、後漢の明帝の時、安世高が無量壽經を譯したに始まり、東晋に道安や、曇鸞が出で、後魏には、菩提流支や惠遠等が出て、淨土敎の地位を確立して、宗派としての存在を明かにした。殊に菩提流支は淨土論を譯し、曇鸞に觀無量壽經を授けたりした。その法流を續いで道綽や善導が出で、惠遠は白蓮社等を結んで弘通に盡力したのであつた。我が國に流布したのは、善道を主とし後にはその一流のみによつて弘通した。その後に靈芝があり、又、惠遠や智者大師等も、自己の宗の外に淨土敎を兼修した。例へば、彌勒淨土は法相宗によつて弘通し、彌陀淨土は三論宗によつて流布して居る。又、唐招提寺の鑑眞和上は律宗の人であるが、その東征傳によれば、我が國へ渡航の時、吉州の邊に、僧祥彥をして西方阿彌陀佛を念ぜしめた事もある。

かくの如く、他宗に附屬して何宗にも信仰せられ、安心立命を得る信仰であつたのが漸次發達し、その方面の著述も多く現れ、彌勒淨土に匹敵する樣になつた。更に唐代には彌陀淨土思想が、支那佛敎思想の指導的地位に進んで居た。それが留學僧等により、又は歸化僧によつて、我が國へ盛に傳來して來たのである。上宮法皇帝說の裏書によると、或本云ふとして、淨土寺の丈六の佛像の事が、舒明帝の十三年三月十五日云云と見えて居る。これは、勿論丈六の彌陀であらう。又、齊明帝の四年、河內國觀心寺にも阿彌陀の像が作られた。それらの後、彌陀淨土敎は盛となつた。正倉院御物中、聖武帝の御宸翰にかゝる雜集中、王居士の作にかゝる奉讃淨土十六觀の詩十三首などは注目すべきものである。

平安時代に到つては、僧源信の往生要集中に細述せられてから、一般の信仰中にそれが根强く流布して行つた。その源流は勿論、天台又は眞言に寄生した如き宗教であつたが、空也上人の彌陀念佛となり、源信に至り、源空に至つて一宗として確立する樣になつた樣である。淨土教の思想や信仰が、國文學に關係を有する樣になつたのは卽ち源信以後である。

源信の往生要集は、彼の教義を說き、同時に我が國に於ける淨土教の根柢をなして居る。その後、覺運や、覺超や增賀や仁賀や、聖空や永觀が出た。永觀は往生拾因を作つて一層この教義の普及を計つたのである。後世、往生傳の類が多く現れたり、又は驗記や、和讃や唱名等にも皆彌陀淨土教が連關を持つに至つた。殊に淨土思想や信仰は、文學と密接な關係を持つに至つて居る。淨土曼陀羅や二十五菩薩等の信仰が物語世界に見えるのも、その本源は淨土思想から來たものである。天王寺の西門に投身する思想は淨土欣求の弊の一面を語つて居る。それ等の例は省略する。

觀音の信仰も古い。これは主として法華經普門品に負ふものであるが、宇津保や石山寺緣起等に見える白馬となつて現れる觀音は、大乘莊嚴寶王經の思想を現したものである。それによつて、觀音の大慈大悲救苦の本願が具象化せられて居る。又、地藏に關する信仰もある。或は末法思想や、新宗教の興起等も、理會して居なければならない重要なものである。

以上は、宗教方面に關するもの丶一斑に過ぎないが、支那學に關する方面の理會も、佛教方面のそれと等しく須要である。

近江・奈良朝の我が漢文學、和歌の修辭等と支那學との關係は密接な地位に立つて居る。單に我が萬葉集の長歌の

格調のみを見て云云しても、漢魏六朝の文筆の形態等に通じなければ、多くの獨斷をなすに過ぎない。

又、天長や弘仁の漢文學若しくは平安中期以後の漢文學は、中唐・晩唐の詩の理會なしには完全な理會は望まれないのである。文鏡秘府論の如き詩論も、殆ど支那人の著述に負ふ所が多い。その序文中にも、劉善經の四聲指歸や、王昌齢の詩格や、皎然の詩式や詩評や、崔融の唐朝新定詩體や元兢の詩髓腦などの事を述べてある。それらは我が歌論を理會するにも必要なものである。

尙ほ、老莊や孔孟の思想は、懷風藻にも甚だ多く現れ、或は陰陽道や宿曜道等は、迷信の多い時代の人心を非常に支配して居た。四十五日の方違や物忌や愼しみは、平安時代の生活の中に多く現れて來る。緯緯の思想の如きも今日は古徵書や玉函山房集佚書等の中、又は鄭玄や何晏の註などに散見するに過ぎないが、奈良・平安時代及びそれ以後の社會生活には、密接な關係を有して居る。

この他、風俗史的方面の理會や、美術史や建築史等の理會も亦有用である。例へば有職や故實や、階級と風俗・習慣や、年中行事、殊に宮廷生活に關する理會等は重要である。或は、美術史中、特に佛敎美術作品に表現せられた精神は文學の上にも反映して居る。聖林寺の十一面觀音に接した人は、それから受ける印象に、懷風藻の詩から受けると同樣な或物を感ずるであらう。それは決して藥師寺の藥師三尊から受ける印象と同一ではないのである。又、法隆寺の金堂に見る天人の畫は、日野の法界寺の天井の天人と同一ではない。法界寺の天人には、矢張り優雅な平安時代の精神に觸れる事が出來る。又、法界寺の阿彌陀堂の建築と平等院と嚴島神社とを比較すれば、何れも軒の中央を一段と高くして變化を求めた中に、自ら又均齊・雅馴な平安時代の精神がなごやかに迫つて來る。これは決して唐招提

寺の建築から受ける重みと力の精神と同一ではないのである。それらも亦大いに文學作品の理會を深め確めるに必要なものである。

又、政治的・經濟的機構に關する理會、莊園制度と公卿の經濟生活や法制や、官職乃至は音樂と宗教と文學等の關係——つまり和讃等の發生に關する理會も亦、各方面から完成せられるであらう。但しそれらは今述べない。

近來は、各學科共に餘り專門化して來てしまつた。從つて所謂ギリシヤ風の研究家と稱せらるべき者は、次第に影をひそめて來る傾向が顯著である。宜しく專門的に分科して研究を深めると共に、又、その研究の地位等をも考慮して狹く深くなる一面を補ふ事も重要である。それ等の意味に於て、右に略述した如き各方面の理會も、決して蛇足ではないのである。

三　古代解釋學の業績

古代の作品乃至は作者に關しては、今日迄に既に多數の年月を經過して居るだけに、解釋學は、各方面に亘つて多樣に適用せられて居る。故にこの時代の作品乃至は作者に關する解釋學が今日最も多い。それは、未だ十分な域に達して居なかつたり、又は一方に偏して居るかも知れないが、何れも將來の、より完全な解釋學への參考となり基礎となる。故にそれ等を、各方面に亘り、又、各種の系列に分類して研究家の參照に供しようとするのである。各方面とは稱するものの、作品の樣式に從ひ、或は便宜上の分類に從ひ、その各項中、更に解釋學の性格に從つて各系列に排列する筈である。次ぎに、奈良以前に關する用意を略述しよう。

一、歴史・地理等に關するもの。この項中には、古事記や日本書紀や家傳及び、それに連關するものと、風土記の類等が集められるであらう。

こゝには神話學や、民俗學關係の研究が必要である。南方諸島の神話に關するもの、或は J. G. Frazer 氏の諸研究、A. lang 氏等の folklore-Society の調査研究等も、將來、解釋學の完全を期する上に參照すべきものが少くない。又、古訓や、古韻等の方面の解釋學は近來盛況に向つて來たが、江戸時代にも石塚龍麿の如きがあり、大正時代には、北里闌氏の日本古代語音組織考の如きもある。或は、記紀萬葉等を古典として、其處に日本精神の機構を鮮明しようとする解釋學の方面も存在する。それらは文學作品を資料としたものであるが、便宜上掲げた。又、記・紀・風土記の歌謠を理會しようとする解釋學も存在し、風土記を民俗學的に理會する解釋學の如きも、旣に多くの業績を殘して居る。

二、祝詞・宣命等に關するもの。祝詞は神への詞であり、宣命は人への詞である。祝詞に關する研究は、特に賀茂眞淵等によつて文獻的な解釋學が遂行せられて居るが、更に之を古代の宗教としての研究は Shamanism や animism 等の方面に解釋學が遂行せられて居る。「草のかきは、本根たちも言止めて」の如き animistic な信仰が、我が上代に存した事を證明する片鱗等も解釋學上看過する事が出來ない。從つて原始宗教關係のものや Czaprica 女史の Aboriginal Siberia や、朝鮮總督府編にかゝる朝鮮の巫覡の如き方面に關するものも多く列擧する筈である。これらは將來更に深く理會せらるべきものである。

宣命に關しては、樣式の理會や用字の理會等の解釋學に關する方面は從來も着手せられて居た故に、文體やヲ用字

法が、朝鮮に於ける吏讀の用字法との關係も亦當然問題となる。故にその方面の研究に關する業績をも列擧した。吏讀との關係は又、萬葉集の表記法や、古事記中、國語の表記法とも密接な關係を有して居る。これらは、直接その作品の解釋學では無いかも知れないが、間接には考究せられなければならぬ問題である。

三、歌謠・和歌及び歌學等に關するもの。歌謠及び和歌は、記・紀・風土記等に關するもの、及び萬葉集を主とする。歌學に關するものは所謂平安末期頃から多く現れて來たが、これは支那詩論の如く修辭的方面もあるが、作家的解釋や訓詁的解釋が寧ろ多い。

これらの中、歌謠の發生や起源やリズム等に關する解釋學もある。それらは、アイヌの歌謠や、南島民謠や琉球の歌謠、若しくは mincopy 族や Botokudo 族等の如き民族の舞踊や歌謠をも參照せられなければならぬであらう。又、和歌としては、五七の音調論や形態的方面や體系的方面や、その他に解釋學は適用せられて居る。さうして何れも、將來更に確實性に富み且つ深い理會への基礎となつて居る。尙ほ、歌學中に見る歌論の理會は、六朝や唐に於ける詩話即ち支那の詩論に負ふものが少くない。故に支那詩論にして、我が歌論に關係を有する方面は又列擧しなければならぬ。

就中、萬葉集に遂行せられて居る解釋學は最も顯著である。これを整理分類して各系列に類聚すれば、これに關する從來の解釋學の狀態を知り、將來、解釋學の遂行せらるべき諸點も自ら明瞭になるであらう。

四、漢詩文に關するもの。佛敎と共に我が國民の精神生活及び日常の實踐道德上に、偉大なる影響を及ぼしたものは、支那學であつた。故に、懷風藻中の詩に關しても、神仙思想も老莊の思想も孔孟の思想も、明確に指摘する事が

出來る。又、詩の形態的方面には魏晋乃至は初唐の影響が甚だ多い。故に、懐風藻を理會するためには、それらの支那思想や、支那詩論等の理會なしには、解釋學は遂行し得ないであらう。それらの方面も亦、各部門の系列を明確にする様に參考すべきものを列擧した。

これ等の外に金石文の注目すべきものも存在する。然しそれらに對しては、單に文獻的解釋學の一部の適用せられて居るに過ぎない狀態である。十分なる解釋學は將來に期待せられるであらう。又、聖德太子に關する傳記的の解釋も、釋思託の上宮太子菩薩傳の如きを始めとして、甚だ多い事も看過するを得ないものである。

以上は、所謂奈良時代以前に於ける主要な方面に關して、從來既に存した解釋學を——たとひ不完全であつても——列擧する用意を一言したものである。次ぎに、所謂、平安時代に入つては、特に文質彬々である。

一、歌謡に關するもの。これには神樂、催馬樂や琴歌譜があり、和歌も亦其注釋になつて居る。今日、勅撰集・私撰集・家集の類が甚だ多く、殊にこの中期以後には、文獻的解釋學が遂行せられて來た。或は、音樂と宗教と歌謡とを併合した宗教文學も注目すべきものとして現れて居る。聲明や和讃の理會は、先づ當時の宗教思潮を解釋する事に據らねばならない。

二、日記・紀行・隨筆等に關するもの。土佐日記や蜻蛉日記等に關するものに遂行せられた解釋學の業績は、特に江戸時代に入つて顯著であつた。けれども、唐大和上東征傳や入唐求法巡禮行記・行歷記乃至は參天台五臺山記等の如きものには、未だ十分なる解釋學は遂行せられて居ない。只、作家的解釋が、本朝高僧傳等の如き類に遂行せられて居るに過ぎない。

三、漢詩文等に關するもの。平安時代の初期に、勅撰の三詩集の出現した事は注目すべき文學現象であつた。然しそれらの母胎をなすものは、初唐以後の唐詩の影響であつた。幾多の唐詩が舶載した事を知り、且、それら唐詩の作者・作品の特色を理會すれば、平安初頭の詩の理會は十分に成し遂げられる。それらの舶載詩文集の主要なものも參考として列擧するであらう。又、我が國に於て村上帝頃に文選集註の出來た事等は特に注目すべき現象であつた。

又、弘法大師の文鏡秘府論には、その序に、沈約や劉善經や王昌齡、皎然や崔融や元兢の名が見え、「盛んに四聲を談じて爭うて病犯を吐く云云」とも見える。弘法大師は勿論、沈約の永明體の詩や、既に前に掲げた劉善經の四聲指歸や、王昌齡の詩格や皎然の詩式や、元兢の古今詩人秀句や詩髓腦などを理會し參照して居た。それらの詩作の書や、古今詩人秀句や河嶽英靈集の如きも解釋學上重要なものである。

元兢の詩髓腦に從つて、源順は新撰詩髓腦を作つた。その後に中御門宗忠の作文大體や、更に菅原爲長の文鳳抄の如きものは、共に平安時代末期の我が文人の詩文を理會する上に須要なものである。同時に、類書の一系列も亦、平安時代の詩文解釋學上看過する事が出來ない。卽ち、華山遍路や修文殿御覽や白氏六帖、太平御覽等の類は少くないであらう。

これ等の外に神仙談や、説話の如き類で、國文學作品に關係深いもの等は、解釋學上、直接間接に重要な影響を及ぼして居るものである。故にその點も亦、注意しなければならぬから、排列するであらう。

四、物語等の方面に關するもの。物語と言ふ名稱によつて總括せられる中にも、歌物語や歴史物語や、説話物語等多くの分類が行はれて居る。歌物語中には、伊勢物語に對する解釋學の業績が最も多い。又、寫實的の物語としては

源氏物語に關するものが最も多かつた。

源氏物語の文獻的解釋學は、泯江入楚によつて略々集大成せられた觀がある。けれどもこれは、單に語句に關する解釋學が所謂 Küsten-fahrts methode に於て遂行せられたものに過ぎない。かゝる方法は、從來の我が國文學及び支那學方面に專ら行はれたもので、訓詁註釋と稱せられる方法と相近接したものである。然し、我が國に於ても訓詁註釋は決して完全に遂行せられたものは無かつた。皆この訓詁註釋的傾向を取つて不徹底の中に停止して居るに過ぎなかつた。但しそれが徹底しても、文學作品の研究からは益々遠ざかるものになつてしまふ事は言ふ迄もないが、決して無用なものではない。獨乙などに於ては、既に十七世紀頃に、Dünzer 氏の有益なる Erläuterungen zu Deutschen Klassikern の如き基礎的研究が實行せられ、創作動機や過程や本文成立や原典等に亘り、忠實な研究を遂げて居るが、我が國に行れた訓詁註釋の從來の方法は、島の周圍を運航するが如く、一語・一句の周圍を遂行して益々中心から離れるの嫌があつた。所謂 Küsten-fahrts-methode と稱せられるものである。然しかゝる業績も亦、完全なる解釋學上には有力な參考となる。我が國に於て、かゝる方法の完全に近いものは、故柿村重松氏の本朝文粹註釋を擧げ得るのみである。徒然草諸抄大成も亦、この類の稍々徹底したものであらう。

却說、泯江入楚は、大體に於て前記の如き解釋方法の上に立つて居るが、その他の源氏物語研究は、社會史的解釋學に屬すべき業績や、その他各方面に不完全ながらも解釋學は遂行せられて居る。それらを分類し、各系列を備して列擧するであらう。

說話物語等の中には、世俗的のものを素材とする一種、及び宗教的素材を用ひたもの等がある。又、今昔物語の如

く佛教と世俗とを合せ含むものもある。

その他三寶繪詞の類や、往生傳類や法華驗記の類や法華傳、緣起の類、辭書・字書等にして解釋學上須要な類も少くない。或は往生要集以下、淨土教關係の作品や末法思想や、神道――兩部神道等、上代の作品の理會に必要なものは、即ち解釋學の性格に從つて分類し、輕重を判別して列擧する筈である。

古代解釋學

〔後篇〕研究參考要目

川瀬一馬

研究の手續の上から時期を奈良朝と平安朝とに二分し、更に各系列に就いて略記した。一書目中の各項に就いては、それぞれ多少の取捨を行つたが、大略、成立その他輪廓・本文・諸注・參考等に分ち、參考の項は、雜誌所載の研究論文が多數を占める場合には、略〻内容に關するもの、書誌學的なる研究を主とするもの、及び附屬的研究等に大別した。但しその數の少いものは便宜併合して特に別を設けない。又、補助參考とす可き他の方面の研究書等は、奈良朝に於いては便宜、各作品の關係事項に附屬し、平安朝に於いては、卷末に一章（第六章）を設け纏めて附載した。もと本稿は啓蒙を目的とするものであるが、その取扱ふ可き範圍が頗る廣く、然も執筆紙數の限定もあるので、自ら幾多の不備遺漏あるは免れ難い。

なほ、「日本文學大辭典」「日本文學史表覽」等の檢索、各講座の項目等の參照に據り、本稿と類似の目的を遂げる事も出來るが、又一には、國文學通史等の概說も一通り參考となる。在來のものでは、次田潤氏「國文學史新講」がよい。少し前のものでは、國文學通史（坂井衡平）等は比較的知識を授ける事多く、又、最も教科書的に簡要なものは、國文學史總說（藤村作編）である。

第一章　奈良朝

一　序說

奈良朝以前にも文學書の存在した跡は認められるが、皆湮滅して、國文學の研究資料として現存するものは殆ど奈良朝以後に編纂記錄せられたものである。奈良朝には文運の隆昌に從ひ國家的の仕事として史傳の類を初め種々の編纂が行はれ、詩歌集等の文學書も多く編まれた。然しながら、それ等多くの文獻は傳流の間に、或は原本を失ひ、或は全く佚亡し、又、僅かに斷簡のみを殘すものも少くない。江戸時代以來諸學者の研究に據つて漸次、佚存の明らかになつたものもあるが、なほ今後の探索と研究とに據つて發見を期待すべき部分が多いのである。現存の奈良朝以前に於ける國文學書並びに國文學に關係の深いものは、古事記・日本書紀・古風土記・祝詞・宣命・萬葉集・佛足石歌・歌經標式・懷風藻及び上宮聖德法王帝說・唐大和尚東征傳・藤氏家傳・高橋氏文等である。その中には一少部分しか殘存しないものもあるが、他に正倉院文書・金石文等の中にも、國文學の資料として參酌すべきものも若干存在し、又、平安朝極初期の編纂になるものの中にも、前代の作品を傳へ、舊記を含むもの、例へば神宮儀式帳・尾張熱田太神宮緣起等の類もある。然しながら、奈良朝に於ける國文學の研究資料は之を平安朝以後に比して、その分量が遙かに少い。その少い事が一因でもあるが、第一資料の殆ど全部が公刊せられ、凡ての研究者に對して研究の機會均等が與へられてゐると言つてよい。又、江戸時代、國學の發達と共に、記紀萬葉以下の研究業績にも大いに見るべきものが現はれ、平安朝以後の國文學書に於ける先人の研究業績が特殊な例を除き眞に據るべきものの僅少であるのに

比較して、後の研究者が根底として出發し得べき業績の豐富である事も亦注意すべき事である。之は一には、奈良朝の典籍が漢字若しくは漢文を以て表記せられてゐて、江戸時代諸學者の研究態度に適合してゐた事もあるであらう。然しながら、本居宣長の記傳以下優れた研究業績も、時運の進展に從ひ、新資料の發見の増加と研究の進歩とに據つて改むべき部分も少くない。漢字のみを以て表記せられた文獻に於いては、新たに發見せられた善き本文を有する傳本の校勘に據り、再び本文の鑒定を行ふ事が第一に要求せられる。之に據り更に改訓の行はるべきは論を俟たない。このより善き本文に基いて新しき諸方面の研究は更に幾多の進展が期待せられる。奈良朝以前の文學研究に於いては史學・考古學・人類學・宗教學・神話學・民族學、又は言語學等、我が國に於いては比較的新興の諸學科の補助に據り、新たに考究せらるべき點が多く殘されてゐる事は言ふまでもない。なほ茲に注意すべきは、本文鑒定の業の半にある現在の學界に於いて一般の學徒が所依とすべき本文の問題である。文學史家を初め諸方面の研究者が、新しき抱負と見解とを持して研究に從ふ場合、この問題に對する反省が怠られ易い。流布通行し來つた本文は概して、幾多の誤謬と缺點とを保有する。江戸時代に無反省に公刊せられた本文が明治以後その儘繼承せられ、近時漸く善本が公刊せられるに至つて、次第にその更代が行はれつゝあるけれども、なほ一般研究者が、比較的簡便に善き本文を求むる事は必しも容易ではない。かゝる狀勢にある現在に於いては、研究者は如何なる本文を用ひるとしても、必ず所據の本文の性質を明記して所論を進むべきである。奈良朝文學の研究に於いては、前述の如く後世の文學に比して第一資料が殆ど公刊せられてゐてこの弊に陷る事も比較的少いが、その方面の條件に惠まれてゐるから、特にこの點に對する留意が要求せられるのである。

次に奈良朝文學全般に亙る研究の參考すべきものを擧げる。之に就いて注意すべきは、研究の分野が廣汎であるから、諸方面の人々に據つて研究業績の公表せらるるものも多種多樣であるが、要するに奈良朝文學の在來の研究の企成果と今後の動向とを知るには、絶えず奈良朝文學の研究に主力を注ぎ、その研究の中心に立つ眞摯なる若干の學徒の業績のみを注目すれば、充分であると言ふ事である。

なほ初學の入門としては一般の國文學通史の類を先づ參照す可きであるが、玆には重ねて擧げる必要もあるまいと思ふので省略に從つた。又、參考とす可き補助的なる研究は適宜各書目の條に附記する。

◇武田祐吉博士「上代國文學の研究」(大正十年刊)「上代日本文學史」(昭和年刊)○久松潛一博士「上代日本文學の研究」(昭和二年刊)・「上代民族文學とその學史」(昭和九年刊)
○倉野憲司氏「上代文學の研究」(昭和四年刊)・上中古文學論攷(昭和九年刊)○德田淨氏「原始文學考」(昭和五年刊)
○植木直一郎博士「日本古典研究」(昭和二年刊)
○折口信夫博士「古代研究」第二部國文學篇(昭和四年刊)
○土田杏村氏「國文學の哲學的研究(第二卷)文學の發生」第一章至六章(昭和三年刊)
◇「上代文學講座」(六卷、六册)○「古代及奈良朝文學概說」久松潛一(新潮社日本文學講座)○「日本文學史大和時代」折口信夫(岩波講座日本文學)
◇○國文學研究(上代文學特輯)昭和五年十月第一書房刊、上代文學關係の論文(倉野氏論文他九篇所載)○「口誦文學號」(文學二ノ二)萬葉を中心とする上代文學の研究雜誌「奈良文化」等があり、又佛教美術關係の「寧樂」・「佛教美術」其の他諸雜誌の上代文學に關する特輯號もある。
◇〔附一〕○津田左右吉博士「國文學に現れたる我が國民思想の研究」(貴族文學の時代)・「上代日本の社會及び思想」(昭和八年刊)○大西貞治氏「古代純日本思想」(昭和二年刊)「古代日本精神文化の研究」(昭和六年刊)○野村八良氏「上代文學に現れたる日本精神」(昭和六年刊)○菅原重雄氏「日本精神史としての上代文學の展開」(昭和九年刊)○清原貞雄氏「日本古代思想の研究」○橋惠勝氏「日本古代思想史」(大正十一年刊)○城戶幡太郎氏「古代日本人の世界觀」(昭和五年刊)
◇〔附二〕○安藤正次氏「日本文化史」古代篇(大正十一年刊)○和辻哲郎博士「日本古代文化」(大正九年刊)○西村眞次氏「日本古代社會」(昭和三年刊)○高橋健自博士「古墳と上代文化」

二　古事記

【撰者】　三卷。太安萬侶の撰で、其の成立の由來は序文に見えてゐる。（弘仁私記序にも見ゆ）。和銅五年正月二十八日に上奏。

【本文】　◇（イ）寫本　日本書紀には鎌倉以前の古寫本の現存するものも少くないが、古事記には上卷抄の他、鎌倉以前の古寫本の傳はるものなく、南北朝の書寫になる眞福寺藏本が最も古く、時代を降つて慶長元和年間の書寫に係るものさへ極めて少數である。

○眞福寺本　三帖。名古屋大須（觀音）の眞福寺寶生院藏。故に「眞福寺本」「大須本」と稱する。國寶。應安四・五年に眞福寺の僧賢瑜の書寫したもの。蓬左文庫には往時稻葉通邦の轉寫した一本がある。（古典保存會玻璃版覆製）。次田潤氏の古事記新講（増訂版）には活字に飜印したものが附載せられてゐる。古典全集所收本・藤村作博士編「校訂頭註古事記」（至文堂刊）も之に基く。◇（參考）菅政友「眞福寺古事記由來考」菅政友全集（國書刊行會）・安藤正次氏「眞福寺本古事記中卷奥書の研究」（史學雜誌三三ノ一一）・山田孝雄氏「眞福寺本古事記解說」古典保存會複製本附解說・（典籍說叢（昭和九年刊）所收。）

○伊勢本　上卷一册。松井簡治博士藏。伊勢度會郡道照院祐綱法印の秘本を憲親が書寫した本を以て應永三十一年六月二十八日道祥が興光寺本に據つて書寫し、校合したもの。故に「道祥本」「應永本」等とも稱する。もと足代弘訓より和學講談所へおくつたものである。卷末識語の下半が破損してゐるが、未だ完全してゐた時に傳寫したものに據つて卷末識語の原文は明確である。伊勢本及び伊勢一本といふのは尾州家で考異を行ふ際に初めて用ひたものである。

○伊勢一本　上卷一册。御巫清白氏藏。（古典保存會覆製）右の伊勢本を應永三十三年八月九日春瑜が轉寫したもの、故に「春瑜本」とも稱する。伊勢本は共に眞福寺本に後れる事約五十年許り、本文も之に近いが、間々異る部分があつて、全く同系統の傳本ではない。◇（參考）「在伊勢古事記古寫本について」岡田米夫（歷史と國文學六ノ一）

其の他慶長前後迄の寫本には、前田家本（上卷に大永二年卜部兼永が家傳本を以て書寫校合の奥書があり、更に慶長十二年勅本を以て春日の社家祐範が校合したといふ奥書がある。尊經閣文庫藏）を初め、この卜部家の傳本を轉寫したものがある。內閣文庫藏本（御書籍來歷志本、駿河御讓本慶長十九年書寫、吉田神龍院梵舜（卜部家）の家康に獻じたもの）・脇坂安元藏本（右の梵舜進獻本に據り元和頃書寫したもの、近時世に現れた。）・蓬左文庫藏本等は其の類である。

江戸期の傳寫本は神宮文庫（四本）・京都帝國大學（二本）等の諸文庫に藏せられるものもあり、就中靜嘉堂文庫には田中頼庸が校訂古事記に用ひた寛永十五年本（轉寫）等の六本と山田以文舊藏の江戸初期寫本等がある。

○古事記上卷抄　眞福寺藏。

上卷の建御名方神の事蹟に關する部分を他の舊記と共に抄錄したもので、古事記中の一少部分であるが、鎌倉末期、若しくは南北朝を降らざる書寫と認む可き現存最古の古事記寫本である。(古典保存會玻璃版覆製)

◇(ロ)**刊本**　寛永二十一年刊附訓刻本(三冊)が最も古い。次いで刊行せられたものには、○度會延佳校訂「鼇頭古事記」(貞享四年刊三冊)訂正古訓古事記(宣長門、長瀬眞幸が古事記傳の說に據り享和三年校刊。明治初年改版。)「○校正古事記」(三卷三冊。明治八年尾州家校刊。明治九年刊本は慶勝侯序あり。)等がある。又、尾州家にて眞福寺本を初め伊勢(二本)等の七本を以て校異を示した「古事記考異」(刊一冊)がある。

◇(ハ)**活版本**　○「校訂古事記」(田中頼庸校訂。眞福寺本初め諸本を校合、異同を註し、新訓を試む。三冊。明治二〇年刊。)

○「校定古事記」(本居豊穎等校。明治四十四年、古事記撰進千二百年會記念、皇典講究所版)○新しいものでは、前記の藤村作博士編「校訂頭註古事記」至文堂刊一冊。眞福寺本を底本とし、諸本を以て倉野氏校訂)が訓み下しで便宜である。

【諸註】　古いものには古事記裏書(應永三十一年道祥寫、神宮文庫藏一冊)がある。卷末に「文永十年二月十四日巳剋僉文註之」とある。卜部兼文撰。上中二卷の裏書、兩卷中の數項につき若干の考證を行つたもの。岸本由豆流が發見し、文政五年に上梓した。(一冊)(古典保存會玻璃版覆製)

江戸期のものでは、前述の鼇頭古事記の後に、賀茂眞淵の「古事記頭書」「假名書古事記上卷」(寫本)が出で、次に本居宣長の「古事記傳」が大成した。◇(參考)(石井庄司氏「賀茂眞淵の古事記研究」(昭和四年五月國史と國文)「眞淵の假名書古事記について」(昭和六年七月國文學誌)

○古事記傳　四四卷附錄目錄各一卷、四八冊。明和元年(宣長三五歳)至寛政十年(六九歳)の歳月を要して成り、刊行は寛政二年に初帙五冊が出て、文政五年に全部完成した。古事記の註釋は本書に據つてはじめて結成し、以後の諸註は皆この書に基いてゐると言つてもよい。其の研究態度の科學的である事は、江戸以前に於ける我が先人の研究業績として契沖の研究と共に特異な位置を占めるものである。斯學の進んだ現在に於いて古事記傳の訂正せらる可き點は多々あらうが、永く古事記研究者の立脚地たる事には變らないものである。(本居宣長全集所載)◇(參考)村岡典嗣博士「本居宣長」(昭和三年刊)(佐々木信綱博士「賀茂眞淵と本居宣長」大正六年刊)

古事記傳の後に之に對抗して現れたのは左の二書である。

○富士谷成章の「古事記燈大旨」(二卷二冊文化五年刊)「古事記燈神典」(自筆稿本、京大文學部研究室・加賀豐三郎氏・上田萬年博士分藏。)大旨は古事記の總論で、自家の言靈說を以て哲學的考察を行つたもの。(大正十四年岡三郎校刊一冊。)神典の部は、自筆稿本のみ傳はり、神代卷について神典解釋上の自說を述べたもので、守部と同じく本文に入つてゐない。◇(參考)石井庄司氏「富士谷御杖の古事記研究」(國語國文の研究第四六號)

○橘守部の「難古事記傳」五卷、天保十三年刊（守部全集第二）は古事記傳（神代卷）に對する論難二百十九條をあげ、語釋考證等を行ふよりも、神典解釋上の主張を述べてゐるが、宣長の說に對し故意に反對した嫌ひがある。

○新しいもので、初學者の道しるべとなるものには、「古事記新講」（次田潤著。一册。明治書院版。紀傳の訓により若干新しい研究を參照）

【參考】 古事記の研究は、其の註釋が宣長に據つて一應大成せられたが、明治以後、本文校訂の業績は、古寫本其の他の探索に據り、著しい進展を見せたものといふ事は出來ない。漢字のみを以て記るされてゐるから、本文の校訂と訓法の研究とは第一に必要であるが、其の二つの業績は、萬葉集に比して資料の少い點もあるが、大分後れてゐる。

唯其の間に文學家と史學家と兩方面より考究が行はれ、古事記の本質についてに、津田左右吉博士の新研究が現れ、（古事記及日本書紀の新研究、大正八年刊）學界に問題を提供した。部分的に再考を要す可き點は別として、其の通說と異なる觀點は深く注意せらる可きものである。津田博士の說と其の方向が相似し、更に其の本質を究めたものと認む可きは白鳥庫吉博士の所謂「東洋文庫東洋學講義」（昭和二年講）である。未だ公刊せられないのは遺憾であるが、今日なほ古い神道諸流を脫し得ぬ傾きのある古事記の研究業績は博士の說に據つて重大な暗示を與へられるに相違ない。之は次に述べる日本書紀に就いても同樣である。

◇津田左右吉「古事記及日本書紀の新研究」（大正八年刊）・「神代史の研究」（大正十三年刊）・「日本上代史研究」（昭和五年刊）・「上代日本の社會及び思想」○倉野憲司「古事記の新研究」（昭和二年刊）○安藤正次「古事記解題」（世界聖典全集）

◇○「古事記に於ける特殊なる訓法」三矢重松（國文學の新研究）○「古事記の訓法」石井庄司（國文學誌七）「古事記訓義考」山田孝雄（アラヽギ一四ノ六）○「古事記行文の一研究」安藤正次（國語國文三ノ二）◇「古事記は僞書か」中澤見明（史學雜誌三五ノ五）○「古事記僞書說に就いて」安藤正次（史學雜誌三五ノ九）○「古事記は僞書か」中澤見明對山本信哉會話（國學院雜誌三〇ノ八）「荷田家三代の古事記研究」石井庄司、京大記念論文集

【附一、神話學】

○高木敏雄氏「比較神話學」（大正十三年刊）・「日本神話傳說の研究」（二册大正十四年刊）高木敏雄氏○「神話學論考」松村武雄（昭和四年刊）○「日本文學に現れたる神話」松村武雄（新潮社日本文學講座）○「神話學より見たる國文學」松村武雄 岩波講座日本文學）○「古代傳說の比較研究」土居光知（岩波講座日本文學）○西村眞次「神話學概論」（昭和二年刊）○宇野圓空「宗教民族學」（昭和四年刊）○（附）「古代船舶研究」（西村眞次）○Frazer, J. G. The golden bough. 1920—參照 ○Lang, A. Myth, ritual and religion. 1913.—. Custom and Myth. 1910.

【附二、國學の研究】

○河野省三氏「國學の研究」（昭和七年刊）○伊東多三郎氏「國學の史的考察」（昭和七年刊）○清原貞雄氏「國學發達史」（昭和二年刊）○野村八良氏「國學全史」（昭和四年刊）○竹岡勝也氏「近世史の發展と國學者の運動」（昭和二年刊）○村岡典嗣博士「本居宣長」（昭和三年刊）○藤岡作太郎博士「國學史」（東圃遺稿）（明治四十四年刊）

【附三、神祇史・神道史】

○佐伯有義「大日本神祇史」（大正二年刊）○宮地直一「神祇史綱要」（大正八年刊）○河野省三「神道の研究」○アストン「日本神道論」（補永茂助譯）○「新撰姓氏錄考證」（二冊）栗田寛○「大日本神名辭書」（大正元年刊一册）

三　日本書紀

【撰者・書名】　三十卷。養老四年五月舍人親王等奉勅撰。（續日本紀・弘仁私記序。）續紀に「日本紀三十卷系圖一卷」とあるが、今は系圖を佚し、書名も「日本書紀」と言つてゐる。現存日本書紀には大分後人の手が加はつてゐる。

【本文】◇（イ）寫本　日本書紀には平安朝初期の書寫と認む可きものを初め室町期に至る古寫本頗る多く、在來知られてゐるものは大體「撰進千二百年記念日本書紀古本集影」（大正九年刊、一册）に各本の片影及び略解があり、又「日本書紀編纂千二百年記念展觀目錄」（大正十二年五月十日京都に於ける展觀會目錄假一册　諸本の識語等のみを記載し口繪寫眞を多く附載す。）に據つて大略を知り得る。又、以下に略說した圖書寮御藏本以上の最古鈔本を集めて大阪毎日新聞社で覆製したものがあり、其の解題も參考となる。

現存最古の寫本は、○(1)佐々木信綱博士・田中忠三郎氏所藏の平安朝初期寫本で、佐々木本は神代卷上一書曰の伊弉諾尊が黃泉國より逃還り給ふ條十行程の斷簡、田中本は應神紀一卷（首尾各一張缺）、もと同じ寫本の分離したものである。（大毎「秘籍大觀」第一所收覆刊）

○(2)東洋文庫藏本（推古紀・皇極紀の二卷）は廣橋家舊藏、平安朝（宇多・醍醐天皇間）書寫。（大毎秘籍大觀第一期覆刊）（參考）「岩崎文庫所藏尙書及び日本書紀古鈔本に加へられたる乎古止點に就いて」（吉澤義則博士）及び黑板勝美博士解說を附す。大正八年刊岩崎文庫覆刊）

○(3)前田家本　（仁德紀[illegible]・雄略紀（傳教通筆）・繼體紀・敏達紀（二卷傳能信筆）の四卷）道長の子等の寄合書と傳へてゐるが、大略同時代の書寫には相違なく、東洋文庫に次ぐ古寫本である。この書に就いては、前田松雲公の蒐書事業を見る可き温故遺文（高木文庫藏、寫廿三册）に詳しく見えてゐる。（大毎秘籍大觀第一期覆刊）

○(4)北野本　神代卷下、雄略紀及び神代卷上の末尾を缺く他は全部あるが、次第に補鈔せられ、吉澤博士に據れば推古紀至天智紀六卷は院政初期頃、天武紀以下の三卷は鎌倉頃、他の十五卷は南北朝前後、三卷は卜部兼永等の書寫に係る。北野神社藏。

○(5)圖書寮御藏本　神代紀下・應神紀・履中紀至繼體紀・用明紀

至皇極紀まで十七卷、舒明紀には永治二年の奥書がある他、卷に據り筆者を異にするが、大部分は鎌倉以前の書寫に係り、嘗て北畠親房の手にあつたものである。（大每秘籍大觀第一期覆刊）鎌倉以後のものは頗る多く、枚擧に遑がないから略するが、就中卜部家の系統本を傳へたものが多い。

◇（ロ）**刊本**　慶長四年後陽成天皇の勅に據り開版した大型の木活字印本神代卷が最も古く、（上下二卷一册、神宮文庫藏本のみ原裝（二册）◇（參考）近藤守重「慶長勅版考」（右文故事所收）・鈴鹿三七「勅版集影」近刊拙稿「古活字版の研究」）○他に之に基いて覆印した慶長元和年間印行の古活字版が數種存する。三十卷全部を刊行したものは、慶長十五年刊古活字印本（十五册）で神代卷は勅版本に據り、以下は三條西實隆（亞槐）書寫の卜部家本に據つて印行した。右の慶長十五年刊本に附訓を施して覆刻した整版本には寛永頃の無刊記本や寛文九年刊本及び無刊記重刊本等種々あり、江戸末期の諸學者が校勘の底本としたものは寛文九年刊本が多い。江戸末期の刊本には黑羽領主大關增業が文政三年に校刊したものが知られてゐる。

◇（ハ）**活版本**　○田中頼庸「校訂日本紀」（神代卷二卷二册、明治一四年刊。諸本校合、校異を頭註）○國史大系本（第一卷）寛文九年刊本を底本とし、小中村清矩博士が内藤廣前校本によつて異同を註せるものと、通證・集解等若干を以て校正す。○（經濟雜誌社）「六國史本」國史大系本に古寫本を以て校合（大正四年刊）○（朝日新聞社）「六國史本」經濟雜誌社六國史本に東洋文庫藏古寫本、無窮會文庫藏本等を以て校正し、頭註若干及び索引を加ふ。○訓み下しのものでは最近岩波文庫本として黑板勝美博士編の初學に便宜なものが出てゐる。

【諸註】　古へより朝廷で講義が行はれ、其の記錄が「私記」として傳へられ、弘仁私記の序文・延喜の矢田部公望私記の斷簡等がある。（私記四本、新訂增補國史大系第八所收）神代卷のみは神道・佛教の方面から、種々の考說が行はれ、神道では殊に卜部家の傳統に育まれた種々なる註解もあり、又、同族の清原家等紳縉儒流の手に據り講ぜられたもの（日本書紀抄。清原宣賢の假名講說。二卷本と三卷本とあり（共に古活字印本あり、稍內容異る。）古寫本の現存せるものも內容を異にするものあり、又後に枝賢等の改講せるもあり。）も少からず殘つてゐる。稍纒つた古い註釋として注意す可きものは、釋日本紀と日本紀纂疏（神代卷のみであるが）とである。

○**釋日本紀**　卜部懷賢撰。二十八卷。刊十五册、古寫本も多く傳はつてゐる。四卷までは開題序說、以下全卷に亙り簡單な註を加へてゐるが、今は佚書となつてゐるものを多く引用してゐるから其の點にも亦價値を見出す。（新訂增補國史大系第八所收本、本文よし。）

○**日本紀纂疏**　一條兼良撰。八卷。神代卷のみ漢文を以て註す。刊本、二册。寫本として傳はるものは三册。

江戸期以後の主要なるものとしては左の三書である。

○**日本書紀通證**　谷川士清（コトスガ）撰。三十五卷。二十三册。寶曆十二

年刊。本文を全部掲げず、一節宛を標出して漢文を以て考註を加へたもの、先人の註を多く引用してゐる。

○日本書紀集解　河村秀根撰。三〇卷。二〇冊。天明五年刊。本書も漢文を以て考註（本文の間に注雙行とす）を加へ、諸書を援用して典故を明らかにし、全譯としては要を得てゐる。

○日本書紀通證　谷川士清撰。七〇卷。五冊。明治三六年版。（昭和　年新訂版、索引共六冊）諸註の集成で最も詳しく、書紀を調べるものの必讀書である。

【參考】　在來の諸註の訓詁的解釋は、其の後重要なる多數の古寫本の發見に據つて改められねばならぬ部分が少くない。古寫本を以て本文を校訂する事も近時行はれて校訂本も出たが、なほ其れ等は根本的にやり直しをする必要がある。從つて其の訓法の如きも、其の新しい本文整定の上に立つて、音韻其の他の研究に據り更に考究せられなければならない。又、在來も文學史家の手にかゝるよりも多く史學家の研究に委ねられてゐたが、之を現今の史學・考古學・神話學等の立場から見れば、今後なほ在來の研究の未だしき點を進め得べきものが多々あるのである。

◇津田左右吉博士「古事記及び日本書紀の新研究」（大正八年刊）・「神代史の研究」（大正十三年刊）・「日本上代史研究」（昭和五年刊）・「上代日本の社會及び思想」（昭和八年刊）○松岡靜雄氏「紀記論究」（昭和六年刊、八冊。）○太田亮氏「日本古代史新研究」（昭和三年刊）◇「書紀の書き方及び訓みかたについて」津田左右吉（史學雜誌昭和八年四月）◇「日本書紀の古訓に關する二三の研究」神田喜一郎（國語と國文學十一ノ九）

【附説一、漢籍の記紀に及せる影響】

紀記の編纂に當つて支那上代の書籍が參酌せられた事は、既に先人の説いた如くである。史記・漢書等の史書、淮南子・呂氏春秋等の傳説圖書を集録した類のもの、及び經書に對する緯書類（古緯書・玉函山房輯佚書等參照）（日本國見在書目參照）が其の主なるものである。（參考）◇「我が國上代に於ける漢籍の傳來」川瀬一馬（書誌學二ノ五）◇「東大寺獻物帳」（帝室博物館刊）

【附説二、支那文獻より見たる上代日本】

○「異稱日本傳」松下見林（元祿六年刊。十五卷、十五冊。（史籍集覽所收）○「續日本異稱傳」尾崎雅嘉（靜嘉堂文庫藏本等、寫本の儘傳はる。）○なほ[illegible]諸論文參照

附記紀歌集

特に記紀の歌を集め、之を註解したものが相當あり、又實際にこの種のものが要求せられる場合が多いので、茲に附記する。

【刊本・活版本】　○紀記歌集　林諸鳥編。二卷、二冊。天明八年刊。書紀の歌謡と、書紀に漏れた古事記の歌謡とを集めたもの。（有朋堂文庫「六九」古代歌謡集所收）

【各註】　釋日本紀を初め古いものも數種あるが、江戸期以後の主なるものは左の數種である。

○厚顔抄　契沖撰。三卷、三冊。（契沖全集所收）卷一・二

紀・卷三記の歌。

○日本紀和歌略註・古事記和歌略註　賀茂眞淵撰。（賀茂眞淵全集所收。）厚顏抄の說に自說を加へたもの。○古調考（本居大平撰、本居全集所收）

○日本紀歌廼解（槻乃落葉）　荒木田久老撰。三卷、三册。寬政十一年刊。紀の歌の註解としては最もよい。

○稜威言別　橘守部撰（橘守部全集所收。）なほ他に、○古訓抄（一名佐禮波久）熊野弘毅天明元年撰、明治十六年木版三册」等もある。

近頃出たものでは、太田水穗著「紀記歌集講義」（昭和年刊）がある。（參考）日本紀竟宴（歌續類從四〇四）

【附、古代歌謠の研究】

○上代歌謠號（文學一ノ六特輯）○外山卯三郎「詩の形態學的研究」○渡邊吉次「日本詩歌形態論」（明治四十一年刊）○澤瀉久孝「上代歌謠鑑賞の態度」（國語國文○土田杏村「國文學の哲學的研究（第三卷）上代の歌謠」（昭和四年刊）○安田喜代門「上代歌謠の研究」二册（昭和六年刊）○藤田德太郎「古代歌謠の研究」○五十嵐力「國語の胎生と其の發達」（大正十三年刊）○高野辰之「日本歌謠史」（昭和三年刊）○坂井衡平「日本歌謠史講話」（大正十三年刊）○小倉進平「鄉歌及び吏道の研究」（昭和年刊）○「紀記歌謠に於ける新羅系歌形の研究補說」（土田）國語國文の研究三十九・四十○鄉歌の形式に就き土田杏村氏に答ふ」（小倉）國語國文の研究四十四○「鄉歌の內容及び形式に就き小倉博士に問ひ且つ答ふ」（土田）國語國文の研究四十三○「再び鄉歌の形式に就き土田杏村氏に答ふ」（小倉）國語國文の研究四十七○「三たび鄉歌の形式を論ず」（土田）國語國文の研究四十九◇（參考）○孫晉泰「朝鮮古歌謠集」○金素雲「朝鮮民謠集」○「校訂おもろさうし」伊波普猷校（大正十四年刊）○金田一京助編「北蝦夷古謠遺篇」「アイヌ叙事傳ユーカラの研究」

四　風土記

【成立】　風土記は元明天皇和銅六年の詔（續日本紀卷六）に據つて逐次諸國より撰述して奉つたものである。後の官符に據つて見ても、當初より全國の風土記が完全してゐなかつたらしいが、現存するものは、僅かに、出雲・播磨・常陸・肥前・豐後の五國に過ぎず、然も完本は出雲風土記のみである。其の他の諸國の風土記は、主として仙覺の萬葉集抄、釋日本紀の兩書に引用せられてゐる古風土記の佚文を集めて各其の原姿の一部を知るのみである。

【參考】　◇「標註古風土記」栗田寬著。明治三十二年活版。◇「風土記研究」武田祐吉（新潮社日本文學講座）○「風土記に現れた古代生活」折口信夫（岩波講座日本文學）

【古風土記佚文の集成】　五國の他の古風土記の佚文を集めたものには、早く萬葉緯の卷十六（今井似閑編）○水戶彰考館篇の風土記殘篇附（寫、一册。彰考館藏）等がある。○伴信友の「古本風土記逸文」（寫、二册。圖書寮・彰考館・松井簡治博士等藏）

はよく出來てゐて、後の栗田寛が參照してゐるに相違ないが、一言も斷り書がないのは不思議である。○黒川春村にも信友と同じ樣な編纂がある。（「古風土記逸文」寫三册。天保十三年の校語あり。靜嘉堂文庫藏本は色川三中が春村の編書を借りて嘉永五年に書寫せしもの。）

○狩谷棭齋にも「採輯諸國風土記」（寫、一册）の編纂があるが、之には木村正辭が慶應元年に補遺を行つてゐる。（木村正辭補遺本、古典全集所收）在來最も行はれてゐるのは、○栗田寛、集訂「古風土記逸文」（明治三十一年活版。一册）で前書を基とし、編者の發見をしたものを加へて附註を施し、附錄を添へて印行した。（昭和二年宮地直一博士の改版本には、訓下し文を添へ、同博士の「逸文補遺三條」其の他を附す。）

○「古風土記逸文考證」栗田寛著（明治三十六年活版）に、右の逸文に諸書を以て詳細なる考證を加へたもので、風土記の好參考書である。

（イ）出雲風土記

【成立】和銅六年より二十年目の天平五年撰進の識語がある。現存唯一の古風土記の完本である。

【本文】現存寫本には、室町以前のものなく、細川家本（慶長二年幽齋寫、一册）・尾州家蓬左文庫藏本（一册）・松下見林舊藏本（成簣堂文庫藏一册）の如き慶長前後の書寫に係るものが最も古い。尾州家本は寛永十一年に敬公（義直）が新たに轉寫して出雲日御崎神社に寄進してゐる。（日御崎神社現存。）刊本として最初に世に行はれたものは、出雲國造家に傳はる一本（現存不明）を以て千家俊信が校刊した文化三年刊本「訂正出雲風土記」（二册）である。（續群書類從第九百七十一所收）（古典全集所收本は訂正本を再版印刷に附し、卷末に註解を附す。）

【諸註】江戸期のものには次の諸書がある。○出雲風土記鈔（岸崎時照撰。寫四册）○出雲風土記考（荷田春滿撰。寫一册）○出雲風土記解（內山眞龍撰。寫三册）○出雲風土記參解（刊、五册）○出雲風土記假名書（安政三年刊、三册）の二書は富永芳久撰。

活版になつたものには、○標註古風土記 出雲之部）栗田寛校訂（後藤藏四郎氏の註を加へたるもの昭和六年刊）（有朋堂文庫・日本文學大系所收本等之に基く）○「出雲風土記考證」後藤藏四郎著。大正十五年活版。一册。新たに諸本を以て校し、考證を加へたもの、現在では出雲風土記の最もよい參考書である。

（ロ）播磨風土記

【本文・諸註】卷首を缺き、賀古・飾磨等十郡を存する。現存諸傳本は、何れも三條西家藏古寫本（平安朝中期寫、大正十五年古典保存會複刊）に基いてゐる。（古典全集所收本は、之を底本とし、井上通泰博士が訓讀を施せるもの。活版本中、最も據る可きもの。）之を寛政八年に柳原紀光が初めて傳寫した一本を更に嘉永五年に谷森種松が轉寫した一本に據り、敷田年治が

「標註播磨風土記」を著した。（明治二十八年刊、二册）又谷森本に據つたらしい神致叢語（第百二・三號）所載のものが版行の最初である。

活版本としては、○標註古風土記（播磨之部）栗田寛（明治三十五年版）（有朋堂文庫所收本は之に基く。）○改定史籍集覽本（明治三十五年版。谷森本・柳原本に栗田本對校）○日本文學大系（第一卷）所收本は三條西家本・標註本に據り、原文と書下し文と併す。○校註日本文學類聚（上代文學集）は、武田祐吉博士の書下し、頭註。○播磨風土記物語（松岡靜雄）昭和二年刊。民族學的に解義す。○播磨風土記新考（井上通泰）昭和六年刊。三條西家本に據り、兩標註を掲げ、之に自家の新見を附す。現在では播磨風土記の最もよい參考書である。

（ハ） 常陸風土記

【本文・諸註】 現存のものは、全本より諸所を拔抄したもので完本ではない。加州前田家に一本が傳はつてゐたのを、水戶家で借覽書寫してから世に現はれ、群書類聚本（卷第四九九）として刊行された。次いで、水戶藩で天保己亥年に西野宣明の校訂で刊行した「訂正常陸風土記」（一册）がある。（古典全集に本書を凸版印行。）

活版本としては、○「標註古風土記」（常陸之部）、諸本を以て校訂し、標註を加ふ。著者栗田寛鄉土の關係より他の風土記より殊に詳し。（有朋堂文庫・日本文學大系等所收本之に據る）（本書を訓讀し、後藤藏四郎氏が補註を加へて昭和五年謄印。）○「常陸風土記物語」（松岡靜雄）民族學的に解義を加へたもの。原文及難訓難解語釋を添ふ。

（ニ） 肥前風土記

【本文・諸註】 肥前風土記も現存の傳本は抄出本である。近頃、京都猪熊信男氏藏の古寫本（鎌倉期寫）が紹介せられた。（玻璃版覆刊、橋本進吉博士解說刊本校異附）（知友新稿所載井上通泰博士論文參照。）江戶の末期に、荒木田久老が長崎の大家惟年の藏本を以て文政十一年に校刊し、初めて世に行はれたのである。（古典全集所收本は荒木田久老校刊本を凸版とす。）◇活版本としては、○續群書類從（卷九二七）所收（圖書寮藏本に據る）○「標註古風土記」（肥前之部）栗田寛（有朋堂文庫・日本文學大系所收本等之に據る。）○「肥前風土記の研究」（松尾禎作著、昭和六年刊）原文・口語譯・訓譯及び考證・逸文・研究等の五編に分つ。○「肥前國豐後國風土記考證」（後藤藏四郎）

（ホ） 豐後風土記

【本文・諸註】 本書も一少部分の殘本で傳寫本も罕である。靜嘉堂文庫の藏本は脇阪安元舊藏、慶長元和頃の書寫に係り、殆ど現在知られてゐる唯一の古寫本であらう。諸刊本と若干本文に差異がある。成簣堂文庫にも江戶初期の寫本（一册）がある。本書も荒本田久老が初めて公刊した。（寛政十二年校刊、一册。

附訓を施し校異略註を加ふ。)○群書類從第(四九九)刊本に歴代弘賢藏本を以て校正)○「箋釋豊後風土記」唐橋世濟撰。文化元年刊。鎌倉期の奥書ある傳寫本を底本として附訓を施し、漢文には本文に割註(雙行)を加ふ。(古典全集所收本は本書を凸版とす。)○標語古風土記(豊後之部)栗田寛。久老校刊本を基とす。(有朋堂文庫・日本文學大系所收本等之に據る。)

五　祝詞

【成立年代】　紀記の中に天兒屋命が岩屋戸の事の時に布刀詔止言を奏したとあるから、時代は古いが傳はつてゐない。今傳はつてゐるのは、「延喜式」卷八に廿七篇と頼長の日記「台記」別記に中臣壽詞(康治元年十一月大嘗會の際のもの)一篇とが見える。

延喜式は延長五年に成つたわけであるが、其の所載祝詞各篇の成作年代は一定しない。眞淵等にも諸説があるが、大祓・御門祭・鎭火祭・大殿祭・出雲國造神賀詞等は古いものとなつてゐる。

【本文】　◇(イ)寫本　延喜式(五〇卷)の古寫本は稀であるが、平安朝末期を降らぬ書寫と認められる九條公爵家本(缺二十八册)がある。(祝詞の部分と神名帳とは伏見の稻荷神社より玻璃版覆製)

◇(ロ)刊本　刊本としては、慶安元年・明暦三年・享保八年刊の諸本があるが、出雲松江藩主松平齊恒が諸本を校訂して文政十一年に刊行した「雲州本」は苦心して成つたものだけによい。

◇(ハ)活版本　活版本には國史大系本(卷第十三)も古典全集本もよいが、「校註延喜式」(昭和四年刊、本文二冊索引一冊)が最も據る可きものである。

【諸註】　神道の研究上より言へば、「中臣祓風水草」(山崎闇齋)・「中臣祓瑞穂抄」(出口延佳)・「中臣祓風水草管窺」(玉木正英)等があるが、主として中臣祓に關するものが多數を占めてゐる。詞解の上よりいへば、左の諸書が主なるものである。○賀茂眞淵の祝詞考(三卷、三冊。寛政十二年刊。明治十六年覆印。賀茂眞淵全集第五所收。)前に解を著したものを正して考とした。本文を校訂し語句の解釋に意を用ひてゐる。○鈴木重胤の祝詞講義(寫、十六卷、十五冊。國文注釋全書所收。)最も詳しいが、繁雜である。○平田鐵胤(篤胤の子)の祝詞式正訓(二卷、一冊。安政五年刊。無註。片假名付訓のみ。考と講義との他、簡略なものには、○祝詞略解(久保季茲撰。明治十六年活版。六卷、六冊。前説のよい所のみをとり自説を加へたもの)○祝詞便蒙(敷田年治撰、明治廿八年活版。五冊。後から出たものだけに諸説を取捨し若干自説を加へた便宜なものである。○新しいものでは次田潤著「祝詞新講」(昭和二年刊)は祝詞の研究書として優れたものである。

【參考】　◇武田祐吉著「神と神を祭る者との文學」(書中第一・二篇)・同著「祝詞宣命研究」(新潮社日本文學講座)○德田淨著「原始文學考」(書中、式祝詞の製作年代・祝詞の製作者等)

◇千田憲著「延喜式祝詞要論」(岩波講座日本文學)○井手淳二郎

「祝詞講讀考」(藝文九ノ一)

【附、民俗學の研究】

◇折口信夫博士「古代研究」(民俗學篇)二册(昭和四年刊)○中山太郎氏「日本民俗學」(昭和六年刊、五册)・「民俗學論考」(昭和五年刊)・「民俗學の話」(昭和五年刊)○岡正雄「バーン著民俗學概論」(昭和二年刊)○「宗教學概論」姉崎正治

◇「口承文學大意」柳田國男(岩波講座日本文學)

六　宣　命

【本文・諸註】　國文(所謂宣命書)で書かれた詔勅「宣命」は「續日本紀」中に記載せられてゐるものが、文德天皇元年即位の詔勅以下六十二詔存する。其れ以前の詔勅が日本書紀に漢文體で收められてゐる。

○歷朝詔詞解(本居宣長撰。六卷、六册。享和三年刊。本居宣長全集第五所收。)が唯一の註釋で、整頓してゐる。○なほ續日本紀の註釋書としても、續日本紀考證(村尾元融撰、十二卷、十二册。明治三年刊、なほ元融には續紀索引(稿本のみ傳はる、松井簡治博士藏二册あり。)位のものである。訓下しにしたものでは、日本文學大系本(第一卷、原文と訓下し文とを並ぶ。尾上八郎氏解題)・日本文學類從(上代文學集、武田祐吉氏讀註。)等がある。

【參考】

○武田祐吉博士「祝詞宣命研究」、「新潮社日本文學講座」

七　萬　葉　集

【本文】　二十卷。現存の萬葉集には、仙覺以外の系統のものもあるが、完本は何れも仙覺の系統のものである。萬葉集の諸本に就いては、左の諸書に詳しい。(○木村正辭「萬葉集書目提要」○佐々木信綱「萬葉集古寫本攷」校本萬葉集(首卷)武田祐吉「萬葉集諸本の解說・萬葉集諸本の系統の研究」・「萬葉集書志」)

◇(イ)古寫本　平安朝の書寫と認む可き傳本は、桂本・金澤本・藍紙本・及び天治本・元曆校本・尼崎本(或は鎌倉初期)の六本である。(皆覆製あり)鎌倉期の寫本は嘉曆本・傳壬生隆祐筆本・西本願寺本・神田本等があり、以後の寫本に至つてはまた頗る多いが、萬葉集の歌を類纂した鎌倉期の鈔本「類聚古集」(十二卷)「古葉略類聚鈔」(五卷)等にも校勘の上に價値ある傳本がある。

◇(ロ)刊本　慶長中刊無刊記古活字印本が二種ある。一は、無訓本、二は附訓本で、共に傳本が少い。無訓本は本文研究上林道春校本を底本として植版したものであるといふが、活字の樣式等の方面よりも之が證せられる。寛永二十年刊本(整版)は、附訓本に基いて覆刻せられたもので、江戶時代以後、萬葉研究者の底本となつたものであるが、校本萬葉集の業績も亦之を底本として行はれた。江戶中期以後のものとしては、寬永刊本の奧附を改めた寶永刊本、享和三年に土佐の今村樂等が古萬葉集と題して校刊した版

式の稚拙な木活字印本、橋本經亮が元暦校本等を以て校異を加へ、山田以文が再訂して「萬葉集校異」と題して文化二年に校刊した校異本等がある。

◇(ハ)活版本　第一に推す可きは「校本萬葉集」である。萬葉集研究者必携の書、初版は大正十四年刊。其の業績を永く傳へる爲、和裝別漉紙刷の五帙二十五冊。昭和六・七年岩波書店再版は、洋裝十冊、末に增補一冊を附した。簡便に其の本文を見るには、「新訓萬葉集」・「白文萬葉集」(各二冊、岩波文庫本、佐々木信綱・武田祐吉博士校訂)がよい。

【諸註】　○佐々木信綱博士「萬葉集選釋」附錄、研究書目解題○久松潛一博士「萬葉註釋書の研究」(校本萬葉集首卷)○武田祐吉博士「萬葉集書志」等參照。

仙覺以前の註釋書として現存するものは極めて少く、萬葉集抄(一卷、一冊。作者未詳、或は藤原盛方(佐々木博士說)全卷より若干の歌を抄出して簡單な註を加へたもの。圖書寮藏。(萬葉集叢書第九輯、玻璃版覆刊。)」と萬葉集佳詞(藤原爲家の摘註。萬葉集叢書第十輯萬葉學中世篇)とがある。

○萬葉集註釋(「萬葉集鈔」「仙覺抄」)仙覺撰。二十卷。全卷の難解歌を摘出して古點の誤を正し、註解を加ふ。現存では佚書になつてゐるものを多く引用してゐる事も有益である。寫本として傳はるもの(仙覺全集本所用本の他なほ傳本あり)の他、寛永頃の無刊記の刊本があり(二十冊)、活版本としては國文註釋全書にも所收せられてゐるが、諸本を以て校訂した萬葉集叢書仙覺全集本がよい。

○詞林采葉抄　由阿撰。十卷。貞治五年成る、地名・枕詞・物名等をあげ、袖中抄・仙覺抄等に據り、釋義す。國文註釋全書所收。

○萬葉集目安(撰者未詳、卷中の難語を摘出して略註を加へたもの。萬葉集叢書萬葉學叢刊中世篇所收。)等中世期の諸抄で活版本となつてゐるものも少くない。

長流契沖に初まる江戸期に於ける萬葉集の研究の業績は頗る見る可きものがある。其の中註釋として參照す可き主要なるもののみを次に擧げる。

○萬葉拾穗抄　北村季吟撰。三十冊。元祿三年刊。最初の全註で舊註の集大成である。長流以下の所謂新註に對し、其の性質上前にあげる。

○萬葉集管見　下河邊長流撰。先人の說を引き、之に自家の創見を加へたもの。(萬葉集叢書第六所收。)契沖全集附卷長流全集には、萬葉集鈔(卷一至十四の中七十三首を註釋す)等と共に收めてある。

○萬葉代匠記　釋契沖撰。仙覺について劃期的の研究である。初稿本と精撰本とあり、精撰本は水戸に上進した儘流布せず、初稿本が知られてゐた。初稿本には自說が增し、本文の校勘も行はれてゐる。精撰本は早稻田大學出版部の活版本(東洋文庫藏・木村正辭舊藏に據る)があるが、朝日新聞社出版の契沖全集本には自筆稿本等に據つて兩者

を收めた最も善い本である。

○「萬葉集僻案抄」(荷田春滿撰。卷一註。)・「萬葉集童蒙抄」(卷二至十七。春滿の說を弟信名の筆記。)・「萬葉集劄記」(童蒙抄と同じく信名の筆記。卷十七至二十の抄譯。)「萬葉集童子問」(春滿撰。卷二・三中の不審の條に答へたもの。)等は近頃荷田全集に所收活版となつた。

○萬葉考　賀茂眞淵撰。六卷及び別記三卷、明和五年刊。六卷は原本の卷一・二・十三・十一・十二・十四で之を古い撰として編次を改め、他の卷には、未刊である。創見に富むが主觀的な部分が少くない。◇(參考)彌富破摩雄氏「萬葉考の書史的考察」(萬葉集諸攷再收)〔因みに萬葉考の成立を見る可き重要なる資料となる眞淵自筆書入本の萬葉集(寛永二十年刊本、卷一・二のみ無訓古活字印本、金比羅神社藏。高橋貞一氏藏)があるが、未だ世に知られてゐない。〕

○萬葉集玉の小琴　本居宣長撰。卷四までの摘註。參考となる。宣長の萬葉集に對する研究に就いては、古事記傳中に散見する所說があり、玉の小琴より後のものであるから、參照す可きものであるが、幸に生田耕一氏・石井庄司氏に據り、索引「萬葉釋文索引(記傳之部)」が作成された。

○萬葉集槻の落葉(信濃漫錄)荒木田久老撰。三卷、三册。寛政十年刊。卷三の註並に別記。(萬葉集叢書第四輯所收。)

○萬葉集攷證　岸本由豆流撰。卷一至六の註。本書は在來の諸註を由豆流の考證的態度を以て取捨したもの。卷七以下未完であるのは惜しい。在來の所說の集註。(萬葉集叢書第五輯七册は自筆稿本(帝國圖書館藏十五册)に據り出版)由豆流には「萬葉集類語」(寫二十九册松井簡治博士藏)なる歌句の五十音索引がある。

○萬葉集註疏　近藤芳樹撰。卷一至三の註。前記攷證風のもの。(歌書刊行會活版)

○萬葉集略解　橘千蔭撰。二十卷。三十册。諸說を簡單に見る可き便利なものであるから。明治以後も活版本として多く行はれ、教科用に供せられた。〔○博文館和歌叢書本(頭註に古義等を合す)○古典全集本(古義・新考等を附す)○校註萬葉集略解三册。〕

○萬葉集燈　富士谷御杖撰。文政五年刊。五册。卷一の註。言靈說より解義したもので、偏つてはゐるが、文法的の見解には見る可きものがある。(萬葉集叢書第一輯所收)

○萬葉集檜嬬手　橘守部撰。卷一至三の註。獨創的な部分が多いが、守部の他の諸研究の如く獨斷が少くない。(萬葉集叢書第三輯所收)守部には、本書の前に「萬葉集墨繩」(卷一前半註)もある。寫本で傳はつたが、「萬葉集緊要」(天保十二年刊三卷二册)等と共に皆橘守部全集第四所收。

○萬葉集古義　鹿持雅澄撰。在來の註の集大成とも言ふ可き最も大部な詳註である。文字を妄に改めたり、見解にも若干偏つた點もあるが、萬葉集の研究者にとつてかく可からざるものである。未刊の儘傳はつてゐたのが聖旨に據り、明治廿三年刊行

せられ、(宮内省藏版、百四十一册。)其の後國書刊行會の飜印(活版)があり、又、近く名著刊行會の普及本(入手に便宜なるも、校正の誤少からず。)がある。普及本の再版には、活版にならなかつた。古義附卷の「古言譯通」等が追加せられた。

○萬葉集美夫君志　木村正辭撰。卷一・二のみに止るのは惜しいが、別記、及び文字・訓義に就いて特に意を用ひ、附卷ともいふ可きの萬葉集讀例・同文字辨證・字音辨證・訓義辨證(早大出版部版、代匠記に附す)と共に有益である。

美夫君志の他、明治以後のものとしては、○萬葉集新考　井上通泰著。古來の說を取捨し、自家の見解を加へたもの。舊說に併せ見る可きものである。大正四年至昭和二年歌文珍書保存會刊行本は和裝、昭和三・四年版は洋裝(改訂)八册。○萬葉集講義　山田孝雄著。卷一・二の註。語學的には最も整つた講義。活版二册。

其の他、萬葉集論攷(松岡靜雄、二册)○萬葉集新解(武田祐吉、二册)○萬葉集新釋(澤瀉久孝、二册)○萬葉集選釋(佐々木信綱、一册)○萬葉集私解(花田比露志、一册)等の抄釋がある。

初學の手引としては、抄錄の萬葉集新講(次田潤著)萬葉集全釋(鴻巢盛廣著、既刊四册)等がある。

【參考】　昭和五年以來の萬葉集の研究動向は萬葉三水會編の「萬葉集年報」(岩波書店刊)を參照するがよい。玆には萬葉集の研究は單行本が多いので、之を主とし、雜誌論文は殆ど省略する。

◇久松潛一博士「萬葉集の新研究」(大正十四年刊)○島木赤彥氏「萬葉集の鑑賞と其批評」(大正十四年刊)○佐々木信綱博士「萬葉漫筆」(昭和二年刊)○山宮穗摩雄氏「萬葉集叢攷」(昭和九年刊)○井上通泰博士「萬葉集雜攷」(昭和八年刊)○武田祐吉博士「國文學研究萬葉集篇」(昭和九年刊)

◇萬葉集講座(六卷六册、昭和七年至八年春陽堂刊)○新潮社日本文學講座(折口信夫・澤瀉久孝)○岩波講座日本文學(藤森朋夫・五味保義)○短歌講座(改造社)○佐々木信綱博士編「萬葉學論纂」(昭和六年刊、五十家の既刊論文及び新稿等各一篇を輯む)○萬葉集論考(辰巳利文編、雜誌奈良文化所載の諸家論文集)(昭和七年刊)

◇心の花(萬葉號七輯あり)○國語國文の研究(萬葉研究號二輯あり。)國語國文(二ノ十)特輯號、其の他京都帝大國語國文學會編刊の本誌には他誌に比し、絕えず、萬葉に關する有益なる研究論文所載せらる。

◇(索引)ことばの索引として江戸期のものには、前記の萬葉集類語(寫二九册、岸本由豆流編。松井簡治博士藏)の他、刊本には萬葉集類句(寬政十一年刊、五册、長野美波留編)・萬葉集類句(文化三年刊、三卷、賀茂季鷹編)があり、又萬葉集傍註(植並隆璉編。寫七册。萬葉集の活用語を蒐集して其の丁數を舉げたもの)萬葉の人物の索引としては、萬葉句別(寫六册、渡會正兌撰)等があるが、其の後「國歌大觀」(松下大三郎編)が出て、其の

指數が集中の歌順を示す記號として多く用ひられる樣になり、最近、正宗敦夫氏編「萬葉集總索引」(本文篇二冊、單語篇一冊、漢字篇・丁數篇・諸訓説篇一冊、四冊)が出て、研究上多大の便宜である。因みに辭書的なものとして、古く「萬葉集類林」(十五卷、海北若沖編、寫本として傳はりしも、契沖全集附卷長流全集に附載、索引附)があり、新しくは、折口信夫氏の簡單な「萬葉集辭典」(一冊)、萬葉集新辭典(松本仁)一冊等もある。

◇語學(用字法の研究)は仙覺・契沖・雅澄等にも所説があるが、纏つて單行となつたものとしては、春登撰「萬葉用字格」(文化十五年刊一冊)がある。高橋殘夢にも萬葉國字抄(寫二冊、內閣文庫藏)がある。又新しくは武田祐吉・橋本進吉・澤瀉久孝・松山愼一諸氏の研究がある。(森本治吉氏「萬葉集の研究―用字法を中心として―」岩波日本文學參照)「誤寫誤讀の問題を中心とした萬葉作品の時代的考察」澤瀉久孝(國語國文一ノ一)「萬葉集に於ける文字の文學的用法に就て」吉澤義則(國語國文三ノ一)又、近く、「萬葉集誤字愚考」(大村光枝稿本)が古典全集に所收せられた。

(用語訓義の研究)は古義の附卷及び木村正辭博士の字音辨證・文字辨證・訓義辨證等の他、東歌に關しては、田中道麿の東語栞(寫本にて傳はりしを稿本叢書第一卷に活版とす)がある。又、「萬葉集の訓義と古經卷の施點」(春日政治、萬葉集論纂)等諸家の研究論文も少くない。○又「萬葉集難語訓攷」(生田耕一)もある。【參考】○文法に立脚せる萬葉集の研究(大塚悦三)○奈良朝文法史(山田孝雄)○枕詞の研究と釋義(福井久藏)

【附、音韻・古語の研究】

○「日本古代語音組織考解説」北里闌(大正十五年刊)○「古代國語の研究」安藤正次(大正十三年刊)○「我が國民國語の曙」坪井九馬三(昭和二年刊)○「漢音吳音の研究」大島正健(昭和六年刊)○「日本古韻史」「國語の語根と其の分類」(大島正健)○「古語の新研究」(尊稱篇)佐藤仁之助(昭和六年刊)○「日本古語大辭典」松岡靜雄

【附、假名及假名文字遣の研究】

○鄕歌及び吏讀の研究(小倉進平)
○假名發達史序説(春日政治、岩波講座日本文學)・假名源流考(大矢透)・假名遣及假名字體沿革史料(大矢透)・韻鏡考(大矢透)○假名遣奧山路(石塚龍麿撰、古典全集所收)・古言衣延辨(石塚龍麿)○「上代の文獻に存する特殊の假名遣と當時の語法」橋本進吉(國語と國文學昭和六年九月)

◇(歌格)長歌詞珠衣(小國重年撰寫本六冊、東京文理大等藏)はこの方面の研究の魁をなしたもの。他に橘守部の「長歌撰格」「短歌撰格」(守部全集所收)等がある。

◇(傳記) 海北若沖の「萬葉集作主履歷」(寫本九冊)や、古義附卷の萬葉集人物傳等があり「萬葉集物語」(尾山篤次郎)「作者別萬葉集」(土岐善麿編、短歌の部・長歌の部)「分類萬葉集」(佐々木信綱編)等も編まれてゐるが、最近二つの著書が現れた。一は「作者別年代順萬葉集」(澤瀉久孝・森本治吉編)で、全作品を作者に

よつて別ち更に之を年代順に排列し、傳記・年表・系譜・歌風等の項を附し、二の「萬葉集年表」（土屋文明編）は全作品を製作の前後によつて配列し、年月次を立て、之に卷次索引・作者索引（各作者を五十音順に配列し、其の各作者の歌は製作年次に分つ。）を附してある。この二書は合せ見る可きである。又、稿本の儘傳はり近く刊行された義田楠園の萬葉事實餘情・越中萬葉遺事（昭和五年刊、一冊）も多少參考となる。

◇（地理）　○萬葉地理考（豐田八千代）○大和萬葉地理研究（辰巳利文）○九州萬葉地理考（三松莊一）○萬葉地理研究紀伊篇（日比野道男）

◇（動・植物）　鹿持雅澄の古義附卷の萬葉集品物解、及び萬葉集品物圖（國書案本名著刊行會覆刊）があり、又、雅澄の著に影響を與へた山本章夫撰「萬葉古今二集動植正名」（稿本の儘傳はりしを大正十五年刊）がある。新しくは、彌富破摩雄氏「萬葉集草叢攷」（第一）等にも若干所說があり、單行としては、萬葉集草木考（岡不崩、昭和七年刊）に最も詳しい考證が見える。

◇（染色）　萬葉集染色考（上村六郎）昭和五年刊。

◇（民族學・土俗學）　古くは荒木田久老の竹取翁歌解（一冊、寬政十一年刊）・竹取翁歌直解譯（色川英文撰、寫一冊、靜嘉堂文庫藏）等もあるが、近く出たものでは左の數種がある。主としてこの方面より見た萬葉集の註釋と言つてよい。

○萬葉集傳說歌考（川村悅麿）昭和二年刊。○琉球人の見た古事記と萬葉（奥里將建）大正十五年刊。○民族學より見たる東歌と防人歌（松岡靜雄）昭和三年刊。○萬葉集の文化史的研究（西村眞次）

◇（萬葉集緯書）　萬葉集と同時代の他の作品を集め萬葉集備義の補助とする編著。萬葉緯（今井似閑編。二十卷、傳寫本間々ありしが、國文註釋全書に所收活版、近く又、國文學未刊行註釋叢書所印）。撰集萬葉徵（田中道麿編。萬葉學叢書第二編所收。（本書は古今集以下より萬葉集所載の歌と同じ歌を抜出す。）これと同じ目的で新しく改編刊せられたものに、續萬葉集（武田祐吉）がある。

◇（外來思想）　○「上代國文學の研究」（第二篇）武田祐吉　○「萬葉に現れたる外來思想」藤田德太郎（心の花三〇）○「萬葉集に現はれたる外來思想」林古溪（國語と國文學五四）○「萬葉集に現れたる佛教思想」林古溪（大東文化三ノ七）

◇【附、奈良朝佛教の研究】

○「日本佛教史の研究」大屋德城　○「寫經より見たる奈良朝佛教の研究」石田茂作（東洋文庫論叢）

八　佛足石歌

【成立】　文室眞人智努（ブンヤノマヒトチヌ）が其の亡夫人茨田（マムタノ）女王の菩提の爲に天平勝寶四年に佛の足跡を石に鐫り、之に其の讃歎の歌を刻したもので、今は國寶として奈良西京藥師寺の境内に安置されてゐる。（「佛足石歌碑の原所在地について」板橋倫行（史學佛教史四ノ二））凡て二十一首。歌は五句三十一音の短歌に更に七音の第六句を小字で書き添へてゐる。この體を「佛足石歌體」と稱する。

【本文・諸註・研究】 寶曆二年に幕醫野呂元丈が佛足石碑銘一卷(拓本)を刊行してから世に紹介せられ、後、高田與淸が公刊し(文政十一年刊一册、南都藥師寺金石記)狩谷棭齋も之を古京遺文に收め、釋潮音は佛蹟誌一卷を著はし、山川正宣は文政十一年に「佛足石和歌集解」(日本歌謠集成第一卷所收)を刊行した。○新しい解義としては、井上通泰「佛足跡歌新考」(萬葉集新考卷十二附錄)・武田祐吉「佛足石歌解」(上代日本文學史)等がある。◇「佛足石」三宅米吉(孝古學會雜誌一ノ一七)(文學博士三宅米吉著述集所收)

◇【附、金石文研究資料】

○萬葉集時代の金石文を集めたものは古京遺文(狩谷望之編。(古典全集所收本は山田孝雄博士增補版本に據る。)望之三度稿を改めしも、なほ今日よりすれば補訂す可きものあるは論無し。」がよい。○「文學博士三宅米吉著述集」(下卷)昭和四年刊。○木崎愛吉氏「大日本金石史」(大正十年刊)

九 歌經標式

【書名・撰者・成立】 一卷。一名「濱成式」。藤原濱成撰。寶龜三年成る。在來の傳本が濱成の眞本でなかつた爲に、長く僞書とされてゐたが、佐々木信綱博士の藏本が紹介せられて一變した。書中引用の歌數三十四首。(內、一首の一部分を引くもの六首)(記紀萬葉等の他書に見えないもの十六首)我が國最古の歌學書として重要なる意義と價値とを持つ。本書の影響に據つて現れた「喜撰式」「孫姫式」と併せて和歌三式、「石見女式」を加へて「和歌四式」と稱する。(平安朝の部、後記六三頁參照)

【本文】 現在知られてゐる傳本は四種あり、其の一(甲種本)は佐々木信綱博士藏本(眞名書を假名交りに改め、武田祐吉博士活版とす。「日本文學類聚・上代文學集・續萬葉集「口譯附」)。其の二(乙種本)は、圖書寮・內閣文庫等の藏本で、甲種本は乙種本に比して善本文を有するが、乙種本も平安朝末期には既に存在してゐた。其の他の二種(丙・丁種本)は本文の粗惡なものである。

【參考】 「古本歌經標式」佐々木信綱(和歌史の研究)・「歌經標式に關する覺書」中島光風(奈良文化昭和五年四月)

一〇 懷風藻

【撰者】 未詳。但し在來諸說があり、(1)林春齋(恕)は淡海三船の撰かといひ(本朝一人一首、寛文六年刊、十卷、五册)後人は多く其の說を襲つてゐるが、平出鏗二郞氏は之に反對し、(「懷風藻は淡海三船の撰といふべきや」(帝國文學、明治三一ノ八)(2)武田祐吉博士は葛井連廣成を擬し、類從本の最後にある五言嘆老(亡名氏作)一首は自跋的に其の心懷を述べたものとも見られるとした。(上代國文學の研究)(3)之に對し新しく石上宅嗣說(國語と國文學、昭和二年十一月、川原壽一「懷風藻の撰者について」)も出たが、三船說を難じながら却つて其の所論は三船說に有利の樣に見える論文であると思ふ。岡田正之博士にも所說があつたといふが未發表に終つた。(日本漢文學史)

【成立・名稱】 自序に、「天平勝寶三年十一月」とあるから、其の頃成立したものである。書名も序中に其の由來が見える。我が國現存最古の詩集で、作者は殆ど官人、弘文天皇を初め六十四人である。本書より前に石上乙麻呂の「銜悲藻」なる詩集一卷があつたといふが佚して傳はらない。

【本文】 ◇(イ)寫本 現存の諸傳本は殆ど蓮華王院所傳の系統本に基いたものである。室町以前の古寫本は見當らないが、慶長前後の寫本は、内閣文庫(二本)・東京帝大圖書館(舊南葵文庫藏)・蓬左文庫・水戸彰考館・靜嘉堂文庫(脇坂安元舊藏)・山岸德平氏藏の諸本がある。

◇(ロ)刊本。天和四年の附訓刻本(一册)が最も古く、之に補刻を加へた寶永二年の再刊本がある。寶永の刊本の版木は京都書肆竹包樓に移り、寛政五年以來現今までこの摺本が流布してゐる。之に對し、群書類從(一二二)所收の刊本は二首多い。

◇(ハ)活版本。○古典全集所收本は寶永二年刊本を基とし、類從本等を以て校異を附す。○日本文學大系所收本は類從本に據り、佐久節氏の略註がある。

【諸註】 江戸期のものとしては、○靜嘉堂文庫藏の今井舍人の稿本「懷風藻箋註」(寫一册)がある。元治二年二月の自序があり、漢文を以て典故等を註解してゐる。○狩谷望之の所藏を弟子の小島成齋が群書類從本に書入したものも註解である(成簣堂文庫藏)。先人の書入本はなほこの他にも若干ある。近頃活版になつたものでは、○「懷風藻新釋」(釋清潭)昭和二年刊、一册。○「懷風藻註釋」(澤田總清)昭和八年刊、一册。○藤田德太郎氏の序文のみの註釋がある。(國文學雜誌所載)

【參考】 ○岡田正之博士「日本漢文學史」「近江奈良朝の漢文學」○山岸德平氏「懷風藻概説」(上代文學講座)○吉田幸一「懷風藻と文選」(國語と國文學、昭和七年十二月)「懷風藻傳來史考」(國學院雜誌昭和八年三月)この論文にも一部分ふれてゐるが、懷風藻に就いては文選との關係のより深き事はなほ考究の餘地が多いと思はれる。○「懷風藻に關する一考察」今田哲夫(國語國文三ノ九)

一一 高橋氏文

【撰述】 氏の由來を記るした「氏文」は昔佚して現存するものは、本朝月令・政事要略・年中行事秘抄等の佚文(三篇)に據つて知り得る本書のみである。文章は宣命體を交じへた漢文で、延暦十九年になつたが、當時傳來の舊記に據つて撰述せられたものである。

【本文・諸註】 考註は伴信友の「高橋氏文考註」(伴信友全集第三所收)のみである。又、近頃單行となつたものもある(横山重校、大岡山書店刊)。日本文學大系所收本は考註に據る。(參考)○高橋氏に關する一考察(勝田勝年)「立命館文學昭和十年一月」

一二 家傳

【書名・成立】 二卷。「藤氏家傳」。上卷は「大織冠傳」下卷は

「武智麻呂傳」。撰者は、上卷は藤原仲麿(惠美押勝)。下卷は唐僧延慶。大織冠傳は仲麿が太師に任ぜられた天平寶字四年正月から、同八年九月官位を免ぜれるまでの間に成つたもの。恐らく其の成立は內部徵證によれば、天平寶字四年から六年の間であらう。武智麻呂傳も略同時であらう。當時は必ず功臣の家傳を記述す可き規定があつて多くの傳記が編纂された事は明らかで、本朝書籍目錄にも四十八種記載されてゐるが、現に知られてゐるものは、右二傳の他に、「和氣淸麿傳」「田邑麿傳」(類從六十四)・「橘逸勢朝臣傳」「藤原保則傳」(續類從百九十一)等がある。

【本文】 尊經閣文庫藏の寫本には、末に「貞慧傳」(續々群書類從第三史傳部所收)が附いてゐる。流布の刊本は群書類從(第六十四)本である。

【參考】 (「家傳及びその史的價値」山岸德平(國文學誌昭和六年十一月)

一三　上宮聖德法王帝說

【成立】 一卷。最古の聖德太子傳。狩谷望之は記紀以前の撰述になるといふ。中に短歌四首を含む。文學的價値は乏しいが、本朝最古の書籍として史學上、又國語資料として重要なるものである。

【本文】 平安朝中期以前の書寫と認む可き古寫本が知恩院にある(昭和三年古典保存會玻璃版覆製)。又、斷簡が佐々木信綱博士の許にある(平安朝末期古筆切二行)。刊本には、大澤正臣が現知恩院藏本を手校した一本を以て校正した群書類從所收本があり、活版本としては、日本佛教全書所收本(知恩院本に據る)等がある。

【諸註】 古く狩谷棭齋の「上宮聖德法王帝說證註」(一卷、文政四年刊、一冊)がある。(古典全集所收) 明治以後のものでは、〇「補校上宮聖德法王帝說證註」(平子鐸嶺) 明治三十八年刊 〇「上宮聖德法王帝說新註」(金子長吾) 〇「校訂法王帝說」(春日政治)大正十一年謄寫刷。

【參考】 〇「法王帝說と十七條憲法」〇古今目錄抄 (二卷、法隆寺藏、玻璃版覆刊)。なほ聖德太子の傳は平安朝以後のものも頗る多く、(大日本佛教全書第一一二冊、聖德太子傳叢書)其の中、「聖德太子傳曆」は古寫本も傳はり、國文學の上にも影響を及したものである。(藤原猶雪氏「假原聖德太子傳曆」昭和二年聖德太子奉讃會刊參照)。

一四　唐大和上東征傳

【撰述】 唐の歸化僧鑑眞和尙の傳で、寶龜十年淡海三船(元開)の撰に係る。

【本文】 東寺觀智院に平安朝末期の古寫本がある。(昭和六年古典保存會覆刊)〇刊本としては群書類從(第六十九)所收本があるが、觀智院本と異同が多い。諸本に關しては上代文學講座第一卷に高楠順次郎博士の論文あり。

一五 古語拾遺

【成立】 齋部廣成が自家の舊記所傳を以て開闢以來の神祇に關する諸事の正史に泄れたものを上奏したもので、古來相並んで祭祀に仕へた中臣氏のみ重用せられ、齋部氏が下風にたつに至つたことを慷慨し、末に「大同二年二月十三日」（類從本）とある。（平安朝に入つてからの撰述ではあるが、舊記遺老の言を傳へてゐるものがあるので、茲に加へる。）

【本文】 在來知られてゐる古寫本では、吉田子爵家藏嘉祿元年寫本が最も古く、次は尊經閣文庫藏の元弘四年書寫の一本（尊經閣叢刊、玻璃版覆刊）及び無二書・濕允書の二本で、なほ他に西大寺本（西大寺舊藏、一册。靜嘉堂文庫藏）等種々の傳寫本がある。刊本としては群書類從本（第四四六）もあるが、元祿九年刊本以下種々の刊本があり、明治になつてからも○「訂正古語拾遺」木村正辭校（明治二年刊）○「標註古語拾遺」村上忠順校（明治八年刊）等がある。新しくは加藤玄智博士の英譯があり（昭和二年刊）末に解題書目等を附してあるのは便宜である。

【諸註】 註釋として古いものは「古語拾遺句解」（二卷、二册。元祿十一年刊。齋部齊延撰。）等があるが、大したものは見當らない。近頃活版になつたものに「古語拾遺新註」池邊眞榛（昭和三年刊）がある。

【參考】 「古語拾遺の研究」津田左右吉（史學雜誌三九）

【皇太神宮儀式帳・止由氣宮儀式帳】

兩書とも延暦廿三年の撰進。皇太神宮儀式帳には古代の直會の歌二首が載つてゐる。（群書類從卷第一・二所收）

【尾張國熱田太神宮緣起】

現存のものは、貞觀十六年熱田神宮の尾張連清稻が假名交りに撰述したものを、後に寛平二年尾張守藤原朝臣村椙が漢文體に改修した所謂「寛平緣起」である。日本武尊に關する異傳もあり、紀記に見えぬ短歌二首がある。傳寫本も間々あるが、刊本としては群書類從（卷第二四）に收められ、又、伊藤信民の註解を加へた「參考熱田太神緣起」（明和六年刊一册）がある。

【附、緣起】

社寺の草創の由來等を述べたこの種の文獻は、奈良朝より「法隆寺緣起幷流記資財帳」「大安寺伽藍緣起幷流記資財帳」（天平十九年撰）等があり、又、平安朝以後に「大安寺緣起（寛平七年）」「長谷寺緣起文（寛平八年）」等多數あるが、平安朝中期以後著しく文學的要素を加へ、平安朝末期・鎌倉初期より假名書の詞書に繪を伴ふものが流行するに至つた。○醍醐三寶院藏、國寶「十八大寺緣起集」（漢文）は昭和三年高木利太氏の玻璃版覆製があり、又古き緣起は「大日本佛教全書（寺誌叢書一至四）」。「國文東方佛教叢書」（第六卷寺誌假名緣起のみ）等に所載せられてゐる。

以上の他に、奈良朝文學の研究資料の若干を含むものに左記のものがある。【東大寺要錄】十卷。扶桑叢書所收本（嘉永刊本。國書刊行會活版續印）があるが、東大寺に國寶の古寫本がある。

中に東大寺大佛供養の時、元興寺の僧の奉獻した歌三首等も見える。正倉院文書　史料編纂所編刊の大日本史料所收。浩瀚の文書中、文學と見る可きものは比較的少いが、當時の墨續が其の儘殘つてゐるので、國語國文研究の資料として珍重す可く、其の種のものを佐々木信綱・橋本進吉兩博士が撰んで玻璃版に附し「南京遺芳」として公刊したものがある。

第二章　平安朝

一　序説

國文學は奈良朝を母胎として平安朝に至つて大いに發展を遂げた。傳流の間に既に散佚した文獻も少くないが、之を前代に比すれば、現存の研究資料は各方面に亙つて頗る豐富である。江戸時代以來諸學者の研究の對象が主としてこの時代までに集注せられてゐたが爲に、その業績も多數に上つてゐる。然しながら之を奈良朝文學に於ける先人の研究業績に比するに、現在の研究者が之を根底として出發し得可き研究は極めて乏しいと言はねばならない。先人の業績中最も優れたものの存在す可き注釋書さへも、源氏物語・古今和歌集等若干の例外を除けば、注目す可きものは甚だ少い。又、江戸時代以來行はれた研究の中で最も有力なる業績の一たる可き本文整定に關する研究の如きに至つても、輓近全く面目を一新しつゝある。それは書誌學の勃興と、多數の研究者が自らその專攻に精進する結果、時運と共に重要なる研究資料の發見と精査とが行はれる事も主要なる原因の一つである。然しながら、幾世紀間、書寫の方法を殆ど唯一の機關として流傳し來つた文學作品は、時と處と人とに據つて、幾多の異本を生じ、その間また後世の僞作問題等も附隨して、その研究整理は著しく困難な問題としてなほ今後に俟たなければならない。一般學徒にと

つて必須なる重要資料の公刊も奈良朝文學のそれに比してなほ充分とは言へない。又、在來當代の文學研究の對象とせられたものは、主として和歌と物語とに限られてゐた。言ふまでもなくこの二系列は平安朝文學の主流を爲すものであるから、最初に着手せられたのは正當ではあつたが、その他の系列の如きは漸く近時研究の端緒に着いた狀勢にあつて、一見相當長い歷史を有するが如き平安朝文學の研究も、新しき研究法に據り、在來の研究の再檢討を要すべきは無論、汎ゆる方面に於いて若き學究が要望せられつゝあるのである。次に平安朝文學全般に亙り、各系列に從つて略述するに當り、本稿に於いては、特に研究上併せ注意す可き二三の事項を附記しておきたいと思ふ。その一は、在來既に唱導せられてゐる如く、外來思想の影響、卽ち、漢文學と佛教との影響を蒙つてゐる點に特に注目すべき事である(第五章首參照)。その二は、文學作品を產んだ當時の環境を充分に究める事である。是に就いては、江戶時代以來種々の業績も現れてゐるが、なほ未整理の多くの問題に對しては、他の諸學科の研究を俟たず當時の文獻に就いて自ら考究を進めなければならない狀態である事を忘れてはならない(第六章附錄參照)。

次に平安朝文學全般に關する研究書を擧げる事とするが、國文學通史の一部分として記述せられてゐるものを除けば、平安朝のみを專門としたものは極めて少い。

◇○「國文學全史」平安朝篇(藤岡作太郎)
◇○「平安朝時代文學概說」尾上八郎 新潮社日本文學講座)
○「日本文學史概說(平安朝時代)」池田龜鑑(岩波講座日本文學)
◇○「文學に現はれたる我が國民思想の研究」貴族文學の時代(津田左右吉)

二 和歌・歌謠

和歌は物語と共に平安朝文學の主流であり、又、平安朝文學に於ける在來の研究の最も進んだ方面である。然しながら、その研究はなほ淺薄にして且つ部分的なるの觀を免れず、萬葉集と、古今和歌集・新古今和歌集の二勅撰集とに注目する事に據つて、上代に於ける和歌史の展開は見られるとはいへ、平安朝の和歌全般に亙り、殆ど研究に着手せられてゐない方面、なほ主として今後の研究に俟たねばならぬ部分は極めて廣範である。その作品も流傳の間に散佚したもの、或は僅かに零本として殘存するもの等も少くないが、現存する研究資料は平安朝に於ける他の文學系列に比して遙かに豐富であつて、その研究事項も極めて多岐に亙るのである。次に便宜、勅撰集・私撰集・私家集・歌學・歌合等に類別し、主要なる作品に就いて略述しようと思ふ。なほ歌謠をも本項に附記する事とするが、この方面は現存の資料も比較的少い。

〔附〕和歌及び歌謠の資料に就いて一通りその現存の有無を見るには「日本歌書綜覽」(福井久藏)を參照するがよい。然しそれは書籍の性質上からも、專門的な知識を得ようと望む事の難い事は言ふまでもない。なほ古い書目としては和歌現在書目錄(續群書類從所收、但し本書には續類從本としての刊本あり)もある。

【參考書目】

◇()日本短歌史　一冊　山内素行　大正二年
○和歌史の研究　一冊　佐佐木信綱　大正十二年
○國歌の胎生及び其の發達　一冊　五十嵐力　大正十三年
○日本詩歌の體系　一冊　兒山信一　大正十四年
○新講和歌史　一冊　兒山信一　昭和六年
○日本和歌史　一冊　生田蝶介　昭和七年

◇()帝國歌學史　一冊(上卷。下卷なし)　神谷保朗　明治四十二年
○日本歌學史　一冊　佐佐木信綱　明治四十三年
○大日本歌學史　一冊　福井久藏　大正十五年
○歌論史概說　一冊　峯岸義秋　昭和八年

◇○平安朝勅撰集研究　石井直三郎　日本文學講座第五卷
○和歌史の研究　西下經一　岩波講座日本文學

○私家集の研究　松田武夫　岩波講座日本文學
○勅撰集の研究　藤田德太郎　改造社日本文學講座第六卷
○私家集の研究　西下經一　改造社日本文學講座第六卷
○和歌の歴史　福井久藏　改造社日本文學講座第六卷
○平安朝歌人の研究　金子元臣　改造社日本文學講座第七卷
○平安朝女歌人の研究　石井直三郎
改造社日本文學講座第七卷
○日本短歌史　佐々木信綱　短歌講座第一卷
○日本長歌史　窪田空穗　短歌講座第一卷
○勅撰集解說　松田武夫　短歌講座第四卷
◇○歌學史の研究　久松潜一　岩波講座日本文學
○平安朝の歌學　中島光風　改造社日本文學講座第六卷
○日本歌論史　土田杏村　短歌講座第一卷
◇○日本歌謠史講話　一册　坂井衡平　大正十三年
○日本歌謠史　一册　高野辰之　大正十五年
◇○日本歌謠の展開　藤田德太郎　岩波講座日本文學

第一節　勅撰集の部

古今和歌集

【卷數】二十卷。

【撰者】紀友則・紀貫之・凡河内躬恒・壬生忠岑。

【成立】我が國に於ける最初の勅撰和歌集である。詔勅(醍醐天皇)が下つたのは、大體延喜五年四月十八日とせられるが、奏上の時期は、奏詔の日ほど判然としてゐない。集中延喜七年頃の歌があり、又延喜十三年に行はれた亭子院歌合の歌が採錄されてゐるが、後者は恐らく奏覽後の切續であらうと考へられてゐる。

【本文】現存の傳本には異本が多い。

一、元永本・寫二帖。三井家藏。「校註古本古今和歌集」(尾上八郎校訂。一册。大正十五年[illegible])

二、清輔本。前田家藏傳清輔自筆本(二册)。昭和三年育德財團より玻璃版・活版兩樣にて刊行。)

三、俊成本。俊成自筆。寫二帖。御物。

四、定家本。

(イ)貞應本。最も流布したもの。江戸時代の刊本は殆んどこの系統である。その最古のものは、慶元中刊傳嵯峨本(二册)で、以下承應三年刊本寛文三年刊本等多數ある。昭和三年藤村作編「古今和歌集」(一册)は文和二年頃同筆貞應本(圖書寮藏)によつたものである。

(ロ)嘉祿本。岩波文庫本「古今集」(昭和二年尾上八郎校訂一册)は同氏藏古寫嘉祿本によつたものである。

(ハ)嘉禎本。(吉川家舊藏本)

(ニ)猶、定家本系統に屬するもので、寂恵本(二帖、上帖圖書寮藏、下帖上野精一氏藏)がある。最近古文學秘籍

複製會より玻璃版にて覆製された（三條西公正氏解說附）

五、諸切、古寫本の斷片。高野切・筋切・行成筆切・本阿彌切などがあり、諸家の古筆手鑑等に現存するが、すべて、玻璃版に移されてゐる。

一般的に見て、清輔本・俊成本・定家本は大同小異であるが、元永本は歌數語句共にかなりの異同を見せてゐる。

【諸註】　古來多く存してゐるが、主なるものは左の如くである。

○古今和歌集註　三卷。藤原教長撰。原本は京都帝大藏。（古典全集「古今集」の附錄として凸版に移され、又貴重圖書影本刊行會玻璃版覆製本がある）○顯昭古今集註　四卷。顯昭撰。續々群書類從十五所收。序註のみは、群書類從（二八六）所收。○古今集註密勘　三卷、藤原定家撰。元祿十五年刊（八册）。○古今集註二卷、北畠親房撰。序註のみは、續群書類從（四五二）所收。完本（寫本）は水戶彰考館・竹柏園・山岸德平氏（四册）等藏。

○古今餘材抄　十卷、契沖撰。契沖全集卷五所收。古今集新注の鼻祖として注目すべきである。○古今和歌集打聽　二十卷。賀茂眞淵講述。眞淵全集第一所收。○古今和歌集遠鏡　六卷。本居宣長撰。本居宣長全集第五所收。當時の口語譯である。○古今和歌集正義　二十卷。香川景樹撰。天保六年刊行本は六册（序三卷春夏三卷）のみ。全部は明治十九年活版（四册）。古今集に對する景樹の見識は高く、この著は注目すべきものである。

○古今和歌集評釋　一册。金子元臣撰。遠鏡と同じく、初學者にとつて、便利である。

【特殊研究書】　「古今和歌集目錄」、二卷。傳藤原仲實撰。群書類從（二八五）所收。各卷歌數の調査・歌人略傳がその主なる內容である。

【參考】　單行本としては○古今集時代の研究（一册。安田喜代門著）があり、講座及び雜誌に於ける研究論文は夥しい數に上るが、主なるものは次の如くである。

◇俊成自筆本古今集について（佐々木信綱、「心の花」三二ノ一）○嘉祿本古今集の傳本について（西下經一、「國語と國文學」五二號）○古今集傳本の系統論（西下經一、「國語と國文學」昭和四年一月）○古今集は如何に取扱ふべきか（西下經一、「國語と國文學」昭和五年十月）○弘安本古今集に就いて（松田武夫、「文學」昭和七年三月）○定家本古今集の一證本（三條西公正、「文學」昭和七年六月）○花山法皇本古今集（三條西公正、「文學」昭和七年十月）○古今集の完成上奏の時期（西下經一、「文學」昭和八年八月）○古今和歌集研究史（西下經一、「國語と國文學」昭和九年四月）○平安朝時代に於ける古今和歌集の寫本について（伊藤壽一、「國語國文」昭和九年九・十月）

◇古今集の味ひ（西下經一、「國語と國文學」昭和七年十月）○三代和歌集の韻律的考察（横山青蛾、「國語と國文學」昭和八年六月）○古今集代表歌人の歌風（上田英夫、「短歌研究」昭和九年六月）。

◇古今集と民謠との關係（兒山信一、「國語と國文學」大正十五年九月）○文學論としての古今和歌集序（荒木良雄、「國語と國

文學」昭和三年四月）○古今集序の意義に就いて（風卷景次郎、「水甕」昭和五年六・七月）○古今和歌集序につきての疑（木多辰次郎、「綜合詩歌」昭和九年七月）○古今集六義の再檢討（能勢朝次、「國語・國文」昭和九年八月）○古今傳授の萌芽と古今訓點抄（佐々木信綱、「國語と國文學」昭和九年六月）

◇〔講座〕　古今和歌集研究（尾上八郎、「日本文學講座」第五卷）○和歌史の研究（西下經一、「岩波講座日本文學」）○古今和歌集の基礎的研究（三條西公正、「岩波講座日本文學」）○古今歌集講義（金子元臣、「短歌講座」第五卷）○古今集の修辭（尾上柴舟、「短歌講座」第九卷）○古今集の研究（安田喜代門、「改造社日本文學講座」第六卷）○古今傳授（吉澤義則、「短歌講座」第一卷）

後撰和歌集

【卷數】　二十卷。

【撰者】　清原元輔・紀時文・大中臣能宣・源順・坂上望城。

【成立】　天暦五年十月、村上天皇の詔勅が下り、宮中梨壺に於て萬葉集の訓點を施さしめ給うた時、序でに撰修せられたものである。撰者五人は所謂梨壺の五人で、この外に、藤原伊尹が別當として、この事業に關與してゐる。

【本文】　現在流布してゐるものは、すべて定家書寫本の系統で、古寫本としては、圖書寮藏東常縁自筆本（一冊文明三年寫）關戸家藏片假名本（一冊弘安十年寫）などが主なるものであり、版本としては八代集本（大二冊正保四年刊、小二冊刊年未詳）文化八年刊本（小二冊、豆本一冊）寛政十年刊本（豆本一冊）などがある。活版では國歌大觀・國歌大系・有朋堂文庫・日本歌學全書などに收められてをり、又關戸家藏古寫本は、昭和三年古典全集に收められてゐる。猶最近古典保存會より複製された田中四郎氏藏片假名古寫本（鎌倉中期以前寫）は定家書寫本系統とは異本的位置に立つものである。（參考、同複製本附錄山田孝雄氏解說）

【諸註】　主なるものは次の如くである。

○後撰集正義　一卷一冊。續群書類從（四五四）所收。撰者は、爲家說・昇言說の二說がある。古註として一度は見るべきものであらう。

○後撰和歌集標註　二十卷四冊。岸本由豆流撰、文化十年刊。

○後撰集新抄　二十卷別記一卷。中山美石撰、文化十一年刊本は卷十五以下未刊。歌書刊行會本（活版）には十五卷以下を佐々木信綱博士藏の寫本により補つてゐる。後撰集註釋書として注目すべきものである。○「後撰集詞のつがねなは」一卷。本居宣長著。享和二年刊。宣長全集第五に收む。

【參考】　◇後撰和歌集（松村英一、「短歌叢書」[illegible]）

拾遺和歌集

【卷數】　二十卷。

【撰者及び成立】　撰者及成立年代共に問題のある集であつて、撰者には、花山院說・公任說其他がある。又別に本集に似た內

卷を持つ「拾遺抄」（十卷）があり、兩者の關係に就いても、考ふべき點が多く殘されてゐる。

【本文】 現存傳本には、すべて定家書寫（天福二年）本の系統で、寫本としては、東常緣自筆本（文明二年寫）家仁親王御筆本（以上圖書寮藏）などがあり、刊本には八代集本・貞享二年刊本・寬政十一年刊本・嘉永三年刊三代集本等がある。又活版では、國歌大觀・國歌大系・有朋堂文庫・日本歌學全書に收められてゐる。「拾遺抄」は寫本もあるが、刊本としては、群書類從（一四六）に收められてゐる。

【諸註】 とくに見るべきものはない。○「拾遺集考要」 一卷 契沖撰。契沖全集第六所收。○「拾遺抄註」 一卷 顯昭撰。群書類從（二八九）所收。

【參考】 成立年代・撰者、「拾遺抄」との關係などに就いての諸問題は猶今後に殘された大きな研究目標であらう。◇拾遺和歌集（石井直三郎、「短歌雜誌」三ノ一）

後拾遺和歌集

【卷數】 二十卷。

【撰者】 藤原通俊。

【成立】 成立に就いては諸說がある。序によると、承保二年白河天皇の勅命を受け、應德元年六月頃から撰び始めて、同三年九月十六日に完成してゐるが、一說では、通俊が私撰の集を奏上して、御思召を得たのであらうとも言はれてをり、猶考ふべき點を殘してゐる。

【本文】 現存傳本は、寫本としては圖書寮藏本（寫一册、通俊自筆本系統）京都帝大藏本（寫一册零本、伊房自筆本系統）などがあり、刊本では八代集本（大二册小二册）寬政五年刊本がある。又活版では、國歌大觀・國歌大系・有朋堂文庫・日本歌學全書に收められてゐる。

猶當時源經信・大江匡房などは、斯道の元老であり、通俊の先輩であるに不拘、撰者に選ばれなかつた事についても、考ふべき問題がある。「難後拾遺」（一卷續群書類從四五五所收）は經信の著はしたものであるが、その著作動機には、撰者通俊に對する不滿があるとせられてゐる。

【諸註】 見るべきものなし。

○「八代集抄」 北村季吟撰。

【參考】 ◇後拾遺集（古泉千樫、「短歌雜誌」大正八年十月）

金葉和歌集

【卷數】 十卷。

【撰者】 源俊賴。

【成立】 天治元年白河法皇の院宣により撰進したが、叡慮にかなはず二度目の奏上本も御嘉納なく、三度目に草稿のまゝ奏つたものをはじめて御嘉納になつた。世に流布したのは、そのうちの二度目のものである。

【本文】 一、「初度本」久しくその存在が知られなかつたが、靜

嘉堂文庫藏傳爲相筆本(寫一帖・缺本)が初度本である事が、近時松田武夫氏によつて發見された。二、「二度本」傳本は甚だ多い。刊本としては、八代集本(大一册・小一册)があり、活版では國歌大觀・國歌大系・有朋堂文庫・日本歌學全書に收められてゐる。三、「三度本」、天保九年に傳良經筆本を松田直兄が模刻した本、及び續群書類從三六六所收本がある。

初度本・二度本・三度本相互に異同のあるのは勿論であるが、二度本は、それ自身の諸傳本のうちで、かなり異同を存してゐる。

【諸註】 見るべきものなし。

○「八代集抄」 北村季吟撰。

【參考】 ◇金葉集攷(岡田希雄、「藝文」十八ノ四・五・八―十二、十九ノ一)○三奏本金葉集(岡田希雄、「藝文」十九ノ六―九、十二)○金葉集撰述の態度(岡田希雄、「國語國文の研究」昭和五年三月)○初度本金葉集に關する考察(松田武夫、「國語と國文學」昭和六年四月)

◇金葉集の內容と源俊頼(尾山篤二郎、「短歌雜誌」大正八年十月)

詞花和歌集

【卷數】 十卷。

【撰者】 藤原顯輔。

【成立】 天養元年六月二日崇德院の院宣を奉じ、仁平年中に奏覽した。

【本文】 現存の傳本としては、寫本も若干あり、刊本には、八代集本(大小各一册)がある。歌數は諸本により、僅かに相違してゐる。活版では國歌大觀・國歌大系・有朋堂文庫に收められてゐる。

【諸註】 ○「詞花集註」 一卷。顯昭撰。寫本にて圖書寮藏。

○「八代集抄」 北村季吟撰。

【參考】 ◇詞花集に於ける切[illegible]實(松田武夫、「國語と國文學」昭和九年六月)

◇詞花集の研究(尾上柴舟、「短歌雜誌」大正八年十月)

千載和歌集

【卷數】 二十卷。

【撰者】 藤原俊成。

【成立】 壽永二年二月後白河院の院宣を奉じ、奏覽は本集の序によれば、文治三年九月二十日、明月記によれば、同四年四月廿二日となつてゐる。

【本文】 寫本もあるが、刊本としては、八代集本(大小各一册)繪入刊本(刊行年月不明)文政七年刊本などがあり、活版では國歌大觀・國歌大系・有朋堂文庫・日本歌學全書に收められてゐる。內容は大した異同はない。

【諸註】 見るべきものがない。

○「八代集抄」 北村季吟撰。

【參考】◇千載集の特性——撰者との關係詞花集との關係——（風卷景次郎「國語と國文學」昭和七年十月）

新古今和歌集

【卷數】二十卷。

【撰者】源通具・藤原有家・藤原定家・藤原家隆・藤原雅經。

【成立】建仁元年十一月三日後鳥羽院の院宣が下り、後鳥羽院御親裁の許に撰修せられたものである。その最初の完成は、序にある如く、元久二年三月二十六日であるが、後頻々として切繼が行はれた。德本氏は、元久二年を第一期とし、後鳥羽院隱岐遷幸後成立の所謂隱岐本を第五期として、本集の成立を五期に分けて考へてゐる。

【本文】在來知られてゐる現存古寫本の重なものは、圖書寮藏烏丸光榮自筆本・同一本・久原文庫藏本・前田家藏本（昭和五年玻璃版に覆製）佐々木信綱氏藏本（甘露寺親長書寫本及び中山家舊藏本）高野辰之氏藏源親行書寫本・柳瀨家藏本・石津氏藏本・大島雅太郞氏藏本（二本）・德本正俊氏藏本などであり、刊本には、元和中刊本（古活字本）・元和寛永中刊本（古活字本）・承應三年刊本・延寶二年刊本・元祿九年繪入刊本・八代集本（大・小各二册）等がある。活版では、國歌大觀・國歌大系・有朋堂文庫・日本歌學全書・日本古典全集に收められてゐる外に、單行本として、「隱岐本新古今和歌集」（前掲柳瀨本の飜印。但し柳瀨本は純然たる隱岐本ではない）岩波文庫本「新古今集」（明暦版「二十一代集」本を底本とす）藤村作編校註本（圖書寮本に據る）がある。猶前記の如く、本集は、第一期の成立後盛に切繼が行はれてゐるので、現存傳本も從つて相互にかなり異同を示してゐるものがある。

【諸註】○新古今集聞書　四册。東常緣撰、細川幽齋補。富山房名著文庫所收。

○八代集抄　北村季吟撰。○新古今集增抄　二十卷。加藤盤齋撰。寛文三年刊。○新古今美濃廼家苞　五卷。本居宣長撰。寛政七年刊。又宣長全集第五所收。○新古今尾張廼家苞　五卷。石原正明撰。文政二年刊。又國文註釋全書第八卷所收。宣長の說を補正し、又自說を主張してをり、宣長の著と共に併せ見るべきものである。

○「新古今和歌集詳解」（鹽井正男）一册。○「新古今集選釋」（佐々木信綱）。○「新古今集評釋」（窪田空穗）。○「新古今和歌集註釋」（石田貞吉）二册。

【參考】研究論文は夥しい數に上るが、主なるものは次の如くである。

◇新古今集の成立について（山崎敏夫、「國語國文の研究」十一・十三號）○隱岐本新古今和歌集と久原本（小島吉雄、「九大國文學」昭和六年八月）○吉澤本新古今和歌集（甲）の紹介（尾上春水、「帚木」昭和七年二月）○新古今集編纂にはたらいた意識（風卷景次郎、「水甕」昭和七年三月——七月）○新古今和歌集撰集態度と事業（小島吉雄、「文學研究」昭和八年七月）○新古今和歌集

一異本の紹介（山崎敏夫、「水甕」昭和九年一月）○新古今和歌集の成立について（山崎敏夫、「水甕」昭和九年七・八・九月）○隱岐本新古今集の形態とその價値（松田武夫、「文學」昭和十年一月）

◇新古今集の特質と時代的傾向（風卷景次郎、「國語と國文學」昭和五年十月）○新古今和歌集（石井直三郎、「國語と國文學」昭和七年十月）○新古今新勅撰兩集の風格の差の原因について（風卷景次郎、「文學」八年十二月）

◇「水甕」昭和五年一月「新古今集特輯號」所載論文――○新古今集概論（石井直三郎）○新古今集時代の文學思潮（久松潛一）○新古今集の歌風（兒山信一）○新古今集の成立（松浦貞俊）○新古今集に於ける萬葉歌人の歌（上田英夫）○新古今和歌集の異本に就いて（武田祐吉）○新古今集と現歌壇（山崎敏夫）○修辭から見た新古今集（尾上柴舟）

◇「講座」　新古今和歌集研究（松浦貞俊、「日本文學講座」第六卷）○新古今和歌集講義（石井直三郎、「短歌講座」第五卷）○新古今的なるものの範圍（風卷景次郎、「岩波講座日本文學」）○定家本新古今和歌集の形態（藤本正俊、「岩波講座日本文學」）○新古今集の研究（窪田空穗、「改造社日本文學講座」第六卷）

第二節　私撰集の部

新撰萬葉集

【卷數】　二卷。

【撰者】　菅原道眞か。

【成立】　上卷の序文に寛平五載云々とあり、下卷の序文には、延喜十三年云々とある。延喜十三年は道眞歿後であるから、下卷を他人の撰とする說があるが、又異說（日本文學大辭典、西下經一氏）もある。萬葉集から古今集に至る間の唯一の撰集である點に注意すべきであらう。

【本文】　寫本では、內閣文庫藏本・京都帝國大學（烏丸光廣筆）竹柏園藏本などがあり、刊本では、寛文七年刊本・群書類從（二八四所收）本があるが、猶「萬葉緯」（最近「未刊國文註釋叢書」第一卷としても、活版に附せられた。）卷十一の中にも含まれてゐる。

新撰和歌集

【卷數】　二卷。

【撰者】　紀貫之。

【成立】　醍醐天皇の勅命により、古今集の歌を中心として、撰抄したもので、歌數三百六十首。成立は延長年間である。古今集中の秀歌を抽出した點と、貫之獨りが撰した點とから、貫之個人の歌評態度を窺ふ上に注意すべきものである。

【本文】　刊本では、元祿八年刊本、元祿十一年刊本（書名「新撰貫之和歌集」）などがあり、群書類從（一五九）にも所收。

【參考】　◇紀氏の新撰和歌（武田祐吉、「わか竹」六ノ八）◇新撰和歌集を讀む（島野幸次、「國學院雜誌」五ノ五）○紀貫之

の「新撰和歌」について(窪田章一郎、「槻の木」昭和九年五月)
◇新撰和歌集と貫之の和歌意識(彌富破摩雄、「國學院雜誌」昭和九年一・二月)

古今和歌六帖

【卷數】 六卷。
撰者及び成立 撰者及び成立には諸説があり、猶今後を期すべき點が多い。只歌を作る上の便利のために、古歌集から參考になる歌を抽出し、類題分類して、索引に便にせんとしたのであらうといふ點を、その成立動機とする考へ方は、現在の所相當有力であり、又穩當であると思はれる。
【本文】 寫本も若干あるが、刊本には、寬文九年刊本(大六册)があり、活版では、國歌大觀・續國歌大系に收められてゐる。そして夫木抄・河海抄に、本集よりとして引用せられてゐる歌で現存本に見えないのが若干ある。
【諸註】 ○「和歌拾遺六帖」 一卷。契沖著。契沖全集第六所收。編者成立などに就いて注目すべき説をあげてゐる。○「古今六帖いはじめにしるせる詞」 一卷。賀茂眞淵著。眞淵全集第三所收。○「古今和歌六帖標註」 六卷。山本明清校刊。天保十一年刊行(六册)
【參考】 ◇古今和歌六帖(山岸德平、「國歌大系解題」)○古今和歌六帖について(大城富士雄、「國語國文の研究」昭和五年九月)
◇古今和歌六帖(兒山信一、「水甕」昭和三年九月)

續詞花和歌集

【卷數】 一卷。
【撰者】 藤原清輔。
【成立】 二條上皇の勅命によつて、撰進したのであるが、上皇崩御の爲、勅撰の沙汰がやみ、勅撰集のうちに數へられなかつたと言はれてゐる。
【本文】 群書類從一四八所收の外、國歌大系にも收められてゐる。
この時代には以上の外に、猶、金玉集(一卷。藤原公任撰。群書類從一五九所收)、三十六人撰(一卷、藤原公任撰、群書類從一五九所收)、玄々集(一卷。能因撰。群書類從一五八所收)、後葉和歌集(十八卷。撰者未詳。群書類從一四七所收)、月詣和歌集(四卷。賀茂重保撰。續群書類從三八六・丹鶴叢書等所收)其他がある。

第三節 家集の部

三十六人集

【編者】 不明。
【成立】 之も明らかでないが、公任撰の「三十六人撰」が世に流布した後である事は想像せられる。又千載集雜中の部に「大納言實家のもとに三十六人集をかりて返しつかはしける」云々と

あるから、その當時既に三十六人集としてまとまつて、流布してゐた事は明らかである。

〔内容〕　次の三十六人の家集より成り立つてゐる。

柿本集・躬恒集・素性集・猿丸集・家持集・業平集・兼輔集・敦忠集・公忠集・齋宮集・敏行集・宗于集・清正集・興風集・是則集・小大君集・能宣集・兼盛集・貫之集・伊勢集・赤人集・遍昭集・源順集・元輔集・朝忠集・高光集・友則集・小町集・忠岑集・頼基集・重之集・信明集・元眞集・仲文集・忠見集・中務集

是等三十六人の家集は現在三十六人集(別名歌仙歌集)としてまとまつて傳はつてゐるが、又別々に獨立して傳はつてゐるのもある。そのうち諸傳本共殆んど異同を持たない集もあるが、傳本によつて甚しい差異のある集もある。そして三十六人集として全般的に見ると、次の二つの系統に大別せられる。

一、西本願寺本三十六人集系(昭和年間全部覆製)

二、正保四年刊歌仙家集本系

この異同が、いかなる事情の許に生じたかは、猶今後の解決をまたなければならない。

傳本では、寫本も多いが、西本願寺本(平安末期寫)がその尤たるもので、この系統に屬するものは、圖書寮藏桂宮舊藏本(寫本)靜嘉堂文庫藏傳烏丸光廣筆本などがある。刊本では、前記の正保四年刊本(十五册)があり、現存の多くの寫本は、大牽この系統のものである。又活版では、續國歌大觀、國歌大系に收められてゐる。

尚群書類従にも、この三十六人の家集が全部收められてをり、(特にこの部分のみを三十六人集と題し別に刷行したものもある)その内容は大體に於て、本願寺本系に類似してゐると見られるが、或る集によつては、上述の二系統のいづれにも異同を示してゐるものがあり、三十六人集の成立及びその傳來に就いては考ふべき點が多い。

【參考】　〇三十六人集新考(晶田太吉、「國語と國文學」昭和七年一月)

猶このうち代表的な家集として、貫之集・伊勢集につき略述しておく。

【貫之集】　一卷。貫之歿後間もない時既に貫之集の存在してゐる事が明らかで、(後拾遺集十九その他)或は自撰のものであるかも知れない。三十六人集中の一家集として傳はつてゐるものと、獨立して傳來したものとあり、寫本も若干あるが、刊本としては前記の外、元祿十三年刊本(繪入)がある。内容はかなりの異同を示してゐる。活版では、續國歌大觀・國歌大系・日本歌學全書に收められてゐる。〔參考〕　◇貫之集に就いて(吉田堯文、「國語國文」昭和七年六月)〇紀貫之論(石井直三郎、「短歌研究」昭和八年十月)〇紀貫之論(藤田徳太郎、「文學」昭和九年八月)〇歌論家としての紀貫之(久松潜一、「國語教育」十ノ十一・十二)◇(「講座」)　紀貫之集講話(入江相政、「短歌講座」第六卷)〇紀貫之(半田良平、「改造社日本文學講座」第七卷)

【伊勢集】　二卷〇伊勢集も古く存在してゐた事が知られる(拾

遺集卷十七)。現存傳本では、類從本三十六人集本互に異同を有し、又三十六人集本に於ても、前述の如く、本願寺本系と流布本系とで、甚しい差異を示してゐる。只冒頭數十首が、歌物語風の形式を持つてゐる點では、すべて一致してをり、或はこの部分は伊勢自身の編纂であつたかも知れない。又この部分は家集と歌物語との關係を考察する上にも注目せらるべきものである。活版では、續國歌大觀・國歌大系に收められてゐる。

【參考】◇伊勢集の成立(渡邊泰、「國語國文」昭和九年四月)○伊勢集冒頭の物語の就いて(山崎剛平、「槻の木」昭和九年四月)

猶三十六人集中他の個々の家集についての主なる研究論文は次の如くである。

○人丸集再考(石井庄司、「國語國文の研究」昭和四年三月)○業平集の研究(吉田堯文、「國語國文」昭和九年三月)○小町集論(中澤信、「潮音」六ノ六・七)○小町集新考(品田太吉、「日本短歌」昭和八年四月)○小大君集の隨筆的特色(山崎剛平、「槻の木」昭和八年九月)

曾丹集

【卷數】一卷。

【成立】成立はかなり古い事がわかり(拾遺集卷三、秋)或は自撰のものかも知れない。

【本文】寫本も若干あるが、刊本では、群書類從(二六二)所收本・寶永二年刊本・文化十二年刊本及び曾丹集標註本(文化十年刊)、活版では、續國歌大觀・國歌大系に收められてゐる。

【諸註】○「曾丹集標註」一卷。安田躬弦著。文化十年刊。

【參考】◇曾丹集の所謂源順作の詞書及歌に就いて(早川幾忠、「國語と國文學」大正十四年六月)◇曾丹集の戀歌(早川幾忠、「國語と國文學」大正十五年十二月)○曾根好忠の地位(早川幾忠、「國語と國文學」四〇號)○曾根好忠の人物(岐田種子、「帚木」昭和八年三・四月)○曾根好忠の官位(岐田種子、「水甕」昭和八年四月)○曾根好忠論(風卷景次郎、「短歌研究」昭和八年十月)○曾根好忠についての疑問(池田龜鑑、「文學」昭和九年八月)○好忠の研究(釋迢空、「くぐひ」昭和九年十月)◇〔講座〕曾丹集講話(早川幾忠、「短歌講座」第六卷)

和泉式部集

【卷數】五卷。

【成立】後人の編纂にかゝるやうであるが、その成立については猶研究の餘地を殘してゐる。

【本文】刊本では、群書類從(二七四)所收本があり、活版では日本古典全集・國歌大系・續國歌大觀に收められてゐる。寫本も、水戸彰考館その他に若干藏されてをり、傳本相互、多少の異同を存してゐる。情熱的な歌人として獨歩の地位をもつ式部の歌風を見る上に注目すべき家集である。

【續集】猶右の外に「和泉式部續集」(二卷)がある。續集と云つても、正しい意味の正・續の關係ではなく、又、異本的立場に

立つものでもなく、全く別本とすべきものであらうが、その間の關係についても考ふべき餘地がある。刊本では、續群書類從(四四八所收本・丹鶴叢書所收本などがあり、活版では續國歌大觀・國歌大系等所收本がある。

【參考】◇和泉式部集の歌と和泉式部日記(清水文雄、「文學」昭和七年十一月)○和泉式部正集の形態に關する研究(清水文雄、「國文學試論」第一輯昭和八年九月)○和泉式部正集に於ける重複歌に就いて(村松鐘一、「國漢會誌」第一號、昭和八年十一月)○和泉式部正集の成立(清水文雄、「國文學攷」第一輯昭和九年十月)

◇和泉式部とその歌(上田英夫、「國語と國文學」昭和四年十月)○和泉式部の歌風に就いて(中島貞子、「潮音」昭和九年一月)◇和泉式部傳の研究(岡田希雄、「國語國文の研究」四・八・十・十一・十三・十五・十六・十九・二十)○和泉式部の戀愛生活(岡田希雄、「國語國文の研究」二十四・二十七)◇「講座」和泉式部の歌(與謝野晶子、「短歌講座」第八卷)

散木弃歌集

【卷數】十卷。

【成立】源俊頼自撰のものであらう。整然たる部類がある。

【本文】寫本も多く傳へられてゐるが、刊本では、群書類從二五四所收本・散木弃歌集標註本などがあり、活版では、國歌大系に收められてゐる。内容は諸傳本共殆んど異同はないが、或は後世多少の增補があつたのではないかと疑はれる點もないではない。(參照、岡田希雄「金葉集攷」國文十八ノ九)

【諸註】○「散木集註」一卷。顯昭撰。群書類從二九〇所收。○散木弃歌集標註　四卷。村上忠順撰。嘉永三年刊。

六　家　集

【編者】不詳。

【内容】次の六人の家集を集めたものである。

月清集(藤原良經)　長秋詠藻(藤原俊成)　山家集(西行)　拾玉集(慈圓)　拾遺愚草(藤原定家)　壬二集(藤原家隆)

刊本としては、江戸中期刊十六冊本があり、活版では、國歌大系・續國歌大觀にまとまつて收められてゐる。平安末期から鎌倉初期にかけての、代表的歌人の家集であるから、いづれも注目すべきものであるが、こゝでは「長秋詠藻」「山家集」の二つに就いて略述しておく。(猶、拾遺愚草には既刊の「中世和歌集」小野直氏解說中にあるから略す。)

【長秋詠藻】三卷。俊成自撰と思はれる。部立あり。諸本は、前述の外に古典全集所收本がある。【參考】◇長秋詠藻の成立(見山信一、「國語と國文學」昭和四年七月)○長秋詠藻考(松田武夫、「國語と國文學」昭和五年八月)○片假名本長秋詠藻その他(松田武夫、「文學」昭和七年七月)◇俊成の歌人的生涯(見山信一、「水甕」昭和五年一月)◇「講座」藤原俊成歌集講話(大井廣、「短歌講座」第六卷)以下「古來風體抄」の條參照。

【山家集】　卷數不定。西行自撰か否かについては諸說がある。現存傳本のうち、刊本では、前記六家集本の外に、延寶二年刊本（四册）・京都風月庄左衞門開板本・安政四年板本（共に二册）などがあり、活版では、同じく前記の外に、古典全集所收本・岩波文庫本「山家集」がある。又「異本山家集」（寫一卷）は、明治三十九年藤岡作太郎博士により活版に附されてゐる。猶この外に、山家集とは全く別に、西行の歌を集めたものとして、「西行上人歌集」（寫・一卷、伊達伯家藏。最近佐々木信綱氏により玻璃版覆製された）などがある。〔參考〕◇新たに發見されたる西行歌集について（佐々木信綱、「心の花」昭和四年七月）○異本山家集一本（岡田眞、「アララギ」昭和七年九月）○異本山家集所收「追而加書西行上人和歌」について（伊藤嘉夫、「心の花」昭和九年五月）○古鈔本山家集殘缺本について（伊藤嘉夫、「文學」昭和九年六月）○六家抄と異本山家集――六家集本山家集所傳に關する一考察――（伊藤嘉夫、「日本歌人」昭和九年七月）◇山家集抄（大井廣、「國語國文の研究」十三――十七・十九――二十一・二十四・二十六――二十八）○西行の歌のもつ純粹さ（上田英夫、「水甕」昭和六年九月）○山家集の研究（紀平規、「歷史と國文學」昭和八年十月）◇西行法師論（兒山信一、「國語と國文學」一ノ七）○西行法師の宗教的關心について（谷亮平、「國語と國文學」昭和五年二月）○西行法師評傳（尾山篤二郎、「短歌硏究」昭和八年二月――昭和九年一月）○西行をよみつゝ（吉田絃二郎、「短歌研究」昭和八年五月）○西行上人の歌がたり「西公談抄」について（佐々木信綱、「心の花」昭和五年一月）

◇（講座）○山家集研究（齋藤淸衛、「日本文學講座」第六卷）○山家集講話（尾山篤二郎、「短歌講座」第六卷）○西行（松浦貞俊、「岩波講座日本文學」）○西行法師（尾山篤二郎、「改造社日本文學講座」第七卷）

猶、この外に六家集中の各個の家集についての研究論文のうち主なるものは次の如くである。

○壬二集について（兒山信一、「水甕」昭和五年一月）○異本拾玉集に就て（築土鈴寛、「文學」昭和九年一月）○秋篠月淸集と拾玉集（久松潜一、「國語教育」昭和十年一月）

【附】右に略說したのは、代表的な家集であるが、この他に、この期に屬する私家集には次の如きものが現存する。

◇群書類從所收のもの

師氏集（海人手古良）、義孝集、西宮左大臣高明集、本院侍從集、加茂保憲女集、檜垣嫗集（參考、檜垣嫗集に就いて、岩永胖「國語と國文學」昭和八年五月）、增基法師集（庵主）、惠慶法師集、源兼澄集、安法々師集、藤原相如集、藤原朝光集、藤原實方集、源道濟集、發心和歌集（選子內親王）、藤原長能集、祭主輔親集、源賢法眼家集、淸少納言集、紫式部集、馬內侍集、前大納言公任卿集、權中納言定賴集、赤染衞門集、伊勢大輔集、辨乳母集、相模集、小馬命婦集、出羽辨集、源賴實集、橘爲仲集、經信卿母集、津守國基集、讚岐入道集（顯綱）、在良朝臣集、權中納言俊忠卿集、六條修理大夫顯季

集、一宮紀伊集、伯母集（康資王母集）、待賢門院堀河集、藤原基俊集、大藏卿行宗集、中納言雅兼集、藤原爲忠集、左京大夫顯輔集、大納言成通卿、清輔朝臣集、源三位頼政集、前大納言實國卿集、忠度朝臣集、有房中將集、林葉集（俊惠）、二條大皇太后宮大貳集、源師光集、入道大納言資賢卿集、按納言集（藤原長方）、登蓮法師集、寂蓮法師集、小侍從集、建禮門院右京太夫集、（參考、建禮門院右京太夫のことども、池田龜鑑「國語と國文學」昭和七年八月・建禮門院右京太夫について、島田退藏・「國語國文」昭和九年五月）

◇續詳書類從所收のもの。大江匡衡集、參議爲頼集、源重之女集、藤原家經集、平忠盛集、藤原敎長卿集、殷富門院大輔集。

◇その他。小野篁集、菅家御集、深養父集、大江千里集、九條右大臣師輔集、清愼公集、惟成辨集、道綱母集、（傳大納言殿母上集、荒木田楠千代「國語と國文學」昭和八年一月」）藤原高遠集、藤原道成集、御堂關白集、道命阿闍梨集、藤原惟規集、大貳三位集、時明朝臣集、成尋阿闍梨母集、（第三章日記紀行の條參照）經衡集、四條宮下野集、源經信集、（參考、經信に對する一考察、中谷幸次郎「歌と評論七ノ一」）田上集（源俊頼）、行尊大僧正集、前齋院攝津集、肥後集、田多民治集（藤原忠通）、讃岐集、安藝集、御形宣旨集、式子內親王家集、建禮門院右京太夫集（完本）

第四節　歌學の部

當時の所謂歌學書として、現在に傳へられてゐるものは、かなり多いが、果していかなる程度まで信用出來るかは、仲々の問題であらう。今大體當時のものとして信用し得るもののうち主なるものは次の如くである。（配列の順序は、便宜上久松氏「歌學史の研究」（岩波講座日本文學）中の分類順序による）

【能因歌枕】　一卷。能因撰。元祿九年刊。

【綺語抄】　三卷。藤原仲實撰。所謂五家髄腦の一。活版では歌學文庫所收本がある。

【袖中抄】　二十卷。顯昭撰。慶安四年刊。活版では歌學文庫に收められてゐる。

【俊頼口傳】　二卷。源俊頼撰。別名「無名抄」・「俊秘抄」等。五家髄腦の一。寫本も割に多いが、活版では續々群書類從十五所收本・歌學文庫所收本などがあり、內容は諸本により多少異同を見せてゐる。歌語解釋が、その大部分をなしてゐるが、歌論に於ても注目すべきものがある。（參考、○俊頼無名抄の著者とその著作年代（岡田希雄、「藝文」十二ノ六・七）○俊頼及び基俊の研究（金子實英、「國語國文の研究」十八）○六條家の歌人と其の歌學思想（能勢朝次、「國語國文の研究」十八）

【和歌童蒙抄】　十卷。藤原範兼撰。活版では國文註釋全書所收本がある。

【奧儀抄】　三卷。藤原清輔。五家髄腦の一。慶安五年刊本（八冊）があり、活版では歌學文庫に收められてゐる。又寫本も若干傳はり、前田家に「和歌問答」の外題をもつて傳はつてゐる古

寫本(鎌倉時代書寫と言はれる)は刊本第八册に當つてゐる。諸本により本文に多少の異同を存してゐる樣である。

【和歌色葉集】 九卷。上覺撰。前田家、靜嘉堂文庫などに古寫本が現存し、又上野精一氏も古寫零本を藏してゐる。刊本では寛文五年刊本(九册)があり、活版では、歌學文庫所收本がある。註釋が大部であるが、歌論・雜談などもあり、相當重んぜらるべき書である。

【喜撰式】 一卷。〔孫姫式〕 一卷。この二書は、別に歌經標式(奈良時代の項參照)を加へて「和歌三式」、更に「石見女式」(後記參照)を合せて、「和歌四式」と呼ばれてゐる。刊本、活版本共になく、(但し、「歌經標式」のみは、日本文學類從「上代文學集」中に收められてゐる)寫本は内閣文庫その他に藏せられてゐる。著者及び成立については猶考ふべき餘地があるが、一概に僞書として、しりぞけ得られない理由も存在する。〔參考〕◇四家歌式について(吉澤義則、「藝文」明治四十五年十一月)○文學論として見た初期の歌論(大井廣、「國語國文の研究」二十五號)

【忠岑十體】 一卷。安田文庫藏寫本(平安末期寫本)が最近古典保存會から覆製された。忠岑の著を疑ふ說もあるが、山田孝雄氏は信ずべきものとせられてゐる。〔參考〕前記覆製本附錄解說(山田孝雄)

【新撰髓腦】 一卷。藤原公任撰。五家髓腦の一。まとまつた歌論の書として始めてのものである點に於て注目せらるべきものである。現存傳本のうち刊本では、和歌古語深秘抄所收本があり、活版では續群書類從(四五六)歌學文庫に收められてゐる。寫本も若干あるが、室町以前の書寫にかゝるものは今の所發見せられない。現存本の本文はすべて大體に於て一致してゐる(續群書類從本は後人の書入多し)が、只圖書寮藏の寫一本(一册)は語句内容共に他の傳本と大いなる異同を見せてゐる。久松氏によれば、現存本は零本の由であるが、原形及び現存本の性質については猶考ふべき餘地を殘してゐるやうである。猶、奥儀抄(歌學文庫所收)簸河上(眞觀撰。和歌叢書所收) 井蛙抄(頓阿撰。續群書類從歌學文庫所收)などには、新撰髓腦よりの長文の引用があり、新撰髓腦原形推定上重要なる參考となる。〔參考〕◇公任の新撰髓腦に就いて(久松潜一、「歌と評論」昭和四年十一月、同五年八月)◇新撰髓腦の構成(久松潜一、「短歌研究」昭和八年三・四・五月)◇日本文學大辭典(中島光風氏執筆)

【古來風躰抄】 二卷。藤原俊成撰。刊本では元祿三年刊本(三册)があり、活版では續群書類從四五八に收められ、又最近岩波文庫「中世歌論集」(久松潜一編)に收められたのは、同氏藏寫本である。〔參考〕◇俊成の歌論(山崎敏夫、「國語國文の研究」十八號)○俊成の幽玄體(兒山信一、「青樹」三ノ一――三)○藤原俊成の歌評態度(谷鼎、「國語國文の研究」十八號)○藤原俊成論(古澤義則、「短歌研究」昭和八年十月)○藤原俊成の研究(谷山茂、「國語國文」昭和九年七・九月)幽玄の再吟味(西下經一、「文學」昭和九年七月)

【難後拾遺】 一卷。源經信撰 その成立動機は「後拾遺集」の項に述べた。寫本も若干あり、活版では續群書類從四五五所收本があるが、本文は神宮文庫藏本(一冊)最もすぐれてゐる。〔參考〕◇源經信の歌論(久松潜一、「心の花」昭和五年一・二・四月)◯難後拾遺管見(中谷幸次郎、「國文學研究」一ノ一)

【顯昭陳狀】 一卷。顯昭撰。六百番歌合に於ける俊成の判に對する反駁書。刊本では、群書類從二二七所收本があるが、缺本である。圖書寮藏寫本(一冊)は完本である。〔參考〕◇六條家の歌人と其の歌學思想(能勢朝次、「國語國文の研究」二十五號)

【袋草紙】 四卷。藤原清輔撰。和歌會次第・作法・故實を詳記し、歌人についての雜談など、他の類書の嚆矢にて、注目すべきものである。刊本では貞享二年刊本(四冊)があり、活版では、續群書類從四六〇・歌學文庫などに收められてゐる。猶別に「袋草紙遺編」(一卷)があり、續群書類從四六一・歌學文庫所收。

この外に僞書と認められるものは次の如くである。

【石見女式】 一卷。著者・成立共に不詳であるが、鎌倉室町時代の僞作とするのが妥當ではないかとせられてゐる。(中島光風氏日本文學大辭典中解說)

【秘藏抄】 一卷。傳凡河内躬恒撰。刊本では和歌古語深秘抄所收本がある。

【莫傳抄】 一卷。傳源俊頼撰。寫本にて傳はつてゐる。

【悅目抄】 一卷。傳藤原基俊撰。後世廣く世に用ひられたらしく、刊本では、正保二年刊本(二冊)寛文二年刊本(二冊・表題「更科記」)、群書類從二九一所收本などがあり、活版では歌學文庫、日本歌學全書などに收められてゐる。しかし之が基俊に假託した僞書である事は今日すでに定說であつて、只現存本そのものの成立・傳來に就いては、猶研究の餘地を殘してゐる。異本では、松井簡治博士藏本(和歌叢書に翻印されてゐる)佐々木信綱博士藏本がある。〔參考〕◇和歌史の研究(佐々木信綱著)◯悅目抄の原本和歌大綱に就て(佐々木信綱、「國語と國文學」四ノ三)

第五節 歌合の部

【起原・發達】

歌合の起原に就いては諸說がある。只古今集に歌合の歌が多く見られる事によつて、又、群書類從中に在民部卿家歌合(仁和年間)寛平歌合(寛平年間)などが現存してゐる點によつて、古今集撰進以前既に屢歌合が行はれてゐた事は知られる。しかし之らはいづれも後世のものに比べて、形式的に完備しない點が多かつたのであつて、歌合として形式の整つたのは、村上天皇天德四年内裏歌合に於てであらう。次いで承曆二年内裏歌合以後、歌合は盛に行はれるに至つたが歌合が最も流行したのは、平安末期から鎌倉初期にかけてであつて、六百番歌合、千五百番歌合などといふ大規模な歌合が行はれたのもこの頃である。

【形式】 歌合の完成した形式は、左・右の歌を一番にし、勝負及び判詞を附したものであるが、そのうち判詞が附せられたの

は、現存の資料では延喜十三年亭子院歌合からである。判者は、はじめ一人であつたが、後二人或は數人となり、衆議によつて決せられる衆議判と云ふ形式も生ずるに至つた。そして、天徳歌合に於ける判定の方法は、先づ左右方人が互に論議を鬪はせ、然る後に特定の判者が判定を下すのであつて、この方法は以後多くの歌合に於ても適用され、衆議判の先蹤とも考へられる。

【參考】○歌合の本質(上田英夫、「國語と國文學」三六號)○歌合の起原及び發達(兒山信一、「國語と國文學」昭和五年五月)○歌合の性質と歌合意識の爛熟(峯岸義秋、「鹿兒島日本文學」昭和七年一月)○歌合の本質とその批評意識の展開(松田武夫、「國語と國文學」昭和七年十月)○歌合に關することども(山岸德平「歌と評論」昭和九年一月)

次に當時の歌合のうち代表的なもの若干について略說しておく

【亭子院歌合】 一卷。延喜十三年三月十三日。宇多法皇の御所にて行はれたもの。法皇の御判詞あり。歌合に於て、判詞を持つものの嚆矢である。群書類從一八〇・續國歌大觀・國歌大系などに收められてゐる。

【天德内裏歌合】 一卷。天德四年三月三十日、内裡に於て行はれたもの。判者左大臣實頼。會の樣子は卷頭村上天皇の御記に委しく記されてゐる。歌合の形式が完備したのが、この歌合である事は前述した。群書類從一八一・續國歌大觀・國歌大系に收められてゐる。

【規子内親王家歌合】 一卷。天祿三年八月(或は九月とも)二十八日。判者源順。判詞の外に「判歌」を持つものの嚆矢である。續群書類從四〇七所收。猶他に判歌を持つ歌合としては「若狹守通宗朝臣女子達歌合」(應德三年)「無名歌合」(長治二年)「右衞門督歌合」(久安五年)「千五百番歌合」(建仁元年)等がある。

【國信卿家歌合】 一卷。一名「源宰相中將家歌合」。康和二年四月二十八日。判者源俊賴。群書類從本(二一三)には判詞がないが、圖書寮藏寫本には詳しい判詞がついてゐる。そしてその判詞は天德歌合に於ける判定の方法(前述)が、次第に衆議判へ推移して行く過渡期的の姿をあらはしてゐるものと考へられる。○(參考)「奈良花林院歌合」と「國信卿家歌合」とに就いて(中谷幸次郎「書誌學三ノ一」)

【内大臣家歌合】 一卷。元永元年十月二日。内大臣忠通家に於て行はれたもの。判者は基俊・俊賴の二人で、現在の所では、二人の判者を立てたのは、この歌合からの樣である。群書類從一八三所收

【住吉社歌合】 一卷。嘉應二年十月九日、攝津の住吉神社で行はれたもの。判者俊成。判詞の委しい點で注目すべき歌合の一つである。群書類從一八六所收。

【六百番歌合】 十卷。一名「左大將家百首歌合」。建久四年左大將藤原良經邸で行はれたもの。判者俊成。俊成の判に反對して顯昭の「六百番陳狀」(前述)が出てゐるのを併せて、當時の歌壇の狀勢を窺ふ上に貴重な資料である。刊本では、元和寛永中刊古活字本・寛永十七年刊古活字本・寛永中刊古活字本・承應元

年京都平樂寺刊本があり、活版では、續國歌大觀に收められてゐる。

【千五百番歌合】 二十卷。一名「仙洞百番歌合」。建仁元年六月二條殿で行はれたもの。現存歌合中最大のものである。判者十人(但し、各一人百五十番宛)、當時の歌壇の權威を網羅してをり、「六百番歌合」と共に當時の情勢を知る上に重要な資料である。年代不明の刊本(十册)があり、活版では、續々群書類從十四・續國歌大觀に收められてゐる。

【影供歌合】 一卷。建仁二年五月二十六日。現在の所衆議判の嚆矢として、注目すべきものである。群書類從一九二所收。

【附】猶、この期に屬するものは以上の外、次の如くである。(便宜上建仁二年影供歌合以後は、俊成判、定家判、衆議判のみを記載す。)

○群書類從所收のもの

在民部卿家歌合、寛平中宮歌合、延喜十三年九月九日陽成院歌合、延喜十六年七月七日亭子院有心無心歌合、天延三年二月十四日堀川中納言家歌合、天延三年三月十日一條大納言家歌合、長元二年四月七日大納言家歌合、長元八年五月十六日賀陽院水閣歌合、長曆二年九月十三日源大納言家歌合、長久二年弘徽殿女御十番歌合、永承五年六月五日祐子内親王家歌合、天喜四年四月三十日皇后宮春秋歌合、治曆三年三月十五日定綱朝臣家歌合、治曆三年九月九日禖子内親王家歌合、治曆四年五月五日禖子内親王家歌合、治曆四年十二月廿二日呂保殿歌合、延久四年三月十九日氣多宮歌合、承保二年八月二十日攝津守有綱家歌合、承曆二年四月廿八日内裏歌合、應德三年三月若狹守通宗朝臣女子達歌合、寛治八年高陽院歌合、永長二年東塔東谷歌合、天仁三年四月晦日山家五番歌合、長治元年五月源廣綱朝臣家歌合、永久四年六條宰相實行家歌合、元永二年七月内大臣家歌合、保安二年九月關白内大臣家歌合、大治三年二月五日花林院歌合(俊頼判)、大治三年八月廿九日西宮歌合、大治三年九月廿一日南宮歌合、大治三年九月廿八日住吉社歌合、長承三年九月十三日中宮亮顯輔家歌合、久安五年六月廿八日右衞門督家成卿家歌合、永曆元年七月清輔朝臣家歌合、永萬二年中宮亮重家朝臣家歌合、仁安二年八月大皇大后宮亮經盛朝臣家歌合、嘉應二年五月廿九日右衞門督實國卿家歌合、嘉應二年十月十六日建春門院北面歌合、承安二年十月十七日廣田社歌合、承安三年八月十五夜新羅社歌合、安元元年十月十日右大臣家歌合、治承二年三月十五日加茂社歌合、治承二年八月廿二日歌合、治承三年十月十八日右大臣家歌合、建久二年三月三日若宮社歌合、建久六年正月廿日民部卿家歌合、正治二年二月五日御室撰歌合、正治二年九月十二日仙洞十人歌合、建仁元年老若五十首歌合、建仁元年三月廿九日新宮撰歌合、建仁元年八月影供歌合、建仁元年八月十五日撰歌合、建仁二年六月水無瀨釣殿當座六首歌合、建仁六年九月十三日水無瀨殿戀十五番歌合、建仁二年九月廿九日水無瀨櫻宮十五番歌合、建仁三年七月十五日八幡若

宮撰歌合、元久元年十一月十日北野宮歌合、建永元年七月廿五日卿相侍臣歌合、建暦仙洞歌合、建保歌合（建保二年八月十六日）、建保三年六月二日四十五番歌合、建保三年六月十一日月卿雲客妬歌合、建保四年閏六月九日百番歌合、建保四年八月二十二日歌合、建保四年八月二十四日歌合、建保五年八月十五日右大將家歌合、建保五年右大將家歌合、建保五年十一月四日歌合、慈鎭和尙自歌合、寛喜四年三月廿五日石淸水若宮歌合、貞永元年七月光明峰寺攝政家歌合、貞永元年八月十五日名所月歌合。

近江御息所歌合、源順馬毛名歌合、一條大納言歌合、多武峯往生院歌合、西國受領歌合、源大納言師房卿家歌合、播磨守兼房朝臣家歌合、禖子內親王家庚申夜歌合、禖子內親王家櫻柳歌合、禖子內親王家夏歌合、山家三番歌合、雲居寺結緣經後宴歌合、寛平菊合、上東門院菊合、朱雀院女郎花合、康保三年內裏前栽合、東三條撫子合、後冷泉院根合、郁芳門院根合、仲實朝臣女子根合、圓融院扇合、堀河院艷書合。

○續群書類從所收のもの

天元四年四月二十六日故右衞門督君達歌合、永延二年七月二十七日男女房歌合、天喜元年八月越中守賴家朝臣家歌合、承暦二年四月晦日內裡後番歌合、治承二年賀茂社歌合、治承二年八月二種歌合、正治三年三百六十番歌合、正治二年十月一日歌合。

範永朝臣十番歌合。

○その他

長治二年無名歌合、元永元年十月十三日內大臣家歌合、攝政左大臣家歌合、花林院歌合（基俊判）

第六節　歌謠の部

神樂・催馬樂

神樂は太古から行はれたが、神樂譜が撰定せられたのは貞觀である。其の曲目は庭燎・阿知女以下四十。催馬樂は當時の俗謠で、其の名稱の由來に就いては諸說があるが、神樂の餘興として行はれ、催馬樂譜はやはり貞觀の時に神樂に附屬して撰定せられたものとも考へられてゐる。其の歌は律（二十五首）呂（三十六首）に分れてゐる。

【本文】　神樂・催馬樂を所載する最古の文獻は高倉天皇の治承年間に藤原師長の撰んだ「仁智要錄」（十二卷、寫本にて傳はる。）である。神樂歌の最古の寫本は、傳源信義筆本（安部貞氏藏。平安朝中期寫。昭和五年稻荷神社玻璃版刊）で、次いで、重種注進本（安部貞氏藏。八俣部重種が記るして奉つたもの。同上刊。）及び傳道長筆「神樂和琴秘譜」（近衞公藏一軸玻璃版覆刊。日本歌謠集成所收活版。）等がある。催馬樂には天治二年の識語ある「催馬樂抄」（「天治本」と稱す。圖書寮尊藏。古典保存會玻璃版覆刊。）（日本歌謠集成所收活版）の藤家の傳本、及び鍋島侯爵家藏「催馬樂」（國寶。平安朝の寫本昭和五年稻荷神社玻璃版覆

刊)の源家傳本等がある。其の他なほ諸種の傳寫本多く、刊本としては、元祿二年刊行の梁塵愚案抄(二卷、二册)が最も古い。

【諸註】　註釋は殆ど神樂・催馬樂を併せて行つてゐる。其の主なるものは、○「梁塵愚案抄」一條兼良撰。一名「神樂催馬樂註秘抄」と稱する。上卷神樂、下卷催馬樂。寫本として傳はるものも少くないが、元祿二年に刊行された。(二卷、二册)(續群書類從所收。古いといふだけで重要なものではない。高田與淸は其の本文の價値の低い事を言つてゐる。○「神樂催馬樂註解」寫二册。今井似閑撰。愚案抄といくらも變りはない。○「神樂歌考」「催馬樂考」賀茂眞淵撰。各一卷一册。元來は眞淵が兼良の梁塵愚案抄の刊本に書入を行ひ、兼良の註を取捨して間々自說を加へてあつたものを、後に眞淵の用ひた註の部分のみを書き拔いたものである。本書は後人が皆參照してゐて影響は多い。寫本として傳はつたが、眞淵全集に所收活版となつた。○「神樂歌新釋」本居大平撰。(本居全集所收)殆ど詞章のみの註釋で、大したものではない。寫本も間々傳はつてゐる。○「神樂・催馬樂入綾」六卷。六册。橘守部撰。天保十二年刊。高田與淸の著と共に併せ見る可きもの。(活版本。橘守部全集所收本)○「樂章類語抄」十二卷。內四卷及目一卷のみ文政二年刊、(五册)他は未刊。即ち本文とのみで註は未刊。しかし神樂・催馬樂の先人の研究としては、本書と前の守部の入綾との二書を第一に見る可きである。

○其の他江戸期のものには、平田篤胤の「神樂歌考稿」(全集所收)伴信友の「神樂考」(全集所收)・熊谷直好の「梁塵後抄」四卷、四册。(安政六年刊)○「神樂歌略註」小野高潔撰。(二卷二册。文政六年稿本靜嘉堂文庫藏)○「樂章神樂歌辨解」二卷、下は催馬樂二册。高松の人吉田蒂叔撰。嘉永五年刊)等がある。

明治になつてからのものは、○千秋季隆「神樂歌評釋」一册○今井彥三郎「神樂催馬樂通解」一册(明治三十三年版)等がある。

【參考】◇「神樂・催馬樂」武田祐吉(岩波講座日本文學)○「神樂・催馬樂研究史の輪廓」志田延義(國語と國文學十一ノ四)◇「樂家錄」(寫、五十卷。安部季尙編)○「體源抄」(二十一卷目一卷、寫二十一册。豐原統秋撰。○「敎訓抄」十卷。寫十册。狛近眞撰。(古典全集所收)○「歌舞音曲略史」小中村淸矩(岩波文庫本所收缺印)○「日本歌謠史」高野辰之。

【附、東遊・風俗】

東遊・風俗は神樂・催馬樂と同じ頃に宮廷で整理せられたものである。「東遊」は東方の歌舞、「風俗」は諸國の民謠の謂であるが、風俗は東國の歌が殆ど全部である。其に、高田與淸の樂章類語抄及び「承德本古謠集」等に收められてゐる。後者は近衞公藏。東遊・風俗及び北御門の神樂、介北の神樂を收め、他書に見えぬ歌が多く、卷末に「承德三年三月五日書寫了上」の識語があるので、かく稱する。(昭和五年貴重圖書影本刊行會覆刊。佐々木信綱博士解說附。)(日本歌謠集成所收活版。)○註釋には簡單であるが、賀茂眞淵の「風俗歌考」眞淵全集所收)がある。

【參考】「神樂・催馬樂」（附記）武田祐吉（岩波講座日本文學）

和漢朗詠集

【撰述】 二卷。藤原公任編。種々の略名もあり、又撰述の由來に就いても諸説がある。詩文の佳句を朗詠する爲に、適當な先人の作を集めたもので、詩句に和歌を併せてある。和歌を添へてゐない傳本もあつて、之を後に補つたものであるといふ說もあるが、其の成立年代に近い古寫本に既に備はつてゐるから、和歌をも添へたものが元來の姿であらうと思ふ。

【本文】◇（イ）寫本 公任自筆と稱する古筆（御物、玻璃版覆刊。）の傳はつてゐるのを初め、鎌倉期の寫本の殘存するものも少くない。室町期に入つては抄註を附した傳寫本も頗る多い。本書は郢曲として用ひられる他に、手習用として流行した爲に、其の方面の傳寫本も少くないのである。

◇（ロ）刊本 最古の刊本は慶長中期の刊行に係る整版本（二卷二册、無刊記本なるも春日政治氏藏本に慶長十八年の墨書識語あり、又高野山寶龜院藏慶長十五年刊太平記の原書皮裏張り等に出づ。）で、以下寛永五年、同十九年等頻に重版せられたが、之も一には習字用である爲、何れも文字が大きい。童蒙の爲に繪入刊本も出てゐる。

◇（ハ）活版本 としては、山田孝雄博士が諸本を以て校正し、古寫本の附訓を參酌して校訂した岩波文庫本（日本歌謠集成にも所收）があり、現在では之が最もよい。

【諸註】 早く平安朝より附註が行はれてゐるが、纒つた古注の現存してゐるものには、○和漢朗詠集私註（六卷。二册となつてゐる。應保元年の奥書があり、漢詩文のみを漢文で註し、室町以前に最も行はれた。殊に室町期の古寫本の殘存するものは頗る多數である。後の江戸期の註釋も皆之に基いてゐる。寛永六年刊本一册もある。）○天文十五年の書寫識語を有する「和漢朗詠集註」（二卷、二册。安田文庫藏。漢文註）や、玄惠の作といふ「和漢朗詠集抄」（六卷二册。寛永頃の片假名交り整版本）がある。○なほ傳本の罕な室町以前の註解も二三に止らないが、江戸期のものとしては、和歌の註をも加へた「倭漢朗詠集集註」北村季吟（和歌）・西生永濟（漢詩文）注、寛文十一年刊、十卷五册）（明治四十三年國漢文叢書所收活版・日本歌謠集成第三所收）の古註の集大成があり、○岡西惟中の「和漢朗詠集諺解」（十卷十册、元祿六年刊）○「和漢朗詠集國字抄」高井伴寛（蘭山）（享和三年刊、八卷、四册。）の如き初學の手引がある。（明治四十三年活版）○明治以後のものとしては「和漢朗詠集新釋」金子元臣・江見淸風（明治四十三年版）が詳しく、先人の註を取捨し、新見を加へ、末に詳しい「雜考」（解題）を附してゐる。○「和漢朗詠集考證」柿村重松（大正十五年版）出典及び後の文學に及した影響等を詳しく考へ、又簡明な注を附す。朗詠集の註として最も見る可きものである。

【參考】「倭漢朗詠集」山田孝雄（岩波講座日本文學）

新撰朗詠集

【撰述】二卷。藤原基俊編。和漢朗詠集の續編とも言ふべきものである。

【本文】寫本の傳はるものは甚だ稀で、松井簡治博士藏本（上卷一册本古影寫）を知るのみである。刊本も少く、寛永八年刊本（附訓、二册）と其の翻刻の無年號小本とがあり、又類從三五一所收。他には和漢朗詠集と併せ刻した「頭書新撰朗詠集」が存するに過ぎない。活版本としては、有朋堂文庫（古代歌謠集）日本歌謠集成等の所收本がある。

註解は殆どなく、松井簡治博士の抄註（國學院雜誌第四・五號）と柿村重松氏の「和漢新撰朗詠要解」とがあるのみである。從つて凡ての研究がなほ殘されてゐると言つてよい。

梁塵祕抄

【撰述】後白河院御撰。當時の雜藝の歌詞を分類編纂したもの。本朝書籍目錄には二十卷とある。其の中現存するものは、卷一の抄出と卷二全部とである。

【本文】現存唯一の卷二の寫本は江戶期の書寫に係る。（佐々木信綱博士藏）卷一の抄出本（室町期寫）は綾小路家藏（口傳集卷一の斷簡と合す）右は大正元年和田英松・常盤大定・佐々木信綱三博士に據り解說を加へて刊行せられた。（大正十二年改訂版・昭和七年增補改訂版）其の他、活版本は列聖全集御撰集第二卷・日本歌謠集成第二卷・國歌大系第一卷等に所收、又、岩波文庫本もある。

【附】梁塵祕抄口傳集

同じく後白河院御撰。梁塵祕抄の歌謠集なるに對し、雜藝の故事口傳等を記るされたもの。十卷。今零本のみ殘し、卷一の斷簡は前記綾小路家藏本、又卷十のみは、伏見宮家に藏せられるもの等がある。卷一は梁塵祕抄（活版）に所收、卷十は群書類從（第三五二）に、兩方併せたものは、日本歌謠集成卷二、岩波文庫本等に所收されてゐる。

【參考書】〇「梁塵祕抄研究」・「宗教讃歌研究」志田義秀（新潮社日本文學講座）〇「梁塵祕抄」志田延義（岩波講座日本文學）

【附】〇「和讃史概說」多屋賴俊（昭和八年一册）〇「聲明の歷史及び音律」大山公淳（昭和五年刊）〇「（南山進流）聲明の研究」岩原諦信（昭和七年刊一册）〇「日本音樂講話」田邊尚雄（大正十五年刊一册）〇「日本歌謠史」（高野辰之）

三 日記・紀行・隨筆

平安朝に於ける日記・紀行・隨筆は本質的に一系列として取扱ふべきものである。和歌・物語等に比して在來其の研究も後れてゐたが、輓近、「自照文學」として新たに學徒の注意が喚起せられるに至り、纏つた研究も現れる様になつた。原來、其の作品は比較的少かつたのであるが、現在知られてゐるものは、土佐日記・いほぬし・蜻蛉日記・和泉式部日記・紫式部日記・更級日記・成尋阿闍梨母集・讃岐典侍日記・清少納言枕草子が其の全部である。次に其の各々に就いて略記する。

【參考】○「宮廷女流日記文學」池田龜鑑○「王朝時代の日記文學」池田龜鑑（新潮社日本文學講座）○「平安朝の日記・紀行」西下經一（岩波講座日本文學）

土佐日記

【作者】紀貫之。

【著作年代】貫之の傳記は未詳であるが、日記は承平四年十二月二十一日土佐を出て翌五年二月十六日京に歸るまでの事を述べてゐる。

【本文】一卷。貫之自筆本が蓮華王院に傳つてゐたが今は無く、それを寫した定家自筆本が尊經閣文庫に藏せられてゐる。（育德財團玻璃版複刊）。（高知高等學校開校記念飜印。白石勉氏校訂解說。附、土佐日記地理辨飜印。）日本文學大系本も定家自筆本に據り、橘純一氏の土佐日記も之を基にして註解を加へたものである。他に定家の手を經ない紀氏自筆本による群書類從（第三二七）所收の亞槐（三條西實隆）本系統の傳本（三條西家藏本—古典保存會複刊、圖書寮御藏本等）がある。寛永二十年に初めて刊行せられ、其後、其の刊記のみを改めた後印本には慶安四年、萬治三年及び無刊記本等がある。他に刊本としては扶桑拾葉集所收本がある。又活版本としては岩波文庫本がよい。

【諸註】主なるものを掲げると、

○土佐日記附註　三卷、刊、三册。人見卜幽撰。季吟の抄と同じく萬治四年成立。和漢の故事出典の援引に詳しい。

○土佐日記抄　二卷、二册。北村季吟撰。寛文元年八月刊。定家自筆系統本を底本として略注を施したものである。

○土佐日記考證　二卷、二册。文政二年刊。岸本由豆流撰。總說・註釋ともに先人の說を集成し、出典故事の考究が詳密である。

○土佐日記燈　二卷、三册。富士谷御杖撰。土佐日記の諸抄大成とも見るべきもので註釋書中最も詳密である。（明治三十一

年版。）なほ富士谷成元の「土佐日記抄」自筆稿本一册（東京文理科大學藏）もある。

○土佐日記創見　四卷附一卷。五册。天保三年刊。香川景樹撰。上（本末）下（本末）の四册と別に附錄一册より成る。著者が歌人としての立場より他の考證的な諸註と稍類を異にし、批判的研究の見るべきものがある。

○土佐日記舟の直路　二卷、二册。天保十三年刊。橘守部撰。（守部全集所收）

○土佐日記地理辨　一卷、一册。鹿持雅澄撰。著者が其の生國の關係より日記の地理を考證したもの。（高知高校記念刊行本に飜印附載）

【參考】在來の研究は、其の註釋と本文の研究及び地理的の考證に注意すべきものがある。

◇○「蓮華王院藏貫之自筆土佐日記の本文に關する研究」池田龜鑑（國語と國文學昭和八年九月）○「土佐日記の地理に誤あるか」山田孝雄（文學三ノ一）

いほぬし

【作者】增基法師。

【名稱】いほぬし又は增基法師集と呼ばれてゐた。

〔著作年代〕未詳。村上天皇の天曆初期かそれ以前と推定される。

【本文】一卷。熊野紀行と遠江紀行の二部より成る。古寫本の傳はるものなく扶桑拾葉集に、「遠江の道記」として後部を所收刊行し、群書類從に、「これはとをたあふみの日記」と註記してゐる。國文大觀所收。

【參考】本書が古い文獻である事が確められた程度で他に見るべき研究はない。

◇○「庵主」山田孝雄（國語國文の研究四一）

蜻蛉日記

【著者】藤原兼家の室、道綱の母。

【名稱】上卷末に、「かげろふの日記」と著者自身が名づけてゐる。

【著作年代】記事は村上天皇の天曆八年から圓融天皇の天延二年に至る二十一年間、その中天德二年四年康保元年の三年が闕けてゐる。天祿二・三年頃が詳細である。

【本文】三卷。最後の所には道綱母集が加筆されてゐる。室町以前の古寫本は殆どなく、現存諸寫本は多く契沖の校正を經た傳本で、その類には契沖の自筆書入ある彰考館本を始め、契沖自筆本を忠實に模寫したものに岡倉由三郎氏藏本（和學講談所舊藏三帖）、永森書店藏本（三册）があり、度々の傳寫を經た諸本は、學習院・神宮文庫・靜嘉堂文庫等に藏せられてゐる。他に清水濱臣自筆の一本（東京文理科大學藏、轉寫本京大藏）があり、又萩野由之博士藏本の如き契沖の手を經ない以前の傳本が

ある。板本には、元祿十年刊本があり、若干補刻を行つた寶曆六年・文政元年の後印本がある。活版としては國文大觀・日本文學全書・有朋堂文庫・日本文學大系所收。古典全集本は契沖校正本の一傳本を收む。

【諸註】 註釋書は殆どない。契沖は校正するにあたつて和歌の考證等を若干試みたに過ぎない。

○蜻蛉日記解環　三十六卷十八册。坂徵撰。天明五年刊。本文校訂が十分でなく解釋力の不足してゐる著者の獨斷の訂正や誤解等も少くない。其他に士清・蒿蹊・浚明・成章・季鷹等の說が書入れられた傳本がある。新しくは全譯王朝文學叢書に口譯もある。近時多少註釋を試みてゐるものもあるが、近く松井簡治博士の契沖自筆本に基く詳密なる註釋が出版される筈である

【參考】 在來の此の日記の種々なる文學史家の考察はなほ皮相なる感想の域を脫しないものと言つてよい。本文が難解である上、傳寫の間に生じた本文の不備もあるので、なほ今後古寫本等重要なる資料の發見を期すると共に、まづ在來知られてゐる諸傳本に據つて硏究を遂げ、本文整定を行はねばならないが、現在の處では若干の注意を以て契沖本を基として萩野博士藏本の類を參照して行くのがよい。

◇○「蜻蛉日記に表はされた愛慾の世界」(國語敎育一二ノ一一)齋藤淸衞○「蜻蛉日記に關する二三の考察」荒木田楠千代(國語と國文學八四)○「稿本蜻蛉日記註釋」正宗敦夫(文學八)○「蜻蛉日記に關する新發見」岡田稔(國漢硏究)○「蜻蛉日記人物考」阪口玄章(國語と國文學昭和七年八月)○「道綱の母に於ける精神構造の分析及其の展開」川口久雄(國漢會誌二)○「蜻蛉日記人物考」阪口壽子(文學一ノ二)○「傅大納言殿母上集」荒木田楠千代(國語と國文學昭和八年一月)

成尋阿闍梨母集

【作者】 成尋阿闍梨の母。

【名稱】 佐々木信綱博士は集を日記と改題。

【著作年代】 記事は治曆三年から延久五年に至る七年間である。

【本文】 二卷。圖書寮尊藏の一本。昭和五年六月刊の內藤博士頌壽記念史學論叢の內に所載されてゐる。(佐々木信綱博士校訂解說)(又、岩波書店發行文學附載)(古文學秘籍刊行會玻璃版覆製本は山岸德平氏の詳細なる解說を添ふ。)

和泉式部日記

【作者】 和泉式部。

【名稱】 和泉式部物語とも呼ばれる。

【著作年代】 此の日記は長保五年四月十日餘から翌寛弘元年一月まで二ヶ年間の事を述ぶ。成立年代未詳。

【本文】 在來知られてゐる古寫本としては三條西家藏本と京都帝國大學藏本(應永二十一年權中納言從二位爲尹書寫の奧書ある轉寫本)とがあり、板本としては寛文十年・元文元年・享保

廿一年刊本がある。群書類從・扶桑拾葉集所收のものは少し異る。三條西家藏本（文學第一卷五・八號に飜印附載）は他の本と相違する點が極めて多いが、之が原形に近いか否かはなほ問題である。活版本は國文大觀・有朋堂文庫・日本文學全書・國文叢書・日本文學大系等に收められてゐるものがある。全譯王朝文學叢書中にも收めらる。

【參考】在來現れたものは主として異本の研究、和泉式部の傳記の研究で又近時和泉式部家集の方面の考究も行はれ、其の方面よりもこの日記が注意されてゐる。

◇○「應永本影寫和泉式部日記について」岡田希雄（國語國文の研究二五）○「和泉式部傳の研究」（岡田希雄（國語國文の研究四・六・八・一〇・一一・一三・一五・一六・一九・二〇）○「異本和泉式部日記」池田龜鑑（文學昭和六・十一）

紫式部日記

【作者】紫式部。

【名稱】紫式部日記。又、「紫日記」と記した寫本もある。

【著作年代】此の日記は寛弘五年の秋に始り、六年七年正月までの事が記されてゐる。成立年代未詳。

【本文】二卷。純粹な日記文と消息文の二つの部分から成立してゐる。これに關しては中根香亭（香亭遺文）は現存の日記はその一部の抄出とし、木村架空（正三郎）は脱漏とし、關根正直博士は、もとから短篇零册のもの（紫式部日記精解）であると述べてゐる。然し紫式部日記繪卷（蜂須賀家舊藏・益田男爵家藏等、丹鶴叢書にも所收）によつてもとの日記は今日のものより多少大部な内容を持つてゐたと見るべきであらう。又、現存の「紫式部日記歌」は本書とは殆ど關係のないもので大中赤染衞門の歌集である。現存傳本は皆伏見宮邦高親王自筆の系統に屬する。群書類從卷三二一所收本も亦この系統である。他に刊本としては扶桑拾葉集本がある。活版本としては岩波文庫本が「紫式部日記歌」も添へてあり、校訂もよい。

【諸註】

○紫式部日記傍註　二卷、二册。壺井義知撰。享保二年に成る。略註。

○紫式部日記釋　四卷、四册。清水宣昭撰。文政十三年に成り天保五年刊行。傍註に若干附加したもの、俗語を以て解釋を施して居る。宣昭が傍註に自筆書入を行つた本（京都帝大文學部研究室藏）があり、之が釋のもとである。

○紫式部日記解　五卷。足立稻直撰。國文註釋全書中に收めらる。江戸時代の註釋中最も綿密正確である。

○紫式部日記精解　（關根正直）は略註を加へてあるが精解の名に負はず初學のものにも便宜でない。

【參考】本書は、よい傳本もなく、難解でもある。然し異色の日記文學として、且つ源氏物語の研究と共に若干の研究が進められてはゐるが、なほ多く今後の研究に俟たねばならない。

◇○「紫式部日記に殘缺なるべし」山口たけ子、（文學創刊號）○

「別本紫式部日記と式部傳說」桂泰蔵、（文學創刊號）○「契沖校本紫式部日記」池田龜鑑（文學十九）○「紫式部日記の消息文混入說の否定並に零本說への疑ひ」吉川理吉（國語國文三ノ六）

【附、先人の紫式部評論】

○「紫家七論」（安藤爲章）一卷（國文註釋全書）○「源氏外傳」（熊澤蕃山）五卷。傳寫本多し。（三十幅所收）○「日本紀御局考」（藤井高尙）一卷（百家叢說）

更級日記

【作者】 藤原孝標の女。

【名稱】 古くは、「さらしなのにき」と讀まれたのであらう。定家自筆本に據り更級の漢字を宛てるのがよい。

〔著作年代〕 記事は寛仁四年（著者十三歲）に父上總介と上京する事から始まり、康平元年（五十一歲）夫橘俊通が歿する時までに及ぶ。成立年代未詳。

【本文】 帝室御物定家自筆本が最古のものである。之が中頃に綴ぢ誤られて後傳寫せられた系統本のみが在來行はれて、この日記は錯簡がある爲難讀とせられ、江戸時代の諸學者も種々考究する所があつたが、新しく玉井幸助氏により御物本が發見精査せられて、從來の錯簡が改訂せられた。（玉井幸助「更級日記錯簡考」一册及び御物本玻璃版覆製。）刊本には扶桑拾葉集所收本・群書類從本・元祿十七年刊本・西門蘭溪校刊本等があるが、何れも錯簡本である。近時出版の活版本（日本文學大系・岩波文庫等）は何れも御物本に據つてゐる。

【諸註】

○「更級日記新註」（玉井幸助）一册

○「更級日記評釋」（宮田和一郎）一册

【參考】

○「更級日記錯簡考」（玉井幸助）

○「更級日記詞章研究」白石勉（國語國文の研文一四・一七・一九・二〇・二七）

讃岐典侍日記

【作者】 藤原顯綱の女、伊豫三位の妹、藤原長子。

【名稱】 讃岐典侍が日記（徒然草）讃岐典侍の書たる堀河院の日記（靜嘉堂文庫藏和歌色葉集）。サヌキノスケノニッキ。

【著作年代】 嘉承二年六月の頃堀河院の御惱の事に筆を起し七月の崩御に至る間を微細に述べ、又翌年鳥羽天皇御即位から大嘗會に至るまでの事を述ぶ。

【本文】 傳本は稀であると言はれてゐるが、管見に入つたものに、神宮文庫・住吉文庫・彰考館・三手文庫・山口圖書館・（明倫館舊藏契沖本轉寫）・岩瀨文庫・押小路家・萩野由之（二本）・舊南葵文庫藏の諸本等がある。但し何れも寛永六年仙洞御本を以て書寫した同じ系統の江戸中期以後の寫本で、群書類從所收（第三二二卷）もこの同じ系統本であるが、文字の缺脫した部分等があり、又誤寫も少からず、諸傳本中、南葵文庫本につぐ本

文のよろしからざる一本である。（有朋堂文庫本は群書類従本翻印）

【諸註】

○讃岐典侍日記通釋（國語教育昭七・三—十一）玉井幸助、全卷に亙る詳密なる註釋である。中右記を始め、當時の諸記錄を參照し、其の作者を定め、又本文の註解を施された玉井幸助氏の研究が在來のこの日記に關する主要なる研究業績である。

【參考】

○「讃岐典侍日記の作者について」櫻井秀（わか竹一〇）

○「讃岐典侍日記の作者」玉井幸助（史學雜誌昭四年七月）

枕草子

【作者】　清少納言。（傳記資料）枕草子・家集は言ふまでもないが傍證として清原家系圖・女房作者部類・紫式部日記・古事談第二・無名草子・中關白記・榮花物語等。

【名稱】　清少納言の記（禁秘抄・八雲御抄）・清少納言枕草子（仁和寺書籍目錄・河海抄）と呼ばれた。此の名稱の由來には諸說があるが、本文の末に、「枕にこそはし侍らめ」とあるのに據つたとするのが通說である。前田夏蔭には注意すべき異說（東京文理科大學藏前田夏蔭自筆書入本春曙抄）がある。

【著作年代】　不明であるが、草子中に寛和二年と思はれる記事が最初でそれより十五年後の長保二年八月と思はれる記事が最後であるから、長保二年八月以後の成立であらう。

【本文】　枕草子には異本が多い。岡西惟中の傍註によれば、三卷本・五卷本・七卷本が存する。

○三卷本　この系統本は江戸時代の諸學者にはかなり對校されてゐるが最近まで公刊せられなかつた。傳本は比較的多いが、何れも敎秀書寫本（勸修寺家に現存するといふ）より出で、圖書寮・內閣文庫・京都帝國大學・近衞公爵家（陽明文庫）・久原文庫・刈谷町立圖書館・尊經閣文庫・岩瀨文庫（天明三年寫、三册、柳原家舊藏）・松井簡治博士・京都富岡家・鈴鹿三七氏藏の諸本があり、なほ他本に書入本として傳へられてゐるものも少くない。

○五卷本（七卷本は分割の差異のみ、本文は同系統）では、三條西家藏本を始め、細川侯爵家（幽齋自筆本）東京文理科大學・高野辰之博士藏本等が存する。刊本として最古のものは、慶長中刊古活字印本（十行本・傳本少く、內閣文庫・靜嘉文庫・武藤元信氏遺書等の三本のみ知らる）で、次いで之を順次翻印した慶元中刊十二行古活字印本（二版）及び寛永中刊十三行古活字印本（四種あり、比較的傳本多し）があり、整版本としては慶安四年の刊本（七册・四册・五册に合綴せるものもあり）のみであるが、何れもこの系統本である。

以上の外に異本枕草子として、前記二系統本に比して著しく分量の少い群書類從所收の後光嚴院宸翰本と、同系統で章段の多い堺本がある。堺本は傳本が少く、靜嘉堂文庫・無窮會文庫（國語と國文學特輯號に翻印）・尊經閣文庫・高野辰之博士・池田龜

鑑氏藏本等が知られてゐる。

上述の外に全然組織の異つた本は、尊經閣文庫藏の一本(四帖、鎌倉期寫)である。(育德財團玻璃版覆刊、前記堺本及び假名遺等原本の儘の活字飜印本一册添)。又枕草子繪卷が淺野侯爵家に藏せらる。日本文學全書・國文大觀・國文叢書・有朋堂文庫本等は春曙抄本を基として順次飜印されたが、三卷本は山岸德平氏により初めて日本文學大系本中に所收せられて公刊せられ、次いで藤村作博士編池田龜鑑氏校訂の「枕草子」有馬賴賢氏校本等、最近は三卷本が相次いで活版となつてゐる。

【諸註】 江戶期以前の古註としては淸少納言枕草子註十卷・枕草子三卷本勘物などがあるが、注目すべきものは左の諸書である。

○淸少納言枕草子抄　加藤盤齋撰。十五卷、十五册。延寶二年五月刊。刊本は傳本が極めて稀である。國文註釋全書所收、後には萬才抄と宛て字をしてゐる。本文は三卷本系統に據つてゐて比較的よいが、註解は大したものではない。

○枕草紙春曙抄　北村季吟撰。十二卷、六册。延寶二年刊。盤齋抄より二ヶ月程後れて上梓。(後印本は十二册に分ち、別に裝束撮要抄一册を附加す。)本文の校訂はよくないが註釋は穩健で最も廣く世に行はれ、在來枕草子の底本の如く扱はれて來た。

○枕草紙傍註　岡西惟中撰。十一卷、十一册。天和元年刊。刊記を脫せるもの多し。(靜嘉堂文庫藏本に刊記あり) 本文は三卷本の系統ではないが參考になる。但し註釋は殆ど見どころがない。本書は後に季吟の諸註の流行に因み、書名のみを拾穗抄と改め、初め二頁程を改刻して印行された。(松井簡治博士藏)國文註釋全書・國文註釋叢書に收めらる。他には、

○枕草子裝束抄(壺井義知)　一卷、一册。

○枕草紙通釋(武藤元信)二卷、二册。附校異一册。

○枕草紙評釋(金子元臣)二卷等があり、金子元臣氏は主として春曙抄に據つてゐるが、平易な口譯としては初學者に好適である。

【參考】 江戶時代の諸學者にも注意せられてゐた三卷本の系統本の硏究が近時盛んとなつて、本書の硏究も改つて來た。

○「枕草子硏究」窪田空穗、(新潮社日本文學講座) ○「淸少納言とその作品」池田龜鑑、(岩波講座日本文學)○「枕草子の形態に關する一考察」池田龜鑑、(岩波講座日本文學)○「枕草子に就いて」和辻哲郞、(思想一二)◇○「枕草子解題」山岸德平、(日本文學大系枕草子)○「淸少納言枕草子硏究號」池田龜鑑、(國語と國文學昭二・一)○「枕の草子の硏究」有馬賢賴、(國語國文の硏究二七・二八) ○「枕草子異本硏究」—類纂形態本考證—光明道隆、(國語國文昭九・六・七)○「枕草子諸板本の本文の成立」鈴木知太郞、(文學昭九・二)○「特輯隨筆文學號」(文學二ノ一)

四　物　語

平安朝の文學に於いては、物語は和歌と共に最も重要なる部門をなすものである。從つて江戸時代以來の研究に於いても亦、當然この方面に主力が注がれてゐたには相違ないが、然し其れは、和歌の場合と同じく、物語全般から言へば、竹取物語・伊勢物語・源氏物語等其の中の限られた主要なるもの若干に就いて研究が行はれてゐたに過ぎないのである。物語の研究に於いて共通なる第一の難問題は、本文の整定である。何れの物語にも傳流の間に生じた異本が頗る多數である上に、各作品の浩瀚なる點は更に其の考究に困難の度を加へる。然しながら、時運に會し、人を得て、輓近、先人未踏の曠野も次第に開發せられ、重要なる資料の精査に據る本文研究と各作品の本質の究明とが行はれ、不朽の業績が次第に結成せられつゝある。

平安朝の物語は所謂傳奇的物語と歌物語、歴史物語及び說話物語等に分つ事が出來る。茲にも大體三つに分けて其の殆ど全部に就いて略解しようと思ふ。

なほ當時の物語で既に散佚して傳はらないもの、若しくは殘缺本として現存するもの、又は後代の改作に係るもの等がある事を特に研究上注意しなければならない。之に就いては黑川春村の「古物語類字抄」(墨水遺稿)活版が參考となる。一見類似の書に伴直方の「物語書目備考」・横山由淸の「古物語名寄目識」・狩谷高女(棭齋の女)の「櫻園雜志」所收中の同類書(何れも寫本のみにて傳はる)等があるが、春村の編著の實用に勁ふのとは比較にならない。春村の著には中世期の物語も併せてある事は無論であるが、其の編纂に用ひた資料は、「八雲御抄」「風葉和歌集」「無名草子」「色葉

和歌集」「源氏狹衣歌合」「拾遺百番歌合」及び物語中の記載(例へば源氏物語繪合卷等)であつて、我々は其れ等に遡つて研究する手續をも知らねばならない。

　次に物語全般に關する研究を擧げておく。

◇○小説史稿　一册　關根正直　明治二十三年
　○古代小説史　一册　長谷川福平　明治三十六年

◇○「物語の本質」山岸德平、(國語と國文學三六・三七)○「歷史物語の本質」沼澤龍雄、(國語と國文學三六)○「歷史物語の研究」沼澤龍雄、(改造社日本文學講座)○「平安朝物語文學の自叙傳小説的發達」藤田德太郎、(文學十)○「小説の黎明」藤田德太郎(國語國文三の一・二)○「日本小説の展開」鈴木敏也、(岩波講座日本文學)○「平安朝の物語文學概説」宮田和一郎、(改造社日本文學講座)○「物語文學號」(文學一ノ七特輯號)○「説話文學號」(文學二ノ五特輯號)

◇「日本小説年表」(朝倉龜三)明治三十九年版一册は、江戸期を詳細としてゐて平安朝は粗雜であるから、殆ど參考とならない。其の增訂版は大册にはなつたが、杜撰の度を加へたから、寧ろ小册の舊版の方が江戸期を見るにしても、所收書目は少いが確實性が多い。日本文學大系附載の類書も、確實性に乏しい事は、朝倉氏と五十步百步である。

第一節　物語

竹取物語

【書名・成立】　二卷。或は源順の作などとも言ふが單なる傳説である。○名稱も「たけとりのものがたり」「たけとりのおきなのものがたり」又「かぐやひめのものがたり」等の諸稱がある。○著作年代に就いても、諸説があるがなほ判然としない。古くより存在してゐた竹物翁の傳説が平安朝初期に至つて現存の如き假名の物語となつたものと思はれる。

【本文】　流布の通行本は慶長年間刊行の古活字印本を基とする。慶長至寛永年間の古活字印本には五種あり、正保三年以後には幾多の繪入整版本があるが、本文は何れも異同なく、上下二册より成る。刊本としては別に群書類從(卷三〇九)にも收められ、明治以後國文大觀・日本文學全書・有朋堂文庫・日本文學大系・岩波文庫本(島津久基氏の校訂、卷末に月上女經其の他參考となる可き事項を附載してある。)等に活版收錄せられて居る。寫本として傳はるものも少くないが、室町以前の古寫本は稀である。現在知られてゐる寫本には宮內省圖書寮・內閣文庫・彰考館・尊經閣文庫・三手文庫・靜嘉堂文庫(丹羽嘉言校正)藏の諸本がある。此等の中、三手文庫本等は流布刊本に比して異同がある。なほ嘗て小川壽一氏より武藤元信氏遺書中に片假名本の古寫本があると聞いた。なほ、繪卷物(圖書寮・倉

野憲司氏藏二軸)として傳はるものや奈良繪本(神庫文庫藏、三冊大本)に仕立られたものもある。

【諸註】　註釋書は比較的少く、○竹取物語解　田中大秀撰。五卷、首卷共六册。天保二年刊。(明治廿八年活版。)首卷に於て竹取物語に關する諸種の問題を考證し、其の註解は廣く和漢梵の古書を參照し、竹取物語の註釋中、最も詳密で、この物語を讀む者のまづ據る可きものである。

○竹取物語抄　小山儀撰。二卷、二册。一名「竹取物語補註抄」(國文註釋全書第十二册翻印)天明三年、儀の死後九年にして入江昌喜が遺稿を整理し、翌四年に刊行した。上欄に昌喜自らの考證をも加附して居る。下卷の終りに「竹取物語緣起」と題し竹取物語の作者、竹取の名義(たかとりとよむ可しとす)等を論じて居る。竹取物語註釋刊行の嚆矢ではあるが、參考になる事は少い。なほ稿本のみが傳はつてゐるが田中躬之著の「竹取物語抄補註」(一册、松井簡治博士藏)がある。寫本のみで傳はるものには、○「竹取物語伊佐米言」狛諸成著。寫、一册。圖書寮・宮田和一郎氏。池田龜鑑氏藏)があり、又「竹取物語俚言解」(佐々木弘綱、安政四年刊二卷二册)等もある。○「竹取物語考」(加納諸平)は註釋といふよりもこの物語のモデル說を考究した興味ある所論である。(大正十五年室谷鐵腸氏校訂活版)

參考　この物語の本質に就いて國文學者以外の方面に所論がある。現在までの處では特別に異本と稱するものもなく、注意す可き特別の研究も現れてゐない。

◇○「文學に現れたる我が國民思想の研究」津田左右吉、(貴族文學時代)○「御伽噺としての竹取物語」和辻哲郎、(「思思」第十四號)(日本精神史研究再收)

◇○「竹取物語研究」手塚昇、(新潮社日本文學講座)○「竹取物語の再檢討」橘純一、(岩波講座日本文學)○「竹取物語の研究」高崎正秀、(改造社日本文學講座)

◇○「竹取翁考」柳田國男、(國語國文四ノ一)

伊勢物語

【書名】　一卷。(刊本は多く二卷)「在五の物語」(源氏物語)「在中將」(更級日記)「在五中將日記」(狹衣物語)とも呼ばれる。この書中、業平の作歌が多數を占めてゐるので、業平(在五中將)に因んでかく言はれるのである。

【成立】　撰者には在來諸說があり、其の成立も明確でないが、家集的の性質を多分に有してゐたと見られる。伊勢物語の原形は「古今集」以前に成立し、現在「伊勢物語」の如き形は「古今集」以後に生じたと見るのが穩當とせられて居る。即ち大體現存の如き形の伊勢物語は長期間に亙り、何人かの手によつて成り立つたものと見るべきものであらう。

【本文】　伊勢物語は古今和歌集と相並んで最も傳本の多いものである。

◇(イ)寫本　先づ流布本系統の本文は何れも定家の書寫したと

傳へられるものであるが、これに三種ある。即ち天福本・武田本・所謂流布本である。この所謂流布本の奥には「抑々伊勢物語根源古人說々不同云々」等、作者書名等に就いての說を述べ、次いで和泉式部本の體裁に就いて記し、尙この傳本書寫の由來を述べて居る。其の末には武田本と同じく戶部尙書判とある。

この流布本の外に、伊勢物語の現存本中假名の本は、○塗籠本(大島雅太郎氏藏本古文學秘籍刊行會覆製、群書類從卷三〇七所收)○爲家本(神宮文庫本はこの系統)○傳良經筆本(古典保存會覆製)○時賴本(片假名。相模國最明寺藏同上覆刊)○傳爲相自筆本(池田龜鑑氏藏)○六條家本等がある。

この他に「眞名伊勢物語」があり、(寬永二十年刊二卷本。續群書類從五〇一卷所收)尙眞名本の異本とみるべきものに「舊本伊勢物語」三卷(明和六年七月刊)がある。眞名本の名は河海抄にも其の名が見えるから、近世の作僞とは言へないが、平安朝のものではない。諸本の研究については早く屋代弘賢が參考伊勢物語(二卷、三冊。文化十四年刊)を著し、本文の校定に盡してゐる。◇(參考)伊勢物語に就きての研究(池田龜鑑)

◇(ロ)刊本　次に刊本は定家の天福本の系統で、慶長古活字本嵯峨本十種を始め殆ど繪入、整版に至つては一々枚擧に遑がない。

◇(ハ)活版本　明治以後日本文學全書・國文大觀・有朋堂文庫・國文叢書・日本文學大系・國歌大觀・古典全集・岩波文庫(參考本伊勢物語)等に收錄せられて居る。

【諸註】諸註は多いが見るべきものは少い。次に其の主なるものの若干を揭げる。江戶期以前のものは殊に參考となるもの少く、

○伊勢物語髓腦　寫、一卷。傳在原滋春撰。伊勢物語大體の意趣及び七箇の秘事を述べたもので、卷頭には「左近中將在原朝臣滋春謹序」と記して居るが、後人の假託である。僅かに古註としての歷史的意義を有するのみで、註釋的價値は殆んどない。

○伊勢物語知顯集　寫、三卷。傳源經信撰。(續群書類從五一一所收)「知顯集」「知顯抄」「鳥風論」とも呼ばれる。卷頭に大納言經信と記して居るが、其の名を揭げぬ傳本もある。序言には和歌の起源、六義・六體・歌病等及び撰者、諸本題號に就いて述べ、中卷以下に各段の註釋を試みてゐる。

○伊勢物語肖聞抄　三卷。(又は二卷)牡丹花肖柏撰。「伊勢物語聞書」「十口抄」とも言ふ。本文の摘註で簡便に出來てゐる爲、室町極末期慶長頃に多く行はれ、慶長十四年刊(嵯峨本三卷三冊。二版あり。)慶長中刊古活字本二卷二冊等がある。

○伊勢物語闕疑抄　五卷。細川藤孝(幽齋)撰。卷頭總論に、定家自筆の三本(流布本・天福本・武田本)及び題號等の問題を說き、本文を小節に分つて語釋を附してある。三條實枝・紹巴等の說を初め、肖聞抄・愚見抄等先人の說を多く參照し、比較的程よき分量の註を加へてあるので他に手頃のものがなかつた爲、江戶初期には頗る流行した。

刊本としては元和中仁術門刊古活字印本が最も古く、次いで寬永中刊古活字印本三種を始め、整版本は寬永十一年以後多數重

販せられた。以上は何れも古註に屬するものであるが、古註釋書を集大成した形のものに伊勢物語拾穗抄がある。

○伊勢物語拾穗抄　北村季吟撰。五卷。延寶八年刊、四册。主として幽齋の闕疑抄により所々に師說として松永貞德の說を引用し、之に私考を加へてある。

○伊勢物語新釋　藤井高尙撰。六卷、六册。文政元年刊。首卷總論に於ては古來の諸註を批評し底本及び題號に關する見解を述べ、伊勢物語を文學として講ずべきを論じて居る。註釋は本文を小節に分け詳細なる解釋を附して居る。古註釋及び宣長・信友・重豐等の說を參考し、行文の情緒をも汲取つて解釋すべき事を主張して居る。卽ち本書は此物語を讀む者の第一に見るべきものである。

○以上の諸註の外なほ、比較的多く行はれたもの、及び大部なもの、多少特色のあるもの若干、活版に飜印せられたもの等を擧げると、○「伊勢物語山口抄」(飯尾宗祇)寬文八年刊本は三卷、三册。○「伊勢物語惟情抄」(舟橋宣賢)寫、二卷、一册。○「伊勢物語紹巴抄」(里村紹巴)寫、一卷、一册。○「伊勢物語集註」(和田以悅―一華堂切臨)十二卷、十二册、慶安五年刊。○「伊勢物語(盤齋)抄」(加藤盤齋)五卷、十册。寬文八年刊。刊本であるが傳本が少い。○「伊勢物語抒海」(了意)十卷、十册。承應四年刊。刊本であるが、比較的傳本が少い。○「勢語臆斷」(契沖)四卷、四册。享和二年刊。(契沖全集所收)○伊勢物語古意」(賀茂眞淵)六卷、六册。上田秋成「よしやあしや」一册附。(眞淵全集所收)○伊勢物語童子問(荷田春滿)寫、十三卷。○「勢語圖說抄」(齋藤彥麿)(寫五册、松井簡治博士藏本により國文註釋全書所收)○伊勢物語傍註(賀茂季鷹)二卷、二册。安永五年刊。等枚擧に遑がない。明治以後のものでは、○鎌田正宣「伊勢物語詳解」新井無二郎「伊勢物語諸抄大成」等もある。

〔參考〕

◇「伊勢物語につきての研究」二册(本文篇・研究篇)池田龜鑑

◇「伊勢物語の研究」窪田空穗、(新潮社日本文學講座)○「伊勢物語」大津有一、(岩波講座日本文學)○「伊勢物語の研究」倉野憲司、(改造社日本文學講座)

◇○「伊勢物語の原本について」大津有一、(國語と國文學八十四)○「異本伊勢物語に就いて」佐々木信綱、(文學昭和七年二月)

◇○「伊勢物語の創作心理」齋藤淸衞、(國語敎育十三卷九號)

○「伊勢物語の鑑賞」玉井幸助、(國語敎育十一卷四號)

大和物語

〔成立〕　古く淸輔の頃(袋草紙)より未詳とせられてゐるが、但し在來諸說がある。○(一)在原滋春說(色葉集)○(二)花山院御撰說(一條兼良の歌林良材集)○(三)兩者の折衷說、滋春の作りおきし原作に、花山院の加筆し給ひしものとする(北村季吟、大和物語抄)等。◇著作年代も在來諸說があるが、なほ確定的ではない。圓融・花山・一條の始めの頃とする賀茂眞淵の說などに從ふものもある。

【本文】◇（イ）寫本　清輔の袋草紙にも「本々不同」とあるから、既に平安朝末期に於て、若干本文を異にするものが存在してゐた事が判る。現存諸本は多く二條家の系統本（定家自筆本もこれに屬す）である。古寫本で注意すべきものには尊經閣文庫三條西家（古文學秘籍刊行會覆刊）蓬左文庫・多和文庫（後者二本には定家の奥書が附してある。）藏の諸本がある。なほ卷末に平仲物語を抄錄附載してゐる傳本があつて、圖書寮藏本・御巫氏藏本（この本他本より附載の分量多し）等があり、季吟の大和物語抄にはこの種の一本（但し本文惡し）により平仲物語の抄錄をも附載して居る。但し抄の參照したのは本文の善くない一本で、その附載の末若干を缺いてゐる。其の部分を、上田秋成校刊本は（享和三年刊）村井敬義藏本を以て補つて居る。

◇（ロ）刊本　古活字本に慶元中刊十一行本（一種）元和中刊十二行本（四種）寛永十六年十二行本（一種）寛永中刊十二行本（一種）等の多數があり、其の本文は何れも異同がない。整版本には慶安二年版がある。類從本は屋代弘賢藏本を以て書寫し、村井敬義藏本及び慶安元年印本を以て校合せる由の奥書がある。

◇（ハ）活版本　明治以後の活版本には、國文大觀本・有朋堂文庫本・國文叢書本・日本文學大系本・古典全集本（十一行古活字印本による）等がある。又、武田祐吉博士校註本（明治書院）等の單行もある。

【諸註】○大和物語抄　二卷、二帖。阿波國文庫藏本は慶長前後の寫本。古寫本に見える「勘物」等を集めて一書としたものであらう。從つて傳記典故等の註を主としてゐる。

○「大和物語系圖・別勘」（松永貞德）寫一册。神宮文庫藏（無窮會文庫本は其の轉寫）系圖は貞德の撰と言ひ、別勘は奥書に據れば、季吟の說を正した小册である。之に追考（季吟抄の項參照）をも加へて一册とした傳本もある。以上の二書は季吟の抄の據つて起る所であるから茲に掲げる。

○「大和物語抄」六卷。北村季吟撰。一名「大和物語拾穗抄」。承應二年刊。卷首に諸本・作者・成立年代・題號等に就いて若干の考證がある。註解の方は、阿波國文庫藏の古註の如きもの、師の貞德の說等に、幾何かの自說を加へたものである。從つて出典の考證等に若干見る可き點がある。又、別に「大和物語追考」と題する明暦元年季吟門人元隣の稿本と認む可き一册（寫本）がある。（松井簡治博士藏）

○「首書大和物語」（和田以悅）五卷、五册。繪入。明暦三年刊。季吟の抄と說が一致する部分が多く、何れが何れに基いたかについては論があるが、兩者とも松永貞德を師としてゐるから、所說の一致は其の邊が原因であらうと思ふ。

○「大和物語直解」　三卷。賀茂眞淵。（眞淵全集第四所收）寫本で傳はるものも多い。もと眞淵が、寶暦十年七月より十二月に亙り會讀した際、拾穗抄に自說を記入したものがあつて、村田春海の許に止めておいたのを、寛政五年に安田躬弦が抜き出して一書としたもの。眞淵の古典註解にはこの種の成立事情に基くもの多く、大和物語の場合に於いては、眞淵が書入を行つて、

拾穗抄を取捨してゐる原姿を移寫した拾穗抄(刊本)が多く流傳してゐる。

○「冠註大和物語」(井上文雄)三卷、三册。嘉永六年刊。拾穗抄を底本とし諸本を以て本文の傍に校異し、略解を頭註してゐる。本文の校異は初めの部分のみ詳しく、後半は簡略である。

他に○大和物語管窺抄(高橋殘夢)卷一缺、卷二至四、三册。自筆稿本靜嘉堂文庫藏。○大和物語錦繡抄(前田夏蔭)(一名、「集註」)二卷、寛政五年撰。)國文註釋全書所收。○大和物語虚靜抄(木崎雅興)二卷、八册。松井簡治博士藏稿本に據り、國文註釋全書所收。(東京文理科大學藏本は嘗て活版本の出版以前松井博士藏本を轉寫せるもの。)學習院圖書館等に寫本あり。

【參考】

◇○「大和物語の研究」水野駒雄、(改造社日本文學講座)○「大和物語傳本考」池田龜鑑、(國語と國文學昭四・一)○「伊勢物語と大和物語との成立に關する考察」池田龜鑑、(國語と國文學十ノ十)○「大和物語の異本と平仲物語の發見」川瀨一馬、(國文學誌昭和六年十一・十二月)○「別本大和物語と平仲物語の異本」鈴木脩一、(文學一ノ三)○「大和物語諸本の系統」鈴木知太郎、(文學二ノ五)

平中物語

【書名】又「平仲日記」(本朝書籍目錄)「貞文日記」(河海抄夕顔卷槇柱卷)といふ。

【成立】貞文集の如き歌集があつたものを後人が今本の如く纏めたものか。著作年代は歌物語として伊勢物語の後、大和物語と相前後せるもの、源氏物語以前のものであらうと推定せられる。

【本文】靜嘉堂文庫藏の傳爲相筆の鎌倉中期以前書寫一本のみ。註釋はない。

【參考】○「大和物語の異本と平仲物語の發見」川瀨一馬、(國文學誌昭和六年十一・十二月)

宇津保物語

【書名】宇津保・宇都保・空穗等の字をあて、うつほ(又はうつぼ)物語・或はうつぼの物語とも呼ばれる。

【成立】撰者は不明である。古く源順の作といふ傳說もある。(紫明抄、空穗物語考證)細井貞雄は藤原爲時說を唱へたが、(宇津保物語玉琴)是も確なる證據はなく、然もあたらない。著作年代に就いては、内藤湖南(公任集引書「圓融院の御ときにやうつぼの涼仲忠と何れかまされると論じ」又藏開卷中小野宮備の事見ゆ)に據り、前の方は村上天皇の天曆三・四年頃。國讓・藏開等後の卷まで全部完成したのは圓融天皇の頃かとも推定される。松下大三郎氏は先に、鎌倉以後の僞作かとし、作者も別に立てられて居るが、なほ首肯し得ない。

【本文】古活字本には元和中刊、十一行本二種・元和・寛永中刊本一種があるが、共に俊蔭卷のみで二卷二册より成る。今日

一般に流布して居る刊本は、二十卷、三十冊で、延寶五年に開板し、文化三年更に補刻刊行されたものである。この刊本は底本として用ひたものが甚だ本文價値低く、卷中、繪詞が混入し、且つ刊行者（恐らく書肆）が卷次などをも誤つたので愈々混雜したものとなつてゐる。尙整版本としては俊蔭卷だけを（一卷一冊若しくは上・中・下、三冊）萬治三年に印行したものがある。

寫本としても俊蔭卷のみ單獨に存するものがあり、これ等は美裝の所謂嫁入本として使用せられたものが多い。尙現存寫本中注意すべきものには、宮内省圖書寮（三本）・内閣文庫・帝國圖書館（二本）・神宮文庫（二本及び續うつぼ物語と題する一本あり。）彰考館文庫・尊經閣文庫・松井簡治博士（書入刊本を合し十數本）・三手文庫・山口縣立圖書館・大島雅太郎氏藏本等があるが、室町以前の書寫にかゝる善本は見當らない。又、刊本の校正書入によつて傳はつてゐる本文もある事はいふまでもない。新しいものであるが繪卷物もある（久原文庫藏）。明治以後の活版本は國文大觀・校註國文叢書・日本文學全書・有朋堂文庫・日本文學大系・古典全集等に收められて居るが、其の中、有朋堂文庫本は武笠三氏が諸本を以て校訂し比較的善いものである。卷次は殿村常久の說に據り改めてゐる。

【註釋書】 在來の研究は、卷次の錯亂の訂正と若干の校勘が進められた程度であつて、註釋書には見る可きものもない。

○ 宇津保物語考（桑原やよ子刀自）寫一冊。主として卷次に關する從來の說をあげ、私見を述べたものである。

○ 宇津保物語玉琴・玉松（細井貞雄）玉琴は寫本五冊（四冊）が完本で、文化十二年刊本は二冊のみ刊行。帝國圖書館藏本（寫本四冊）は刊本と異同がある。玉松は之に少し後れて著されたものであらう。第一卷は解說。第二卷以下は異本と整版本との異同を上下に對照してその考異を記して居る。（玉松は國文註釋全書所收）

○ 宇津保物語二阿抄　四卷。目錄一卷。山岡明阿・細井星阿の合著で、兩人の註釋を揭げ、目錄一卷には宇津保物語全體の卷次を追うて綱目を舉げてある。

以上の外に次の如き諸註がある。

○ 宇津保物語考證（清水濱臣）國文註釋全書所收。○「うつぼ物語考證」（横山由清）俊蔭卷のみ、（寫二冊）及び別記寫一冊（東京文理科大學藏）○「宇津保物語年立」（殿村常久）刊一冊。索引としては、○「空穗物語不拂庵」（本多忠憲）寫七冊。帝國圖書館等藏。○「宇津保物語類標」（作者不詳）寫一冊。帝國圖書館藏。○「宇津保物語類語」（小山田與淸）寫一冊。○「宇津保物語頭字部類」（足代弘訓）三卷三冊。神宮文庫（初稿）・松阪町立圖書館（淨書本一冊）藏。

【參考】 善本文を有する傳本に乏しく、其の亂れた本文を校定し、卷次を正す事は中々困難である。成立其の他に就いても種々の疑問を含み、この物語の研究は全く今後の問題であると言つてよい。

◇（）「宇津保物語の作者及年代」金ケ原亮一、（國語國文の研究

第五卷第七號)○「宇津保物語は鎌倉以後の僞作か」松下大三郎、(國學院雜誌三一卷六號)○「宇津保物語を僞作となす說に就いて」橋本佳、(桐の實昭和六年十月)○「宇津保物語繪詞考」林實、(國文學攷第一卷第一號)

◇()「宇津保物語における感情の分裂」田邊つかさ、(國學院雜誌昭和六年五月)()「宇津保物語大要」富澤美穗子、(國漢研究昭和七年二月―十一月)◇「落窪物語・宇津保物語研究」宮田和一郎、(新潮社日本文學講座)・「宇津保物語」(岩波講座日本文學)○「宇津保物語の研究」松尾聰、(改造社日本文學講座)

落 窪 物 語

【成立】 四卷。傳說によれば源順の作とも言ふが、もとより取るに足らない。著作年代も諸說があつて未だ確かなることは分らないが、書中にみられる佛教關係思想を檢討する事によつて圓融帝の末から一條帝の初め頃迄に作られたものではないかと推定せられる。

【本文】◇(イ)寫本　現存諸傳本には、圖書寮尊藏本(三本)・帝國圖書館藏本(二本)・神宮文庫藏本・東京文理科大學藏本(二本)・京都帝大藏本・松井簡治博士藏本(矢島吉從書入本寫二册・賀茂季鷹校正本寫三册・前田夏蔭自筆書入本刊六册・中島信徵自筆書入本六册等)・三手文庫藏本・靜嘉堂文庫藏本(二本)・無窮會文庫藏本(三本)・刈谷町立圖書館藏本・池田龜鑑氏藏本(數本)等があり、其の中眞淵等の說を書入れた傳本が相當の數に上る。又、圖書寮・帝國圖書館藏の繪卷もある。

◇(ロ)刊本は寛政六年の木活字本(四卷四册)があるが比較的傳本が少い。多く見えるのは同じく十一年刊上田秋成校訂の刊本(四卷六册)である。

◇(ハ)活版本　明治以後の活字本には國文大觀・日本文學全書・日本文學叢書・國文叢書・校註日本文學大系・國民文庫・有朋堂文庫等の所收本がある。

【諸註】 眞淵の說を見る可き書入本を初め、諸學者の書入本い說にも若干參照す可きものもあるが、註釋書として公刊せられたものは左の三書位のものである。

○落窪物語註釋(大石千引)二册(一卷のみ)。眞淵及び春海・千蔭等の諸說をもととして註釋したもので一卷のみの註釋書である。

○ 落窪物語證解二卷、笠因直麿撰、(國文註釋全書所收本に甫喜山景雄の著とせるは誤)

○落窪物語大成(中村秋香)四卷。活版本一册。廣く諸註を參考し、又普く異本を校訂し、此の物語の註釋書として最も詳細且優秀なるもので、研究者の是非一讀すべきものである。先づ卷頭に物語に關する總論(提要)があり、作者・著作年代・諸本等に就いて記し、次いで註釋は本文を小節に分つて、傍註及び頭註を施し、本釋として詳密を極めて居る。

【參考】 この物語の研究には公刊せられてゐないが、山岸德平氏の詳密なる研究がある。繼子いぢめの傳說等廣く其の方面か

らも見る可きである。

◇○「落窪物語・宇津保物語研究」（日本文學講座、宮田和一郎）○「落窪物語研究」橋本佳、（岩波講座日本文學）○「落窪物語の研究」岩城準太郎、（改造社日本文學講座）

〔附〕續落窪物語（寫一册、神宮文庫・帝國圖書館藏）は五井純禎の著述である。

源氏物語

【名稱】 五十四卷。紫式部日記・更級日記には「源氏の物語」とあり、源氏一品經には「光源氏物語」とあり、又略して「源氏」とも呼ばれた。（紫式部日記・更級日記・無名草子・明月記）尚更級日記・源中最秘抄等によると「紫の物語」とも呼ばれたことが窺はれる。

【成立】 一般には紫式部の著といふことになつて居るが、別の説もある。紫式部日記によると、式部が上東門院に仕へた頃には既に源氏物語の一部が上流貴族の間に讀まれて居たことが知られるので、少くも寛弘七・八年にはその大部分が成立して居たものと考へられる。それが何時完成したかは不明であるが、寛弘三年を去る十六年後治安二年には菅原孝標女がこの物語五十余卷を得て耽讀したことが更級日記に見えて居る。

【本文】 古くは在つたといふ紫式部の自筆本や・行成の淨書本と稱するものは今日傳はらない。現存の諸傳本は次の三種に大別することが出來る。

（一）河内本系統 河内守源光行及びその子親行等が當時の異本を得て校合した本である。此系統に屬する傳本として今日世に知られて居るものには、尾州徳川家蓬左文庫藏本（寄合書にして、正嘉二年北條實時の書寫識語あり。但し、中十三帖は紙質等は相似せるも、南北朝末葉の補鈔に係り、其の筆跡古筆家者流の所謂淸水谷流なり。恐らくは淸水谷實秋の筆なる可し。）東山御文庫本（二部）・平瀨家藏本・三河鳳來寺藏本・金子元臣氏藏本等があるが、尾洲家本が最もその本文價値に於て優れ、平瀨本は在來河内本として著明であるが、河内本以外の諸本を混淆し、且つ、度々補訂が行はれて近世の新寫の部分さへも混入して居り、金子氏本は十二帖青表紙本の補足本であり、同じく鳳來寺本も幾多の青表紙本が補寫されて居る。東山御文庫本二部は何れも缺本ではあるが、前記尾州家本に次ぐ善本である。蓬左文庫本は最近覆製公刊せられた。なほ零本には蓬左文庫よりも古いと思はれる傳本もある。所謂耕雲本の如きは大方河内本系本文を有つが、稍異なる本文をも含有する。

（二）青表紙本系統 藤原定家所持の本である。尊經閣文庫藏の古寫本「花散里」と「柏木」の二帖は初め數葉定家の自筆にかゝる。今日青表紙本として知られて居るものには、池田龜鑑氏藏本・三條西家藏本・高松宮御文庫本・蓬左文庫本等がある。室町期以前の寫本も少くないが、江戸初期以來の寫本及び刊本（最も古いのは傳嵯峨本（古活字版）次いで元和九年刊古活字印本・寛永中刊無刊古記活字印本があり、慶安以後の繪入整版本

等皆この系統本である。湖月抄の本文もこの系統に屬する。

(三)其他　前記二系統の諸本に比して異なる本文をもつものには傳阿佛尼筆本(紀州家舊藏)・麥生氏筆本(山口縣立圖書館に轉寫本あり)等がある。

源氏物語の傳本は、一々枚擧に遑がない。完本としても相當に存在し、零本・缺本に至つては、殆んど無數といふべきである。明治以後の活字本には日本文學全書・國文大觀・校註日本文學大系・國民文庫・國文叢書・有朋堂文庫・古典全集・岩波文庫等の所收本がある。

【諸註】　源氏物語の註釋書は數多く、枚擧に遑ないが、數の割に參考となる可きものは少いのである。今便宜上次の如き區別を設けて簡單に略記することにする。

◇(全部に渉つて註釋を施せるもの。)

○源氏釋(伊行)尊經閣文庫及び圖書寮(缺本)に藏せられる。現存最古の註釋である。

○「源氏奥入」　三卷(群書類從三一五)藤原定家撰。一名「源氏物語釋」とも言ひ、東山御文庫・圖書寮(缺本)尊經閣文庫等に藏せられて居る。又は「奥入」「定家釋」「難儀抄」とも言はれ、又「源氏秘傳抄」と題する寫本もある。釋と奥入とは故事出典、殊に多く引歌を載せて居る。

○「水源抄」　五十四卷。源光行・親行等撰。傳本不明。原中最秘抄その他諸註釋に引用せられて居る。

○「紫明抄」(釋素寂)卌六卷。一名「水原紫明抄」「素寂釋」とも言ふ(河海抄)。永仁二年鎌倉將軍久明親王に獻じたるもので、原文を長く引き、敦隆・伊行釋・定家・奥入・素寂・今案などと註解の下に引據を記す。

○「原中最秘抄」　源親行撰。二卷(群書類從第三一六所收)親行の原著を、その孫行阿に至るまで代々增補したるもの。源氏物語最秘抄とも言ひ、河海抄には行阿釋と記す。類從本は本文惡く、尊經閣文庫・阿波國文庫等の諸本は善本文を有する。

○「河海抄」(四辻善成)廿卷。(國文註釋全書所收)康曆元年以前成る。始めに物語撰述の由來・作者の傳等を記し、從來の古註を集大成したものとして劃期的のものと言ふべきである。圖書寮・京都帝大圖書館・帝國圖書館・神宮文庫・阿波國文庫・靜嘉堂文庫・彰考館文庫・松井簡治博士藏本等傳寫本多く、若干内容を異にするものもある。

(「源氏物語千鳥抄」(平井相助聞書)一卷。(續類從第五一六所收)本書は連歌師相助が至德三年乃至嘉慶二年の四辻善成の講説を聞書したるもの。一名「至德記」・源氏御談義(源氏談義)・源氏談釋聞書・相助聞書」とも云ふ。猪苗代兼載及び逍遙院の奥書があり、續群書類從本卷末には源氏大鏡の發端の文章を附加ふ。圖書寮・東大圖書館・京大圖書館・阿波國文庫・靜嘉堂文庫等に寫本が藏せられて居る。

○「花鳥餘情」(一條兼良)卅卷。(國文註釋全書所收)河海抄を增補訂正する目的を以て記されたるもの。文明四年に成る。初度本と再度本との間には多少異同がある。初度本系の善本には讀

岐國綾歌郡坂本村松永氏の藏本（天正八年寫）があり、尙國文註釋全書本を初め多くの流布傳寫本は再度本系に屬する。寫本は帝國圖書館・圖書寮・京都帝大・神宮文庫・東京文理科大學・學習院圖書館・靜嘉堂文庫・松井簡治博士・彰考館文庫・阿波國文庫本等に藏せられてゐる。

○「萬水一露」（能登永閑）廿八卷。（寬文三年刊六十二册）天正三年作。一名「源氏物語聞書」又「萬水一露抄」とも言ふ。河海・弄花・細流・花鳥餘情等の諸說を集大成せるもの。圖書寮・帝國圖書館・京大圖書館・靜嘉堂文庫等に寫本が藏せられて居る。刊本も諸庫にある。

○「岷江入楚」（中院通勝）五十五卷。（國文註釋全書・國文註釋叢書）慶長三年成る。河海抄・花鳥餘情・弄花抄・細流抄・明星抄等を引用し前人の諸註を集大成したものである。源氏の註釋書として最も量に於て大且質に於ても優れたるものである。神宮文庫・京大圖書館・龍谷大學・彰考館文庫・東京文理科大學等に寫本が存する。

○「首書源氏物語」（釋子眞）五十六卷。（延寶元年刊・寶永元年刊五四册）本文を揭げ、諸抄を抄錄して、頭註にしたものである。中にも萬水一路に負ふ所が多い。

○「源氏物語湖月抄」（北村季吟）六十卷。（延寶三年刊六〇册）發端に總論を揭げ、年立系圖をも附加す。註釋は古註を取捨して頭註・傍註を附し、時に自說をも記して居る。全釋として簡便に出來てゐるので廣く世に行はれた。

○「源氏物語玉小櫛」（本居宣長）九卷、九册。寬政十年刊。（本居宣長全集所收）、註は主として湖月抄の誤を正し、參考とす可きものが少くないが、初めの方だけしかないのは惜しい。始めに附した年紀考、紫文要領等は源氏物語論として卓越したものである。之には鈴木朖の補遺一卷（文政三年刊）がある。

○「源氏物語評釋」（萩原廣道）十三卷。（國文註釋全書所收、但し花宴まで）花の宴迄公刊せられ、他は稿本の儘傳はるともいふ。嘉永七年刊。別に語釋二卷餘釋一卷あり、諸說を考勘し、その最良のものをとる。語釋の外、俗語を添註し文脈を示し更に評を加ふ。

猶全部に亙つての註釋書は以上の外、○「源氏物語和秘抄」（一條兼良）一卷。（續類從五一八）○「種玉編次抄」（宗祇）一卷寫一册。圖書寮藏。○「源氏一滴集」（正徹）古寫本一册帝國圖書館藏。○「弄花抄」七卷。○「一葉抄」十五卷（牡丹花肖柏）○「細流抄」廿卷。（西三條公條）大永八年作（國文註釋全書所收）○「明星抄」五十五卷、西三條實澄。刊本あり。○「孟津抄」（九條稙通）五十四卷。天正三年作、寫本。○「覺性院抄」（覺性）廿五册、寫本。○「紹巴抄」（里村紹巴）廿卷、廿册（元和寬永中古活字印本及び其の覆刻整版本あり。）○「休閑抄」（昌林）十五册。○「源義辨引抄」（一華堂切臨）二十卷、刊二十册。○「三源一覽」（藤原通俊）十卷十册（阿波國文庫等藏）○「源註拾遺」（契沖）七卷、二册。天保五年刊。○「源氏物語新釋」（賀茂眞淵）五十四卷。寶曆八年作。（眞淵全集所收）○「源註餘滴」（石川雅望）（國書刊行會刊）○「源氏

物語傍註」（齋藤彥麿）五十四卷。（自筆書入本東京文理科大學藏）○「紫文蜑の囀」（多賀半七）空蟬までの三卷四册のみ享保八年刊。他は寫本にて傳はる。（松井簡治博士藏七十二册。）〔以上の中、傳本比較的多きものは所在を記せず。〕

【附】現時啓蒙の口語譯としては、吉澤義則博士編輯の「口一源氏物語」七册（全譯王朝文學叢書）及び同博士監修、宮田和譯郞氏口譯「源氏物語」があり、宮田氏にはなほ卷初及宇治十帖のみ、原文、通解、語釋、三段組の對照譯もある。

◇二、【一卷或は二卷だけの註釋】

○「雨夜談抄」（宗祇）一卷。（續類從五一九）一名「帚木別註」。帚木卷の雨夜の品定のみの註。文明十七年成る。圖書寮・神宮文庫・帝國圖書館・京大圖書館・阿波國文庫・成簣堂文庫等に傳本（各寫一册）がある。

○「雨夜物語たみ詞」（加藤宇萬伎）二卷、二册。安永六年刊。上田秋成の序文あり。頭註・傍註・添註等を施す。

以上の他、○「源氏會讀抄」桐壺卷一册、石橋眞國自筆稿本。松井簡治博士藏○「少女卷抄註」（鈴木朗）一卷、一册。文政七年刊等もある。

◇三、【語彙を類別せる辭書的なるもの】

○「仙源抄」（長慶天皇御撰）一卷。（群書類從第三一八）一名「いろは御抄」長慶天皇の御撰にかゝり、藤原長親の繕寫せるもの。全卷より語彙を摘出し、いろは別にして註解したこの種の形式をとつた最初のものである。類從本は原本に後人が手を入れたもので、本文價値は甚しく低下して居る。弘和初年になる。應永三年及び排雲山人明魏の奥書がある。圖書寮・內閣文庫・京大圖書館・東京文理科大學・彰考館文庫・阿波國文庫・吉澤義則博士藏の諸本がある。

其他○「類字源語抄」（竺常）三卷。（續類從五一七所收）○「源氏物語目案」六卷、刊、三册。○源語詁（五井純禎）（四卷阿波國文庫藏三册）等がある。

◇四、【梗概及び摘要】

○「源氏小鑑」（藤原長親）三卷。藤原長親が將軍勝定院義持に奉りしもの。刊本には古活字本に「嵯峨本」（慶長十五年刊）二卷二册・元和中刊本二卷二册・寛永中刊本（四種）三卷三册を初め、整版本には慶安四年版・明暦三年版・寛文六年版・延寶三年版・明和三年版・寛延四年版・文政六年版・刊年不詳版等があり、又奈良繪本もある。以て、流布の程が推し量られる。寫本は圖書寮・京都帝大・神宮文庫・吉澤義則博士藏の諸本がある。

○「源氏物語忍草」（北村湖春）五卷、二册。天保五年刊。元祿初年成る。源氏小鑑以來の名著として世に行はる。活版本として名著文庫・日本文學大系本源氏物語等に所收。）

○「十帖源氏」（野々口立圃）十卷。十册。萬治四年刊。系圖を附して居る點が便宜である。又、同じ著者の同じ目的の著述に「おさな源氏」十卷、十册。寛文十年刊がある。

其他、○「木芙蓉」二卷、寫二册（阿波國文庫等藏）元久元年正四位下左近衛權少將作。○「紫塵愚抄」（宗長作といふ）四卷、寫四

册。松井簡治博士室町期古寫本藏)〇「源氏綱目」(華堂切臨)九卷、三册。萬治二年刊。等があるが餘り見るべきものはない。新しいものでは、「源氏物語綱要」(藤田德太郎)一册もある。

◇五、【其他】

(イ)難解の事項を説明したものには、

〇「弘安源氏論義」(源具顯判)寛文年刊、一册(群書類從三一七)〇「源語秘決鈔」(一條兼良)延寶八年刊、一卷、一册。(群書類從三一四)

(ロ)秘事・秘傳等を記したもの。

〇「源氏三箇大事」一卷、寫、一册。(圖書寮・神宮文庫藏)〇「源氏十五箇條奥義」一卷、刊一册(阿波國文庫・松井簡治博士等藏)

(ハ)有識故實等に關するもの。

〇「源氏男女裝束抄」(月村齋宗碩)一卷、二册。元祿九年刊。(寫本、内閣文庫等藏。)〇「源氏官職故實秘抄」(壺井義知)八册。(國文註釋全書・國文註釋叢書所收。但し、松井簡治博士藏の一本(寫八册、塙家舊藏)は撰者自筆稿本にして右活版本より一册多し。

(ニ)物語中の人物に就いて記せるもの。

〇「掌中源氏物語」(尾崎雅嘉)一卷、寛政九年刊。〇「源氏紐鏡」(源匡平)一卷。安政六年刊。

(ホ)年表系圖等に關するもの。

△年表—「源氏物語年立」(一條兼良)刊、一册。〇「湖月抄附錄年立」一卷(前書による)〇「首書源氏物語附錄年立」一卷。〇「源氏年紀考、附年紀圖説」(本居宣長)一卷(本居宣長全集)

△系圖—〇「湖月抄附錄系圖」一卷。〇「首書源氏物語附錄系圖」一卷。〇「すみれ草」(北村久備)三卷、三册。文化九年刊。

(ヘ)索引の書。

〇「源氏物語類語」(岸本弓弦)寫六册。〇「源氏物語不排塵」(本多忠憲)二册(圖書寮・帝國圖書館藏)〇「源語類聚抄」(高田與清)二卷。

【參考】 單行本としては、源氏物語研究書目要覽(一册、藤田德太郎著)源氏物語の新研究(一册、手塚昇著)源氏物語と日本庭園(一册)源氏物語の音樂(一册、山田孝雄著)などがある。次に講座及び雜誌の研究は夥しい數に上るが、主なるものは次の如くである。

◇〇「源氏物語に就いて」和辻哲郎、(思想十五)〇「源氏物語の若菜其の他」久松潜一、(國語敎育十二ノ二)(上代日本文學の研究再收)〇「紫式部の物語の製作及び本質上の主義」志田義秀、(國語と國文學二ノ十)〇「薫の性格描寫の解剖とその批評」齋藤清衞、(國語と國文學二ノ十)〇「もののまぎれに就て」山口剛、(國語と國文學二ノ十)〇「源氏物語に於ける女性精神の展開」三浦なを、(國語と國文學昭和六年十二月)〇「源氏物語に於ける二重人格の描寫」西下經一、(國語と國文學昭和七年八月)

◇〇「雲隱否定説」野村八良、(國語と國文學二ノ十)〇「源氏物

語中の引歌」島野幸次、(國語と國文學二ノ十)〇「源氏物語の古鈔についての一考察」宮田和一郎、(國語國文の研究二十六・二十八・三十)〇「鎌倉時代の源氏物語」吉澤義則(歷史と地理七ノ五)(國語國文の研究再收)〇「平瀨本源氏物語」山脇毅、(藝文十二ノ十二)〇「河内本源氏物語とその校訂者」山脇毅、藝文十二ノ十二)〇「曼珠院本源氏物語」山脇毅、(藝文十三ノ十二)〇「三條西實隆と源氏物語」山脇毅、(藝文十四ノ十一)〇「三條西家證本源氏物語」山脇毅、(藝文十六ノ七)〇「夕霧葵の二卷に就いて」河岡新兵衛、(國語と國文學昭和七年三月)〇「平瀨本源氏物語私見」川瀨一馬、(國文學研究一ノ一)

◇「源氏物語研究の初期」山岸德平、(國語と國文學二ノ十)〇「源氏物語繪卷に就て」藤懸靜也、(國語と國文學二ノ十)〇「源氏物語の先縱に關する一考察」岩城準太郎、(國語國文の研究二十九號)〇「源氏物語論の考察」久松潛一、(國語と國文學二ノ十)〇「源氏物語と謠曲」佐成謙太郎(國語と國文學二ノ十)〇「水原抄紫明抄の撰者」山脇毅、(藝文十二ノ一)〇「源氏物語研究史の新資料」橋本進吉、(國語と國文學二ノ十)〇「實隆の源氏物語系圖」山脇毅、(藝文十五ノ五)〇「源氏物語に於ける古代の註釋及び研究」松井簡治、(國語と國文學二ノ十)〇「源氏物語の書誌」植松安、(國語と國文學二ノ十)〇「河海抄の系統に就いて」山脇毅、(藝文十三ノ七)〇「仙源抄の二證本」山脇毅、(藝文十九ノ九・十一・十二)〇「源氏物語聞書と弄花抄」山脇毅、(藝文十五ノ一・二)〇「源氏物語千鳥抄について」橋本進吉、(國語と國文學二ノ十)〇「河海抄の功罪」宮田和一郎、(國語國文昭和六年十一月)〇「珊瑚祕抄とその學術的價値」池田龜鑑、(國語と國文學昭和七年五月)〇「實隆の見た源氏物語註釋書」山脇毅、(國語國文昭和七年八月)〇「水原鈔は果して佚書か」池田龜鑑、(文學一ノ七)〇「源氏物語奧入について」山脇毅、(國語・國文三ノ五)

◇〔講座〕 源氏物語研究(島津久基、「日本文學講座」第四卷)〇源氏物語系統論序說(池田龜鑑、「岩波講座日本文學」)〇源氏物語評釋(島津久基、「岩波講座日本文學」)〇源氏物語の研究(岡崎義惠、「改造社日本文學講座」第三卷)

狹衣物語

【作者】 四卷。作者は未詳。但し次の如き諸說あり。

(一)紫式部の女・大貳三位を作者とするもの(河海抄卷一)(二)禖子內親王家宣旨を作者とするもの(傳案抄ながたまの木の條)

【成立】 次の如き諸說があるが、確證なく、今後の研究に俟たねばならない。

(一)源氏物語の後六十餘年の作とする(狹衣物語下紐)・(二)永承天喜頃の作とする(藤岡博士國文學全史平安朝篇)・(三)白河帝頃のものとする(津田左右吉博士文學に現れたる我國民思想の研究)・(四)鳥羽朝・崇德朝期のものかとする(篠崎五三六氏國語國文昭和八年四月號)

○惟ふに堀河帝の末年頃の作なるべきか。

【本文】 刊本として最も古いものは元和九年心也開板古活字本四巻四冊である。次いで元和無刊記本二種、寛永無刊記十三行本等の古活字本があり、整版には承應三年版本、下紐系圖附十六冊、寛文十一年本等がある。尙古寫本として注意すべきものには、深川淳一氏藏本・內閣文庫藏本・池田龜鑑氏藏本(數種)圖書寮御藏本(數種)・神宮文庫藏本・靜嘉堂文庫藏本・大島雅太郎氏藏本・鈴鹿三七氏藏本・松井簡治博士藏本等がある。明治以後の活版には國文大觀・有朋堂文庫・日本文學大系・校註國文叢書等に收錄せられて居る。

【諸註】 註釋書として見るべきものは殆んどない。

○「狹衣物語下紐」 四巻(國文註釋全書・國文註釋叢書)連歌師里村紹巴の作。天正十八年に成る。初めに小序・系圖等を記し各巻毎に難語句を摘出し、註を記す、引歌等を主とせるものであるが、その註釋的價値は餘りない。著者紹巴の自筆稿本も現存し、其の他慶長頃の古寫本もある。

○「狹衣文談」 四巻、寫本(靜嘉堂文庫藏)作者未詳。文祿三年季秋成、先づ本文を數行掲げ後に註を附す。下紐說を主とし、自說を「私」として記す。註釋的價値殆んど見るべきものなし。

○「狹衣物語抄」 二巻(帝國圖書館藏)連歌師猪苗代兼壽作。天和二年成。各巻毎に先づ本文の難語句を摘出し、註を施す。但し下紐に負ふ所多く、時に作者の自說を註す。下紐よりも稍詳しい。

以上の外○「狹衣物語入紐」(一巻、河村秀根著。名古屋市立圖書館藏)○「狹衣物語解綾錦」(寫一冊。足立稻直著。香木國文庫藏)等があり、又淸水濱臣校合書入本・石川雅望校合書入本(共に帝國圖書館藏)等がある。吉澤博士監修の全譯王朝文學叢書中にその全文の口語譯が收められて居る。

【參考】

◇○「狹衣物語考」櫻井秀、(國學院雜誌十五ノ十)○「狹衣物語の著作について」野々口精一、(國學院雜誌十五ノ九)○「雅望書入本狹衣物語より見たる物語構想の一考察」久松潛一、(黑潮三ノ一)(上代日本文學の研究再收)○「狹衣物語作者の表象」齋藤淸衞、(國語教育十三ノ一)○「狹衣物語の基礎的研究」復刻五三六、(國語國文昭和八年四月)○「狹衣論考」宮田和一郞、(國語國文昭和八年四月)○「狹衣物語の引歌に就て、附制作年代考」平井孝一、(國語國文第三卷第四號)○「狹衣物語の一傳本」武田祐吉(文學十二)○「古本狹衣の一證本」橋本正俊、(文學昭和八年十月)○「榊原芳埜舊藏狹衣物語鈔本に就いて」片寄正義、(書誌學第一卷第六號)○「傳爲秀筆狹衣物語古寫本に就いて」——特に狹衣物語の本文研究上よりみたるその本文價値——片寄正義(書誌學第四卷第一號)○「古本系狹衣物語の一傳本」——內閣文庫藏狹衣物語古寫本のもつ本文價値——片寄正義(書誌學第四卷第二號)○「狹衣物語流布本考序說(上)」片寄正義、(國文學研究一ノ一)◇「狹衣物語」入江相政、(岩波講座日本文學)○「狹衣物語の研究」復刻五三六、(改造社日本文學講座)

濱松中納言物語

【書名】 現存本五卷。(首卷缺)。「濱松中納言物語」「濱松物語」「みつの濱松」等の名稱がある。
【作者】 未詳。御物本更級日記(定家自筆)の奥書及び拾遺百番歌合等よりして大體菅原孝標の女と傳へられて居る。
〔著作年代〕 未詳。孝標女をその作者とすれば、大體後冷泉天皇の末年頃の作と推定せられる。
【本文】 現存本は六方首卷及び末卷を缺く、在來紹介せられてゐるものでは尾上八郎博士本等のみ末卷を有す。傳本として注意すべきものは圖書寮・帝國圖書館・內閣文庫(二種)・尊經閣文庫・靜嘉堂文庫・淺野圖書館・刈谷町立圖書館・松井簡治博士・佐々木信綱博士藏の諸本等があるが何れも近世初期を遡ることがない。刊本としては德川時代のものとしては丹鶴叢書中に收められたもののみである。明治以後の活版本は國書刊行會本・日本文學全書・國文叢書・校註日本文學大系・國文大觀等に收められて居る。
【諸註】 此物語の註釋書は全く見るべきものがない。唯僅かに次の如きものが存するに過ぎない。
○濱松中納言物語目錄(小山田與清)一册。○濱松中納言物語系譜(岡本保孝)一册。(國文註釋叢書)
【參考】 在來缺逸となつてゐた末卷が近頃發見せられ、この物語研究も進展を見た。其の初卷の發見を今後に期する。
◇○「濱松中納言物語末卷略考」松尾聰、(國語と國文學八ノ四)
○「濱松中納言物語末卷に就いて」松尾聰、(文學七年二・三月)
○「菅原孝標女」松尾聰、(岩波講座日本文學)○「濱松中納言物語の作者に就いて」宮下清計、(國文學研究一ノ一)

夜半寢覺物語

【書名】 五卷(或は三卷)「夜半の寢覺」(無名草紙)傳本により「夜の寢覺」或は「寢覺」とも稱せらる。
【作者】 未詳。但し今日は一般に「更級日記」及び「濱松中納言物語」の作者と稱せらるる菅原孝標女といふ傳說が信ぜられて居る。
【著作年代】 未詳。作し作者を孝標女と假定すれば、濱松中納言物語と同じく後冷泉帝頃のものかと考へられる。
【本文】 近世に於ける刊本は全くない。傳本も稀であり寫本として今日その所在の明らかなるものは、尊經閣文庫(三册)佐々木信綱博士・靜嘉堂文庫・東北帝國大學狩野文庫・帝國圖書館(以上各、五册)等の諸本である。明治以後、活版もなかつたが近年、校註夜半寢覺(藤田德太郎・增淵恒吉)校本夜半寢覺(橋本佳)が相次いで公にせられた。又、古筆の繪卷物が一卷ある。(詞書は校註本に附載)
【諸註】 近世に於ける此物語の註釋書は全く見當らない。僅に系圖年立を記した「夜寢覺物語窓のともしび」寫一册。横山由清

著（帝國圖書館藏）があるのみである。尙藤田增淵雨氏の校註夜半寢覺には頭註があつて初學者には好伴侶たるものである。

【參考】 寫本のみで僅かに傳はつてゐたこの書が近頃相次いで公刊せられ、この物語の研究に期を劃したが、なほ藤岡博士が嘗て紹介せられた中村秋香氏藏の三卷本（武藤元信氏遺書中にありといふ）に對する再検討が殘されてゐる。

○「菅原孝標女とその作品夜半寢覺の形態に就いて」松尾聰、（岩波講座日本文學）○「現存夜半の寢覺は果して改竄本なるか」橋本佳、（思想昭和六年四月）○「寢覺物語繪卷について」增淵恒吉、（文學昭和七年八月）○「黑川本夜半の寢覺」（文學一ノ五）

◇○「校註夜半寢覺」「校本夜半寢覺」附錄研究論文。

堤中納言物語

【名稱】 十卷。風葉和歌集に引用された所によると、各卷別の各稱が用ひられて居るので古くは各卷別の名で各個に呼ばれて居たものであらう。

【作者】 未詳。從來堤中納言藤原兼輔を作者に擬したが、その內容と此人物とは著しく時代が懸隔するので、もとより信ずるに足らない。

【著作年代】 未詳。今後の研究に俟たねばならないが、現に次の如き諸說がある。

（一）醍醐天皇時代となすもの（入江昌喜・清水濱臣舊藏現無窮會文庫藏本附錄解說）（二）永承以後となすもの（日本文學全書解題）（三）鳥羽天皇又は近衞天皇以後とするもの（藤岡作太郎博士「國文學全史平安朝篇」）（四）嘉禎より文永に至る約三十五年間の作とするもの（淸水泰氏「堤中納言物語詳解附錄」）（五）平安朝末期の作とするもの（藤田德太郎氏「日本文學講座」中）

【本文】 近世に於ける刊本は見當らない。明治以後の活版本は多く十卷一冊本を用ひ、日本文學全書・國文大觀・續群書類從（五〇四卷）・校註國文叢書・日本文學大系等の所收本がある。現存諸傳本中注目すべきものには、圖書寮舊藏本（二部）・尊經閣文庫藏本（二部）・內閣文庫藏本・松井簡治博士藏本・帝國圖書館藏本・神宮文庫藏本・無窮會文庫藏本・刈谷町立圖書館藏本・靜嘉堂文庫藏本等がある。なほ「異本堤中納言物語」と題する淸のは實は「小夜衣」で本書とは全く關係のないものである。（淸水・後藤氏等論文參照）

【諸註】 江戶期に於ける註釋書は書入位のもので纏つたものは見當らない。最近のものでは、

○「校註堤中納言物語」久松潛一、刈谷町立圖書館藏村上忠順の標註を全部飜印してある。（錦小路・藤田兩氏の論文附）○「堤中納言物語評釋」淸水泰、（附錄の解題は最も參考となる）○「頭註定本堤中納言物語」（立命館大學出版部）

【參考】 ○「異本堤中納言物語と小夜衣」淸水泰、（書物の趣味第一號）○「堤中納言物語と小夜衣」後藤丹治、（國語と國文學昭和三年五月）○「堤中納言物語研究」藤田德太郎、（日本文學講座）○「堤中納言物語私考」淸水泰、（國語國文の研究三八）○「堤中

納言物語雜觀」玉井幸助、(國語教育昭和四年十一月)〇「堤中納言物語に就いて」小泉環玖夫、(國語・國文昭和七年二・三月)

とりかへばや物語

【作者】 四卷。不詳。

【著作年代】 無名草子及び風葉集には「とりかへばや」「今とりかへばや」の二つを擧げて居る。現存本がその何れに屬するかに就いては次の如き各説がある。

〇一「今とりかへばや」とす(山岡浚明)〇二「古とりかへばや」は鎌倉以前で「今とりかへばや」は鎌倉中期の作とす(黑川春村)〇三、この二種の本とも亡佚せりとす(岡本保孝)〇四「今とりかへばや」は古とりかへばやの一部を修正したものであるとする(藤岡作太郎博士)

風葉集及び無名草子の「今とりかへばや」に就いての記錄は大分現存本に見出し得るので、「今とりかへばや」の成立も平安末期或は鎌倉初期のものと推定せられる。「古とりかへばや」はそれ以前であることは明白であるが、平安朝中期以後のものと考へられる。兩者の間には著しい時間的懸隔はないものの如くである。無名草子の作者は今とりかへばやの方により多くの文學的價値を認めてゐる。

【本文】 近世年間における刊本は無い。明治以後の活版としては、日本文學全書・國文大觀・國文學叢書・日本文學大系等に收錄せられて居る。傳本は多く存在するが近世以前のものは殆んどない。寫本として圖書寮・內閣文庫・刈谷町立圖書館・靜嘉堂文庫・尊經閣文庫・池田侯爵家・松井簡治博士・佐々木信綱博士等に藏せられてゐる。

【諸註】 全く見るべきものがないといつてよい。

〇「取替ばや物語考」岡本保孝、一冊。(國文註釋全書、關根正直博士藏)〇「取替ばや物語年立系譜」岡本保孝、一冊。(靜嘉堂文庫藏)

【參考】

◇〇取りかへばや物語の怪奇其の他(田邊つかさ「鹿兒島日本文學昭和七年五月」)

多武峯少將物語

【書名】 一卷。「多武峯少將」又は「高光日記」(仁和寺書籍目錄)とも言ふ。

【著者】 未詳。その當時にあつて高光に親しく仕へた人の書き集めたものとも言はれる。

【著作年代】 未詳。著者を高光に近侍した人とすれば村上帝の應和から康保年間にかけて書かれたもの。

【本文】 傳本は稀である。丸林孝之の「多武峯小將物語考證」(文政八年刊一冊)には二種の異本を以て校訂して居る。傳寫本には圖書寮文庫藏本・阿波文庫藏本・尊經閣文庫藏本(二部)・彰考館文庫藏本・松井簡治博士藏本等があるが、何れも群書類從本系統である。近世の刊本としては、前記「多武峯少將物語考

證」及び「群書類從本」があるのみである。明治以後の活版本としては、日本文學全書・國文大觀等の所收本及び國文註釋全書所收の「多武峯少將物語考證」がある。

【諸註】「多武峯少將物語考證」（丸林孝之）一冊が僅に存するのみである。

【參考】

◇○「多武峯少將物語の文學的意義」岩永胖、（國語と國文學昭和六年十一月）○「多武峯小將物語の成立年代と高光の歿年」坂口玄章（國語と國文學昭和八年十二月）

第二節　歴史物語

榮華物語

【名稱】古くは世繼（讃岐典侍日記・袋草子）と稱せられた。

【作者及び著作年代】醍醐天皇の寛平九年から堀河天皇の寛治六年まで約百九十六年間の事柄を關白道長の榮華を中心に編年體に敍したものである。古來赤染衞門の著と傳へられてゐるが、契沖は前三十帖を赤染衞門、後十帖を出羽辨の作として二分し、安藤爲章は赤染衞門說を否定した。最近には三條西公正氏の說（岩波文庫本解題・岩波講座日本文學）—（前三十卷を赤染衞門・後十卷は不明の女性とす。）がある。

【本文】古寫本としては、京都田中家に藏せられる古寫本もあるが、最近三條西家藏本が紹介された。（岩波文庫所收）其の他、圖書寮（桂宮舊藏）・內閣文庫・帝國圖書館・神宮文庫・東京文理科大學（村田春海手澤本）・靜嘉堂文庫・彰考館等の藏本が知られてゐる。刊本には元和寛永中刊の古活字印本（二十冊、傳本比較的多し）と整版本としては、明曆二年刊本（繪入小型本）と繪入九卷本（目錄幷系圖一卷）とがある。九卷本は元來繪卷物の詞書を刊行したものであるが、繪卷物に詞書を採錄する時に詞章を改めずに抄錄したらしく、其の本文が比較的善いのを特色とする。

【諸註】古註にも又新らしいものにも註釋として餘り整つたものはない。

○「榮華物語抄」（三條西實隆）九冊。○「榮華物語抄」（大石千引）四〇卷。（國文註釋叢書第十一所收）○「榮華物語抄」（岡本保孝）九卷。（國文註釋全書第七所收）○「榮華物語抄附錄」（岡本保孝）一卷。（國文註釋全書第七所收）○「榮華物語目錄年立」（土肥經平）二卷。（國文註釋全書第七・國文註釋叢書第十一所收）○「重修榮華物語系圖」（橋山成德）一卷。（國文註釋全書第七所收）（國文註釋叢書第十一所收）○「榮華物語詳解」（和田英松・佐藤球、）これが在來のものでは最も目につくものである。

【參考】

○「榮華物語考」安藤爲章、（國文註釋全書第七所收）○「榮華物語研究」和田英松、（新潮社日本文學講座）○「榮華物語」三條西公正、（岩波講座日本文學）○「榮華物語の成立及び內容に關する一考察」松村博司、（國語と國文學十一ノ二）

大鏡

【名稱】世繼物語とも言はれた。

【著者及び著作年代】著者未詳。在來藤原爲業・源經信・藤原能信等が作者に擬せられて居る。其の記事は文德天皇の御代から御一條天皇の萬壽二年まで十四代約百七十五年間に亙り、又記事の中に萬壽二年以後と思はれるものがあり、それ等の內部徵證に據つて萬壽二年以後の著作なることは明らかである。これに就いては近時山岸德平氏の注目すべき研究（岩波講座日本文學）がある。（作者源俊明、著作年代、天永三年から永久二年までの約三年間とす。）

【本文】大鏡の本文中、或は後人の書込みかと疑はれてゐた分註附書の部分が崇德天皇の長承三年と明記する打聞集所引の大鏡本文にも存するから、それが原作の姿である事が判つたが、但し流布印本は言ふまでもなく古來の系統本にも後人の書込みがある。古本系統の三卷本は、後人の書込み、竄入も比較的少い。但しこれも細別すると二系統あつて、（一）裏書分註のある尾州家蓬左文庫（寛永の奥書あれど今少しく後代のものか、彰考館藏本は其の轉寫。岩波文庫所收本、和田英松博士校訂は史料編纂所藏蓬左文庫本の新轉寫本による）・圖書寮（桂宮舊藏）及び他一本・近衞公爵家（陽明文庫本）松井簡治博士（烏丸家舊藏・松井博士校定本底本）藏の諸本及び下卷のみの「雑々物語」と題するものは、阿波國文庫・池田龜鑑氏藏本等と（二）裏書の分註のない千葉胤明氏（現存最古寫本・零本・元來は六卷に分たれしものなるべし。古典保存會覆刊）圖書寮（一本）及び陽明文庫（一本）・京都帝大（平松家本）藏等とがある。六卷本は千葉本の系統で、關根正直博士藏本があつたが震災にて燒失。流布印本は、慶元中の古活字印本が最初で、之に分割は六卷となつてゐるが、後の整版本（八卷本）は之に基いたものであるから著しく增補がある。比較的傳本が多い。整版本は慶安前後の印行と認められる。活版本、史籍集覽本は、歷代弘賢の校本を收めてゐるが、流布本系で、以下大鏡詳解（落合直文・小中村義象校註）も流布本を用ひ、松井・藤野兩博士の校定本は初めて三卷本を基として公刊され、後はこれを定本の如くに扱ひ、（佐藤球氏の大鏡詳解も之による）皆之に據つてゐるが、なほこれは古本に對し流布本を混入した不純の本文を有するから、古本系統の眞本文を有する校定本が新らたに生れねばならない。

【諸註】

○裏書　前述の如く打聞集にも見えるから著作後間もなく書かれたものであらう。其の古本の分註を纏めたものに、

○古本裏書　（國文註釋全書所收は本文惡し）がある。又は裏書（國史大系第十七冊所收・史籍集覽本裏書と同一）・群書類從本（改訂史籍集覽第三十二所收）・續從本裏書（第四四九、古本裏書と別系統本。本文よし。）がある。

○大鏡短觀抄　五卷。大石千引著（國文註釋全書所收）其の他に大鏡新註（關根正直）大鏡詳解（落合直文・小中村義象校註・多

く短觀抄に據る)・大鏡詳解(佐藤球、故實的な註釋に就いては穩當で見るべきものがある)等がある。其の他のものは、今では殆ど參考にならないから省略する。

【參考】

◇○「大鏡の著作年代と其の著者」西岡虎之助、(史學雜誌第三十八卷第七號)○「早大文學研究」(第一輯)五十嵐力○「大鏡研究」五十嵐力、(新潮社日本文學講座)○「大鏡概說」山岸德平、(岩波講座日本文學)○「大鏡の研究」北西鶴太郞、(改造社日本文學講座)○「大鏡と榮華物語との關係及び大鏡の著作年代について」平田俊春、(史學雜誌四五ノ一二)

今鏡

【作者】 不明、源通親等が擬せられてゐる。

【名稱】 信實朝臣所持本には、「新世繼」とあり、之がよいと思はれる。流布本には「續世繼」とある。其の他、小鏡・つくもがみの物語とも言はれる。

【著作年代及び記事年代】 嘉應二年成立と信ぜられる。大鏡の後を繼いだ後一條天皇の萬壽二年から高倉天皇の嘉應二年までの歷史物語である。

【本文】 古寫本としては毛利子爵家舊藏鎌倉極初期古寫本(信實朝臣所持本の轉寫本)があり、數葉古筆の手鑑にとられ落丁があるが本文研究上最も重要な善本である。此の系統の傳寫本も若干ある。(東京文理科大學藏本等)又金澤文庫に鎌倉鈔本の斷簡が藏せられてゐる。其の他には尾州德川侯爵家藏本(應永の奧書あり)・前田侯爵家藏本などがある。刊本は慶安三年の整版本、天保十三年木活字本がある。活版本は明治二十九年刊關根正直博士校定によつて始めて刊行せられた。

【諸註】

○今鏡證註(和裝二冊、校定本共五冊)關根正直。○今鏡新註(一冊校定本に補訂を加へ證註を若干補正したもの)關根正直。

【參考】 「日本文學大系解題」尾上八郞。○「古寫本今鏡斷簡」藤崎俊茂、(國語と國文學昭和八年十二月)

水鏡

【作者】 中山忠親といふ。

【著作年代】 不明。今鏡の後に出たといふ芳賀矢一博士の說がある。

【本文】 藤貞幹等も水鏡に異本の存在する事をのべてゐる(好古小錄)。詳略二系統の本があるやうであるが、なほ今後の研究を要する。眞福寺藏の一本が最も書寫が古く、其の他内閣文庫・神宮文庫・帝國圖書館・靜嘉堂文庫・蓬左文庫・無窮會文庫・松井簡治博士・近衞公爵家藏本等がある。流布の刊本としては慶元中刊の古活字本があり、其の飜刻の整版本がある。校定水鏡(三鏡共刊)、史籍集覽本には屋代弘賢校正本により、校定水鏡(萩野・松井・關根氏校定)は松井簡治博士藏本(烏丸本)を底本とする。國史大系本には尊經閣文庫藏本が收められてゐる。

【諸註】○水鏡詳解（一册、江見清風著）
【參考】
◇○校定本解說（松井簡治博士）○「水鏡の書名・卷數著者について」西岡虎之助（歷史地理四五ノ三）

第三節　說話物語

日本國現報善惡靈異記

【成立】　略して「日本靈異記」又は單に「靈異記」ともいふ。奈良藥師寺の僧景戒の撰。在來著作年代に關し說があつて、或は、內部徵證に據り、弘仁十三年の內に著作せられたものともいふが（板橋氏）、輓近本の如き形態は淳和天皇の天長以後と見る說が出た（倉野氏）。自序に據れば、支那の般若驗記・冥報記等に倣つて我が國の實例を擧げて因果應報の必然なるを說いた。
【本文・諸註】　◇（イ）寫本　最近世に紹介された興福寺藏の平安朝期の書寫になる上卷（一軸）が最も古く、（昭和九年三月玻璃版覆刊）同本が三十一條であるのに本書は三十六條あつて完く、內容が正しく、訓釋詳しく、其の語數も多い等、幾多の善本文たる性質を有する。在來知られてゐたものは、高野山金剛三昧院藏本（建保二年寫上卷、今行方を失す。彰考館に轉寫本あり。この種のものが江戸期に間々轉寫されてゐる。）大須眞福寺藏本（中下二卷、二軸。國寶。鎌倉期書寫。）及び尊經閣文庫藏本（下卷一帖。嘉禎二年寫。玻璃版覆刊。）等がある。
◇（ロ）刊本　正德刊片假名交り印本（三册）もあるが、狩谷棭齋が大須本・高野本を以て校正し、之に攷證を附して刊行した本文が群書類從（第四四七）にも所收せられて多く行はれるに至つた。（攷證本古典全集所收。）
◇（ハ）活版本　古典全集本等の他、單行としては「校訂日本靈異記」板橋倫行（昭和四年刊）がある。
【參考】　江戸末期に狩谷棭齋の校勘訓義の研究があつて以後は、撰述問題に關する檢討が從來の主なる所論となつてゐる。
◇「靈異記の研究」橋川正、（藝文三ノ三）（日本佛教史の研究再收）○武田祐吉「上代國文學の研究」○「日本靈異記の撰述年代に就いて」板橋倫行、（國語と國文學七ノ二）○「日本靈異記の撰文は果して僞作なるか」池田龜鑑、（國文學踏査第一輯）○「日本靈異記の撰述年代について」[illegible]、（國語國文四ノ四）○日本靈異記攷」倉野憲司（文學二ノ十二）

三寶繪詞

【作者】　源爲憲。
【著作年代】　總序の終りに永觀二年仲冬とある。
【本文】　三卷。東大寺觀智院舊藏本（三册）があり、下卷の末に、「文永十年八月八日書寫本を以て書寫了」とある。國寶。他に關戸家藏本（一帖）は奧に、「保安元年六月七日書[illegible]」とあ[illegible]」とある。この本の斷片を東大寺切と稱して珍重する。前田侯爵家藏本（三册）は正德五年の書寫本で、（東寺六[illegible]二

年寫叡賢、裏具註脺)その原本は所傳不明である。活版本としては大日本佛教全書の傳記叢書所收。又近く高瀨承嚴氏の刊行本がある。

【參考】

◇〇「源爲憲の三寶繪」中川忠順、(學燈一三)〇「三寶繪詞の研究」安西覺承、(國文學踏査第一輯)〇「三寶繪詞に現れたる傳敎大師」橋川正(日本佛敎文化史の研究)

法華修法百座

【著作年代】 法華修法百座は鳥羽帝の天仁三年(一七七〇)二月廿八日から開講せられたもので、主催者は白河帝の皇女禎子内親王である。其の後重ねて二百日の御講があつた。それらを大安寺の僧の都永が筆記した。それを抄出したものが本書である。天仁三年閏七月十一月が現存本の最後の法談となつてゐる。

【本文】 原本は法隆寺藏、卷子本、一卷。國文學秘籍刊行會より玻璃版覆製。同書の解說(山岸德平氏)參照。

打聞集

【作者】 未詳。現存本は表紙に桑門榮源とある。

【成立年代】 原本の紙背の文書の年記に天永二年(一七七二)の語が見え、表紙の外題と署名との間に、「長承三年(一七九四)云々」の語がある。

【本文】 零本一卷。佛敎說話集、山口光圓氏が滋賀縣愛知郡の古寺で發見し(大正十四年九月雜誌書物禮讃)、有川武彥氏の紹介があり古典保存會より覆製された。特に註釋書や研究論文はない。

【參考】 古典保存會覆製本解說。岩波日本文學講座、大鏡概說(山岸德平氏)に「打聞集に引用した大鏡」として詳說されてゐる。

今昔物語

【作者】 三十一卷。源隆國の作と說へられてゐるが誤である。

【名稱】 「今昔物語集」と言ふべきであるが、普通「今昔物語」と呼んでゐる。

【著作年代】 小野玄妙博士の說によつて三寶感應要略錄の日本渡來以後なる事が明らかにせられ(現代佛敎四六)、山岸德平氏は鳥羽帝の御卽位前後、長治・嘉承・天仁(一七六四—一七六九)頃と推定した(岩波日本文學講座今昔物語概說)。

【本文】 三十一卷中、卷八・一八・二一の三卷を缺いてゐる。その卷の順序などに關しても諸本中に多少の異同がある。(佐藤誠實博士・芳賀矢一博士の說がある)。坂井衡平氏の調査以外にもなほ傳本が少くない。刊本としては享保十八年刊三〇卷十五册(本朝部のみ)と丹鶴叢書本(卷十三至十六、廿二至卅一の三十册)がある。活版本としては、考訂今昔物語・史籍集覽本・國書刊行會本・國文叢書本・攷證今昔物語等があるが、日本文學大系本及び改訂增補國史大系本の二書がよい。藝文(第六卷

第十二號に鈴鹿義鐵氏藏古寫本が複印されて流布本に無いものが補はれた。

【參考】

◇○「攷證今昔物語集」芳賀矢一、三册。○「今昔物語の新研究」坂井衡平、一册。○「今昔物語概説」山岸德平、（岩波講座日本文學）○「今昔物語の研究」山岸德平、（改造社日本文學講座）

◇○「校本今昔物語讀法」小山田與淸、（松屋筆記）○「今昔物語の研究」南方熊楠、（南方隨筆）○「佛教文學研究の基調」小野玄妙、（現代佛教四六）○「今昔物語の漢語と漢字」岡井愼吾、（國語國文昭和七年三月）○「今昔物語の成立年時に關する疑問」岡田希雄、（文學一ノ七）○「今昔物語集の成立年時臆說」―岡田希雄氏の說に關聯して―酒井金次郎、（文學一ノ九）○「打聞集と今昔物語及び宇治拾遺との關係について」酒井金次郎、（國語と國文學十一ノ一）

五　漢詩文集

懷風藻を中心とする近江奈良朝の漢文學は、平安朝初期に至つて、專ら初唐の影響を蒙つて天長弘仁期の隆昌を來し、勅撰の三集が現はれた。當時如何に漢文學が隆昌を極めたかは、村上天皇の御代に文選集注（平安朝の古寫本金澤文庫本現存）の如き註釋が現れてゐるのを以て見ても其の一斑が察せられる。平安朝中期以降また、晚唐の風を承けて幾多の總集・別集が編纂せられた。其の間、詩論、作詩法の書も現はれ、漢文を以て表記した文學關係の記錄も多數に上つた。殊に佛教關係の著述は何れも漢文體を以て記るされてゐる。其れ等に就いて茲には、詩文集（總集・別集）・詩論・作法・日記（巡禮行記）・往生傳等に分つて略記する事とする。是等に關しては近時漸く研究に着手せられた。漢詩文集は江戶極初期、林羅山等に據つて德川家康の許にこの方面の文獻が多く蒐集せられて林家の人々は若干研究に從つた。現存の諸傳本も殆ど家康の蒐集に係るものの系統本が流傳してゐるのである。

次に當代の漢詩文集全般に關する參考書を揭げる。

◇○「和漢兼作集」（二十卷、現存一至十卷。平安朝中期至鎌倉中期の作を收む。朗詠集と同類の書。大正五年珍書同好會謄寫刷一册、和田英松博士解說）○「本朝文集」、八十卷。神武至後西天皇御代の漢文五〇八篇を收む。水戶彰考館編。寫本のみにて傳はる。）○「本朝一人一首」（林恕編。十卷。寛文五年刊。五册）○「日本詩紀」（市川寛齋編。五十卷。よく出來てゐる。（國書刊行會版）○「歷朝詩纂」、松平賴寛編。前編二十卷、後編高倉天皇以下八十卷の中、十三卷のみ刊行。）○「和詩正聲」荻生徂徠、一册。○「拙堂文話」齋藤拙堂。（正續各八卷。共八册。）○「日本詩史」江村北海編。十卷。寶永六年刊。七册。二卷以下は室町。なほ「日本詩選」（十卷、七册）は詩史の後をうけて安永八年に刊行されたが、平安朝には關係がない。

◇○「本朝學源」松下見林。（日本漢文學史樣の著）之に附註せるものに、「本朝學源浪華抄」眞野時綱撰（正德刊）あり。○「日本漢文學史」岡田正之○「日本漢文學史」芳賀矢一　○「日本漢文學史」小野機太郎、（岩波講座日本文學）○「日本文學大辭典」（山岸德平）（關係書目解說）

◇【附、一】　支那文學及び支那思想の影響を見る可き參考書

○漢魏六朝百三名家集（集中、六朝及び初唐詩集）○琱玉集（眞福寺藏、二卷。古逸叢書。古典保存會覆刊）○遊仙窟（醍醐三寶院藏國寶古鈔本、古典保存會覆刊。慶安刊本一册、（及び其の先行の無刊記本）元祿刊本（繪入、本文惡し。）○李義山雜纂。○蒙求（龜田鵬齋の「舊註蒙求」刊三册をよしとす。）○李嶠雜詠（佚存叢書）

◇【附、二】　陰陽道

○「王朝時代の陰陽道」齋藤勵（大正四年刊一册）○簠簋內傳金烏玉兎集（三卷三册。續群書類從九〇六。）○暦林問答○文珠師利菩薩宿耀經

◇【附、三】　修驗道

○「木葉衣」（コノハゴロモ）行智（國書刊行會續々群書類從宗敎部十二）○寫本として傳はるものには、「修驗道具抄」（二册）梅之坊教覺撰（黑川春村門人）がある。

◇【附、四】　佛敎思想の影響を見る可き參考書

○「綜合日本佛敎史」橋川正、（昭和七年刊一册）○「皇朝天台史略」（明治二九年刊三册）

○「淨土敎の起源及其の發達」望月信亨、（昭和五年刊）

○藥師の信仰は奈良朝より引續き（藥師本類經）

○彌勒菩薩の信仰を見る可きは（彌勒上生兜率天經・觀彌勒上生經）

○觀音信仰を見る可きは（法華經普門品・法華驗記）

○阿彌陀淨土の信仰は（淨土三部經―阿彌陀經・無量壽經・觀無量壽經）往生要集・往生拾因（永觀撰）・撰擇本願念佛集

○末法思想を見る可きは（燈明記）―（兩部神道の關係）等。

○「院政時代の供養目錄」三宅米吉・津田敬武（帝室博物館報）

◇○「佛敎思想」（日本文學と外來思潮との交涉）和辻哲郎、（岩波講座日本文學）○「日本文學と法華經」山上ゝ泉、（大正十三年

刊一册)○「國文學中の佛教文學」織田得能編、(明治三二年版)○「佛教文學概論」小野玄妙、(大正十四年刊一册)○「佛教文學概說」鈴木暢幸、(昭和六年刊一册)○「國文學に現れたる佛教思想の研究」豊田八十代、(昭和七年刊一册)

第一節 總集

凌雲集

【成立】 一卷。一册。弘仁五年嵯峨天皇の勅により小野岑守・菅原淸公・勇山文繼等撰。正しくは「凌雲新集」と言ふ。我國最初の勅撰詩集、作者の官位順に排列し、現存本には二十四人九十一首載つてゐる。懷風藻には五言の詩のみであるのに、本集になつて唐詩の影響に據り七言詩が著しく增加した。

【本文】 寫本として傳はるものは、慶長前後の書寫に係るものが最も古く、內閣文庫(三本)・神宮文庫・水戶彰考館(四本)・松井簡治博士(三本)・山岸德平氏(九條家舊藏)の諸本がある。刊本としては群書類從本(第一二三)のみで、活版本としては日本文學大系・古典全集所收本(群書類從本)がある。註釋はない。

【參考】○「日本漢文學史」岡田正之。

文華秀麗集

【成立】 三卷、一册。藤原冬嗣が嵯峨天皇の勅を奉じ、菅原淸公・勇山文繼・滋野貞主・桑原腹赤等をして撰ばしめたもの。弘仁九年に成る。凌雲集に漏れたもの及び其の後の詩を集め、作者二十八人、一百四十三首(今五首を失す。)官位順を廢し十一門に分類した。

【本文】 寫本としては、內閣文庫・神宮文庫・靜嘉堂文庫(脇阪安元舊藏一册、他一本)・彰考館・松井簡治博士(和學講談所舊藏)・山岸德平氏藏の諸本があるが、群書類從本と殆ど異同はない。刊本としては群書類從本(第一二四)があり、活版本としては日本文學大系・古典全集に所收せられてゐる。註釋はない。

【參考】○岡田正之「日本漢文學史」

經國集

【成立】 二十卷(現存六卷)。淳和天皇の勅を奉じ良岑安世の撰んだもの、天長四年成る。詩と文とを合輯したのは本書が初めてである。作者は百七十八人。詩文は類聚し、作者の排列は官位順に據つてゐる。

【本文】 寫本としては、三條西實隆自筆の經國集(序文)があり、神宮文庫には「經國集目錄」一册、靜嘉堂文庫には脇阪安元舊藏(元和頃寫、三册)があり、群書類從本(第一二五)と同一である。但し、松井簡治博士藏の古寫本は同じく六卷であるが類從本と異同がある。刊本としては類從本があり、活版本は日本文學大系・古典全集所收本がある。

【參考】「日本漢文學史」岡田正之。

扶 桑 集

【成立】 十二卷。(現存二卷)紀齊名編。本朝麗藻より十年位前、一條天皇長德年間の撰述(江談抄卷五)。「扶桑集」とは我が國の詩集の意。作者としては小野篁・大江音人・都良香・源順等がゐる。

【本文】 寫本は内閣文庫(二本)・蓬左文庫・彰考館文庫藏の諸本があるが、何れも現存二卷(卷七・九)の零本で然も共に卷首を缺き類從本と同一である。刊本としては群書類從本(第一二六)があるが、他に活版になつてゐない。

本 朝 麗 藻

【成立】 二卷。高階積善編。一條天皇の正曆・寛弘頃の公卿の詩を集め、寛弘六・七年頃の撰述に係る。

【本文】 寫本としては、内閣文庫・神宮文庫・山岸德平氏(九條家舊藏)・松井簡治博士(和學講談所舊藏寫缺一册)・水戸彰考館(貞享乙丑金澤文庫を搜し殘篇を得て書寫せし由の一本及び他一本)等があるが、下卷のみを傳へたものである。上卷は首尾共に缺け、下卷は完い。刊本は群書類從本(第一二七)のみで、古典全集所收本も之に據つた。

本 朝 文 粹

【成立】 十四卷。藤原明衡の編と言はれ、「宋文粹」(宋姚鉉)に倣つて命名したもの。嵯峨天皇の長元年中より後一條天皇の長元年中に至る二百餘年間の文辭を「文選」の體裁に倣つて輯め、三十九類に分ち、四百二十七篇を收めた。

【本文】◇(イ)古寫本は種々あるが、在來知られてゐるものに附屬して若干言及するならば、德富氏成簣堂文庫に高山寺現存本と同じ一卷(卷一、平安朝末期寫)があり、又、山崎知雄が自筆校正書入を行つた一本(刊本より二篇多し。松井簡治博士藏)に據つて知られてゐた高野山藏の弘安七年書寫卷子本が寶龜院の寶藏に現存してゐる事、及び德川家康が慶長十九年に借覽轉寫した身延山の本朝文粹(卷一缺十三帖、室町初期寫。金澤文庫本を傳寫せしもの。)が、明治初年の身延全山の火燒を免れて殘存してゐる事などである。金澤文庫にも其の原本と思はれるものの一部分(國寶)が殘存してゐる。

◇(ロ)刊本 刊本として最も古いものは、寛永六年田中長左衞門刊行の古活字印本である。(比較的傳本多し。堀杏庵・林道春序、那波道圓の跋を附す。)次いで之に松永昌易が附訓を施して正保五年に刊行した整版本がある。但し之には古活字印本には存する「[illegible]徳傳」を除いてある。

◇(ハ)活版本としては、明治十七年刊本(田中參が諸本を以て校異し、小杉榲邨の説を附註したもの、八册)があり、國書刊行會本(本朝續文粹合)も、近時の日本文學大系本も之に基いて續印した。

【諸註・參考】不朽の名著、柿村重松「本朝文粹註釋」(二冊)がある。校勘にもつとめ、極めて行きとどいた字句・故事・成語の註解がある。之に就いて小柳司氣太博士も嘗て本書を考究せられたが、柿村氏の著述が出たので、其の補遺の部分のみを學習院圖書館藏本に自ら書加へておかれたものがあり、之は併せ見る可きものである。なほ今後在來知られなかつた古寫本の校勘記を作成する事も必要である。

本朝續文粹

【成立】十三卷。傳藤原季綱編。普通「續本朝文粹」と言はれるが、「本朝續文粹」と稱するを可とする。近衞天皇頃の編纂であらうかと言ふ。本朝文粹に次いで一條天皇より崇德天皇の御代に至る約百二十年間の四十餘人の作を集めてある。

【本文】◇(イ)寫本　現存最古の寫本は文永九年北條實時書寫の本(内閣文庫藏、金澤文庫舊藏、十三冊)で、他になほ圖書寮(四本)・内閣文庫(六本)・神宮文庫・東京文理科大學(江戶極初期寫)・彰考館(二本)・成簣堂文庫(江戶極初期寫)・松井簡治博士(比叡山無量院舊藏六冊・紀州古學館舊藏十二冊及び八冊本(二冊缺)藏の諸本がある。

◇(ロ)刊本としては、明治二十九年菅原德長が京都書肆聚華房(山田茂助)から木活字(江戶末期彥根藩使用活字、久保田米齋氏現藏)を以て五十部を印行した七冊本がある。活版本としては之を飜印した國書刊行會本(本朝文粹合、大正十二年刊)がある。

本朝無題詩

【名稱・成立】三卷。本朝書籍目錄に十三卷とあるのは恐らく誤りであらう。無題の詩を集めたので「無題詩」と言ふ。「無題」とは、即事・言志又は六字・七字の題を稱する術語。五字を題とするもの(五言詩の一句或は七言詩の一句もあり)を「句題」、三字又は四字の題を「非句題」と稱する。本書は内部徵證に據り藤原忠通の命を承けて應保二年六月以降長寬二年二月以前、約三年位の間に何人かが編んだものであるといふ。類從本は十卷、三十七門に分ち、藤原忠通・周光等三十餘人の作を收めてある。

【本文】刊本としては群書類從本(無題詩集)(第一二八卷、但し十卷二冊とするも、内容は三卷の古寫本と同じ)があり、寫本として傳はるものに、内閣文庫・神宮文庫・蓬左文庫・彰考館藏の諸本があるが、何れも類從本と同じ系統のものである。山岸德平氏藏古寫本は内容は同じであるが、卷序が異つてゐる。

【參考】(一)「日本漢文學史」岡田正之。

千載佳句

【成立】二卷。大江維時編。四時以下七言二句を十五部に大別し、作者百五十三人、千八十首。他に傳はらない詩句を多く存する。

【本文】帝國圖書館に一本(林春齋識)を藏する。(其の原本無

路藩主榊原氏の藏書、正安二年寫本大正八年珍書同好會謄寫刷二册）

第二節　別　集

遍照發揮性靈集

【成立】　十卷。釋空海撰。釋眞濟編。もと十卷あつたのが、末の八至十卷が散佚し、後に（承曆三年）仁和寺の濟暹僧都が補遺して「續遍照發揮性靈集補闕抄」としたものが現存の傳本である。

【本文】◇（イ）寫本　平安朝の古寫本（卷子本）の殘存するもの（零卷、田中忠三郎氏（裏日本書紀）高山寺・成簣堂文庫其の他藏）及び鎌倉期の寫本（卷子、零卷、成簣堂文庫・内藤湖南博士等藏）以下南北朝室町期の書寫に係るものも少からず現存してゐる。◇（ロ）刊本　としては早く正嘉二年至建治三年の高野版（卷子摺本大島雅太郎氏藏）があり、慶長以後の古活字印本には、慶長十九年刊本（安田文庫藏）・慶長中刊（無刊記）九行本（成簣堂文庫藏）・元和寛永中刊（無刊記）七行本（帝國圖書館藏）の諸本があり、附訓の整版本も慶元中の刊本・寛永三年刊本（高野版）（成簣堂文庫藏）を初め種々ある。◇（ハ）活版本としては、弘法大師全集所收本（明治四十三年版）等數種ある。

【諸註】　室町以前の註解もあるが、刊行せられたものには、〇「遍照發揮性靈集鈔」（釋運敞）慶安二年刊、六卷、續三卷、十七册〇「遍照發揮性靈集便蒙」（釋運敞）延寶三年刊、十册等がある。

【參考】〇釋空海撰、文鏡秘府論・文筆眼心抄・三教指歸。

菅家文草

【成立】　十二卷。菅原道眞撰。第一至六卷詩、以下文を收め、菅家後草の奏狀に據れば、昌泰三年に道眞が祖父清公以下三代の詩集を合せて獻じた二十八卷中に本書も見える。

【本文】　寫本として傳はるものは室町以後のもので、内野氏皎亭文庫藏（尾州家舊藏・慶長寫。駿河御讓本、四册）を初め種々ある。刊本には、寛文七年・貞享四年（後草附）の兩版があるが、何れも内容は同一である。（靜嘉堂文庫藏寛文七年刊本には狩谷棭齋の校正書入があり、參考となる。）又、「北野稿草」（十卷、附圖四卷。天保十二年刊、十四册）に收めたものは貞享刊本に據つてゐる。

【參考】〇日本紀略（昌泰三年八月十六日の條）〇大鏡〇菅家後草〇北野天神緣起〇江談抄（卷四・五）

菅家後草

【成立】　一卷。菅原道眞撰。「西府新詩」が元來の書名で「菅家後草」は後に附せられたものである。延喜三年道眞が薨ずるに臨み、紀長谷雄に送つたもので、太宰府に貶せられてからの作のみを集めてある。

【本文】　寫本として傳はるものには、松井簡治博士藏本等があ

るが、刊本は群書類從(第一三一)所收本及び貞享四年刊菅家文草の末に附加合刻したもの(一冊)である。(「北野藁草」所收本は貞享刊本に據る)

【參考】 菅家文草(前項)

田氏家集

【成立】 三卷。島田忠臣撰。唐風に田忠臣と稱した。其の家集の意である。寛平三年六月までの詩が見え、其の年夏に歿してゐるから、門弟子が遺稿を後で纏めたものであらう。二百二十一首の詩作を收む。

【本文】 寫本としては、内閣文庫・彰考館等に藏せられるものがあるが、群書類從所收(第一三〇)の刊本と異同はない。

【參考】 日本文學大辭典、山岸德平氏執筆解說「忠臣」參照。

都氏文集

【成立】 六卷。第一・二・六の三卷を佚し、現存三卷。都良香撰。良香の歿後、其の門弟子の類聚編集したものであらう。元慶三・四年頃の成立と思はれる。

【本文】 刊本としては群書類從(第一二九)に收められたものがあり、寫本として傳はるものも彰考館文庫藏二本(一本には慶安二年都氏文集補遺歟合綴)・松井簡治博士藏二本(柳原家舊藏本及び書入本)等若干あるが、類從本と殆ど異同はない。

【參考】 日本文學大辭典、山岸德平氏執筆解說「良香」參照。

江吏部集

【成立】 三卷。大江匡衡撰。書名の由來は江(大江)吏部(吏部は式部省唐名、匡衡は式部大輔)である。寛弘七八年頃の自撰に係るものであらう。十四部に分ち、部中更に細分してゐる。

【本文】 寫本としては、内閣文庫藏本(元長寫、下卷缺)・神宮文庫藏本(貞享元年寫)・東京帝大圖書館(舊南葵文庫藏)・彰考館文庫・松井簡治博士藏(書入本)等の諸本がある。刊本には群書類從(第一三三)所收本がある。

【附記】 江都督納言願文集　六卷(群書類從第八二七に收載せられたる三卷の抄錄本なり)一冊。常州六地藏寺より永享年間の古寫本(卷四のみ缺)發見、平泉澄博士活版に附す。)

江談抄

【成立】 六卷。大江匡房の撰といふが(本朝書籍目錄)、藏人實兼(後成父)の聞書であらうといふ考證(黑川春村碩鼠漫筆)がある。書名は大江家の人の談話を記るし留めた意である。長治・嘉永の頃の成立であらう。漢文體に間々假名交りがある。第一至三卷は公事・神佛事等故實的な事、第四至六卷には詩文に關する說話及び批評等を所收。說話物語の性質を具へてゐるが、漢文體であり、詩文話を收めてゐるから茲に加へる。後の說話物語に多くの影響を與へてゐる。

【本文】 古寫本には、高山寺藏本・醍醐三寶院藏本(共に古典

保存會玻璃版覆刊）や、「水言抄」と題する異本（神田喜一郎氏藏古典保存會覆刊）がある。刊本としては、群書類從（第四八六）所收本等がある。

法性寺入道集

法性寺入道忠通の詩集。一卷（群書類從第一三三所收）百二十首を收め、中百首は七律である。◇（參考）「田多民治集（歌集、圖書寮御藏）日本文學大辭典西下・山岸兩氏執筆「忠通」の項參照。

第三節　詩論・作法

文鏡秘府論

【成立】　六卷。釋空海撰。本書の要を抄錄した「文筆眼心抄」は弘仁十一年夏の自序があるから、共れ以前に成つたものである。六朝及唐代の諸家の詩文の評論・格式（後記）の概要をとつて分類し、評論したものである。其の援引した原本は皆佚して傳はらないので、本書に據つて其の原本の面目をも窺ひ得る。

【本文】　平安朝の古寫本の現存するものには、圖書寮御藏本（平安朝中期寫、東方文化研究所玻璃版覆刊）・高山寺藏本（二本、一は長寬三年識語あり。）高野山三寶院藏本（平安朝末期寫）成簣堂文庫藏本（平安朝中期寫本、零本一帖、延曆寺舊藏）等があり、鎌倉以後のものはなほ多い。刊本は江戶期のもの三册があるが、甚だ本文が惡い。活版本には弘法大師全集所收本（明治四十三年版）がある。

【諸註】　近頃「文鏡秘府論箋」（高野山蓮金院維寶編）十八卷（完本）が高野山持明院より發見された。

【參考】○「弘法大師の文藝」內藤湖南、（弘法大師と日本文化）○「文鏡秘府論に就いて」松井簡治（日本文學論纂）○「文鏡秘府論の引用書に就いて」（密敎研究二四）・「文鏡秘府論概說」（同二六。二八）加持哲定。

【附、文鏡秘府論所引支那詩論書】
「四聲譜」（沈約）・「四聲指歸」（劉善經）・「詩格」（王昌齡）・「詩式」（靜嘉堂文庫藏寫一册）・「詩評」「詩議」（釋皎然）・「唐朝新定詩格」（崔融）・「詩髓腦」・「古今詩人秀句」（元兢）・「文賦」（陸機）・「文心雕龍」（劉勰）（支那學研究第一卷鈴木虎雄博士校勘記あり）・「河岳英靈集」（官版一册）○藤原佐世編「日本國見在書目」參照。

【附】文筆眼心抄

【成立】　一卷、釋空海撰。自序に據れば、弘仁十一年夏成る。文鏡秘府論を要約したもの。京都の山田氏藏文筆眼心抄の古寫本（傳弘法大師筆）によつて、「文筆眼心抄釋文」一册を舊彥根藩藏の木活字を以て印行した（明治四十一年刊）が、誤脫多く、長谷寶秀氏は「冠註文筆眼心抄」を著はして訂正した。（弘法大師全集所收本之に據る。）

作文大體

【成立】一卷。中御門右大臣藤原宗忠撰。作文の文は詩、(之に對し筆は散文を言ふ)作文の大體を初學者に敎へる爲に編纂したものである。崇德天皇の嘉承三年頃の成立に係る。
【本文】東山御文庫に傳はる「文筆大體」と題する一本(鎌倉初期を降らず)は卷首に源順撰作文大體(末缺)を載せてゐて、宗忠の撰述に係る本書の甚く所がわかる。之に次いで、東寺觀智院藏本(鎌倉中期寫、卷子本。貴重圖書影本刊行會玻璃版複刊)・高野山金剛三昧院藏本(高野山大學圖書館寄託。室町期寫)等は、正しい形態を傳へたものであり、他に成簣堂文庫藏本(鎌倉初期寫、卷子本。之には作文大體以外の記事も加はつてゐる。)がある。又、同じく高野山大學圖書館にある一本(享祿五年寫)は、宗忠の作文大體とは同名別本である。刊本たる群書類從本は、宗忠撰述の原本と高野山一本(享祿寫本)等とを以て別に編纂したと思はれるものである。
【參考】○貴重圖書影本刊行會複製本開題(山岸德平)參照。○なほ後のもので「文筆問答抄」(印融)・「玉澤不渇抄」等(共に高野版寬永活字印本あり)があるのも參考となる。

文鳳抄

【成立】十卷。平安朝末期菅原爲長撰。作詩上の語句故事等を類聚したもの。
【本文】傳本としては、神宮文庫(卷一及び卷四二册)・圖書寮(卷三のみ一册)・內閣文庫(三本、何れも缺本)なほ眞福寺(卷四・七)にも一本を藏する。完本は未だ發見されない。

第四節　日記

巡禮行記

我國人の支那への紀行若しくは日記には古く齊明紀所引の伊吉博得・難波吉士男人の日記、吉備眞備の在唐日記(佚)等があつたが、平安朝に入つては、「入唐求法巡禮行記」・「行歷記」・「平城天皇皇子高岳親王の「眞如親王入唐日記」一卷、永觀元年入宋の「奝然法橋在唐日記」(佚)・長保四年入宋の寂照の「在唐日記」(佚)・成尋の「參天台五臺山記」等がある。次に現存の主要なものに就いて略記する。◇(參考)「平安朝に於ける日記の研究」和田英松(新潮社日本文學講座)○「日支交通史」(木宮泰彥)
【入唐求法巡禮行記】四卷。慈覺大師圓仁撰。圓仁は仁明天皇承和五年に渡唐、在唐約十年にして歸朝、本書は在唐の巡行日記、承和五年六月十三日より同十四年十二月十四日に至る。現存の寫本は、東寺觀智院藏本(正應四年寫、國寶。大正十五年東洋文庫複刊。岡田正之博士解說附)と信州池田長田氏藏本(文化二年寫本。東寺本より本文善き部分多し。(「四明餘霞」附錄。天台宗務廳刊))活版本としては、國書刊行會本(續々群書類從第二輯所收、史料編纂所藏東寺轉寫本に據る)。大日本佛教全書本(東寺本に據り、池田本を參訂。活版本として最もよい。)がある。◇(參考)「入唐求法巡禮行記解說」岡田正之、(東洋文庫

【行歴記】 智證大師(圓珍)撰。原五卷の中、抄本一卷を存す。大日本佛教全書遊方傳叢書第一所收。)

【參天台五臺山記】 成尋撰。八卷。活版として史籍集覧第二十六・大日本佛教全書遊方傳叢書第三等所收。(後者遊方傳叢書第四には、成島稼堂の「删補天台五臺山記」八卷、附一卷をも載す)(大日本佛教全書に所在を失せりと記るせる若王寺盈源僧正所持本、(卷六以下缺)山岸德平氏藏。)

第五節 往生傳

附 傳記・往生要集・往生拾因

往生思想には、阿彌陀佛の信仰に基く極樂往生と、彌勒菩薩の信仰に基く兜率往生とがあり、往生傳は其の兩途にある往生人の行實を編錄したもので、平安朝には幾多の往生傳が現れてゐる。佛教文學として見る可く、其の主なるものを左に略記する。左記の他、なほ文治三年入滅の證印に至る三十八人の高野山往侶の往生傳を集めた「高野山往生傳」(一卷、如寂編。寛文五年刊本。活版本は續類從・大日本佛教全書・續淨土宗全書所收)がある。

【日本往生極樂記】 一卷。慶滋保胤編。寛和年中作。聖德太子以下四十五人の往生傳。寛文九年刊。群書類從(第六六)所收。活版本は、續淨土宗全書・大日本佛教全書(第一〇七册)所收本がある。又別に赤松晋恩訂正、明治十四年刊の「日本往生全傳」六册があり、本書を初め次記の續本朝往生傳・拾遺往生傳・後拾遺往生傳の四部を收む。

【續本朝往生傳】 一卷。大江匡房編。一條天皇より康和三年春往生の源忠遠妻藤子に至る四十二人の往生傳を錄す。名古屋眞福寺に、(國寶)建長五年の寫本(卷子一軸)がある。刊本としては萬治二年刊本(一册)があり、又群書類從本(第六六)、眞福寺本による)がある。活版本としては、大日本佛教全書・續淨土宗全書の所收本も眞福寺本に據り、萬治二年刊本を以て校訂してゐる。

【拾遺往生傳】 三卷。三善爲康編。續本朝往生傳に次いで、古今に亙り其の遺漏を集め、九十四人の往生傳を收む。眞福寺に古寫本(國寶、三帖)を藏する。活版本としては續群書類從本(第一九六)・大日本佛教全書・續淨土宗全書所收本があり、刊本には元祿十一年刊行の一本がある。

【後拾遺往生傳】 三卷。三善爲康編。凡て七十四人の往生傳。眞福寺に正嘉二年の古寫本(國寶、三帖)がある。刊本には延寶二年刊本(下卷は元祿四年刊)があり、活版としては續群書類從本(第一九七)・史籍集覧本(第十九册)・大日本佛教全書・續淨土宗全書所收本等がある。

【三外往生傳】 一卷。釋蓮禪編。前記四本に漏れたものを拾錄したもので、延喜六年入寂の增全阿闍梨以下四十九人の傳を收む。眞福寺に正嘉二年の古寫本(國寶)がある。活版本としては

續群書類從(第一九八)史籍集覽・大日本佛敎全書・續淨土宗全書所收本がある。

【本朝新修往生傳】一卷。藤原宗友編。前記諸本に繼ぐ往生人四十一人の傳を集めたものである。眞福寺に正嘉二年の古寫本(國寶、一帖)がある。刊本としては、元祿十年刊本(一册)があり、活版本は、元祿刊本の系統で、續群書類從(第一九九)・史籍集覽・大日本佛敎全書・續淨土宗全書所收本がある。

(附) 傳 記

なほ往生傳に關聯し、高僧の傳記が多數編まれてゐるから玆に附記する。大日本佛敎全書第一一一册、傳記叢書の部等に所收せられたものを擧げると、後の編纂になるものもあるが、○南都高僧傳○本朝高僧傳○東國高僧傳○日本高僧傳要文抄○日本高僧傳指示抄○續日本高僧傳等。又後の釋師鍊撰の「元亨釋書」(三十卷。大日本佛敎全書第一〇一册所收)等も參考となる。

(附) 往生要集

三卷。惠心僧都(源信)撰。寛和元年成る。念佛往生の要を懇切に說いた入門書である。當時の思想に少からざる影響を與へ、文學の上に著しく反映してゐる。刊本としては、早くより淨土敎版關係の出版が行はれ、現存の諸舊刊本には承元四年(原本不傳)・建保四年・建長五年刊本がある。江戸期には繪入本(三卷三册)(寛文十一年・寛政二年刊)も出て世に行はれた。

◇【往生拾因】釋永觀撰。一卷。之も多く往生要集類似の書として共に行はれ、古く鎌倉期の淨土敎版(寶治二年刊)があり、後にも種々重刊がある。注釋も十數種存する。

第六節 遺 誡

當時の遺誡(敎訓書)として現存する著明なものは、○寛平遺誡(宇多法皇御撰)がある。列傳本で群書類從(第四七五)に收められてゐる。活版本としては、列聖全集(御撰解題)所收本等がある。他には○九條殿遺誡(九條師輔撰。一卷。遺誡並びに日中行事を記るす。群書類從(四七五)所收。○菅家遺誡(續群書類從第九四六卷)等がある。

附 繪 卷 物

繪卷物の遺書は、當時の研究資料としても極めて注意す可きものである。現存の平安朝繪の詞書を持つ繪卷としては、源氏物語繪(尾州家(三卷)・德川家(一卷)隆能筆と傳ふ。)信貴山緣起繪(三卷、信貴山藏)・寢覺物語繪・伴大納言繪(三卷。酒井忠克伯藏)粉河寺緣起繪(一卷。粉河寺藏。)等がある。鎌倉期以後の筆になるものや後に當代を資材として製作されたものは頗る多數に上る。

◇(參考)○考古畫譜(黑川眞賴全集所收)○大倭繪名作集(栃木探古)○繪卷物集成(雄山閣刊)○繪卷物小釋(松岡映丘)○繪卷物概說(福井利吉郎、岩波講座日本文學)

△（注）緣起に就いては第一篇第二章の末項參照。

六　附　載

平安朝文學の研究に參考となる可き諸方面の著書並びに其の研究資料に就いて附記する。後の時代を主とする續編の類書は略する。

一　國　史

◇史訂國史の研究（上卷）黑板勝美（昭和七年刊一册）通史の概觀を知るには相當詳しくてよい。〇古いものでは、林道春父子編の本朝通鑑（國書刊行會本所收十八册）が、文事をも注意して錄してある。〇「大日本史」（大日本雄辯會講談社活版本飜印）は附錄の列傳年表其の他詳細で引用書も載つてゐて調査の手掛を得る事が多い。又、飯田忠彥の「野史」（明治十五年刊五十册、同廿八年版六册）も傳記等を調べるにはよい。更に進めば、「六國史」（大阪朝日新聞社校訂本）や「類聚國史」「日本紀略」「本朝世記」、「扶桑略記」（佛敎關係）等に遡り、後のものでは鴨祐之の「日本逸史」（國史大系）も參照するがよい。又、直接當時の日記古記錄に當らねばならない。某年の記錄類に如何なるものがあるかを檢索するには史籍年表（伴信友編、刊一册）〔「日本史籍年表」（小泉安次郎編）は之を補訂し、より詳しい。〕がよい。「大日本史料」が全部編纂されれば、此の目的を完全に達せしめるが、まだいくらも揃つてゐない。大日本史料を簡約した〇史料綜覽の卷一至三の部分は、「仁和三年より文治元年に至り」稍其の目的に添ふ。但し大日本史料は政治史的な方面が主となつてゐるから、文學研究には比較的參考とならない。當時の公卿の日記類は、寫本として傳はるものが多いが、活版になつてゐるものは、

〇小右記・山槐記・中右記・兵範記（史料通覽）〇台記・槐記（史料大觀）〇春記・同別本（丹鶴叢書―國書刊行會飜印）〇三代御記・貞信公記等（續々群書類從記錄部第五の內、國書刊行會刊）〇西宮記（改訂史籍集覽編外第二八）〇御堂關白公記（古典全集）等である。この日記記錄は當時の文學研究資料として十分に活用す可きである。

二　傳記・系圖・官職

作家的な研究の手掛りとしては、赤堀又次郎の〇日本文學者年表がよい。平安朝までの著者別書目を揭げ、作家の傳記資料も示してある。朝臣の傳記資料としては、〇公卿補任（國史大系・改訂史籍集覽所收、殿上人はないが古い所があつて便宜である。國史大系本は本文が惡い。）系圖ではあるが、官職略歷を註記し

た○尊卑分脈（一名「大系圖」。刊本は十四卷、故に十四卷系圖といふ、三十卷本もあるが内容が惡い。十四卷本の方が正確で、（古實叢書所收、索引附丹鶴叢書中に大系圖書引便覽（四册）あり、又、刊本に脫せる源平の部「尊卑分脈脫漏」丹鶴叢書外書（刊本三册稀本）あり。特に皇室關係では○纂輯御系圖（横山由淸等編、明治十年初刊、史上讀方の分明なる天子の御名のみ假名を加ふ。）（簡單には國史大辭典等の檢索で濟むものもある。）又、文學者關係の特殊なものとしては、○古今和歌集目錄（群書類從第二八五）○三十六人歌仙傳・中古歌仙傳（群書類從六五）等がある。又、之に關聯し、全勅撰集中所載の一作家の歌全部を檢索するには勅撰作者部類（國學院版八代集抄附載一册）がある。歌人の傳記を調べるには無論家集其の物を忘れてはならない。著名な作者は日本文學大辭典にも出てゐる。僧侶の傳を簡便に見るには、「佛家人名辭書」がある。なほ近時出版の「讀史備要」（一册）は、年表・官職・年中行事・系圖・公卿索引等種々なる部門を具へてゐて簡單に見るには役に立つ。○官職の沿革と解義とを見るには「官職要解」（和田英松）一册があるが、古いものでは、令の關係のもの（後記）の他、後のもので職原抄（北畠親房）二卷。注釋は多いが、近藤芳樹の「標注職原抄校本」（安政五年刊、六册）が最もよい。寫本で傳はるものをも加へると、平有之の「職原抄述解」（十一册、寶曆年間成る）が最も詳しくよく出來てゐる。又、支那流の名稱との對照を見るには「建官考」（澁井孝德撰、國書刊行會本活版）詳しい職掌を見るには「職掌錄」（改訂史籍集覽所收）がある。女の役は「女房官品」（群書類從」七〇所收、二條良基撰）、僧の事は、「僧綱職令」（壺井義知撰、寫一册）、神官の事は「祭官名目」（佐伯盛候撰）がある。終りに必ず見る可きものに「故事類苑の官職部」がある。

三　事彙・辭書

百科事彙及び類似の性質を有する當時の辭書は、當時の文化史的研究に缺く可からざる資料である。（當時の事彙・辭書に就きては「古本節用集の研究」（橋本進吉）參照。次に年代順に之を列記しておく。○印は重要なるもの。

（イ）平安朝選述事彙辭書

○篆隷萬象名義（六帖、弘法大師撰。玉篇（佚書）等支那の字書を取捨編纂。我が國最初の辭書。高山寺古寫本藏。（崇文叢書覆製）

○新撰字鏡（昌泰年間僧昌住撰。音義も漢文にて註す。十二卷本大槻文彦刊。類從本は抄錄本二卷。）

◎和名類聚抄（源順撰。百科辭書的で、十卷本と二十卷本とあり、十卷本は古い形、流布の通行本は二十卷。但し二十卷の增補本も伊呂波字類抄等に引用せられてをり、平安朝末期には存在した。狩谷棭齋が十卷本を底本として「箋註倭名類聚抄」を著し、（索引附、明治十六年活版、十册）（昭和六年縮刷版、二册）

○森立之の訓纂（いろは索引）（明治十九年活版）も之に併せ參

照するとよい。
○類聚名義抄（十一卷。音訓を片假名にて注し、又、アクセントの點を施す、國語研究上貴重なる資料となる。現存諸傳本の祖本は東寺觀智院藏古寫本。和名抄より後のものなる可し。）
○伊呂波字類抄（橘忠兼撰。二卷本・三卷本・十卷本あり。三卷本は、尊經閣文庫藏本（平安朝寫本、中卷缺。覆製あり。）と黑川氏藏本（古典保存會刊三册）。流布本は何れも十卷本で、後の增補が多い。（古典全集所收）
○二中歷（懷中歷・掌中歷を合し二中歷といふ。崇徳天皇頃のもの。百科事彙的で簾中抄と共に參考となる。群書類從（第九三一）には掌中歷のみを收め、改訂史籍集覽（二十三）には揃つてゐるから之がよい。
○簾中抄（一卷、藤原資隆撰。鳥羽天皇の第三皇女八條院に奉つたもの、壽永二年成る。帝王・年中行事・和歌・音樂等の部に分れ、當代の研究には便宜である。（改訂史籍集覽第二十三所收）（簾中抄の一異本白造紙について（橋本進吉、國語と國文學十一ノ五）
○口遊（眞福寺藏古寫本、一卷）
○往來物も同樣な目的の書である。當代には「明衡往來」（雲州消息・雲州往來）（藤原明衡撰、二卷二册、寛永二十年刊）がある。

（ロ）後代撰述の百科事彙

後代の撰述になる百科事彙的なるもので、簾中抄・二中歷等と同じ體裁に成つたものは、
○拾芥抄（三卷・三册。洞院公賢撰。故實叢書所收活版本が最も校訂がよい。）
江戸時代以後のものでは、
○古今要覽稿（五百八十四卷。屋代弘賢編。國書刊行會版（六册）もと未定稿であつたから、散じた部分もあり、全部は印刷になつてゐない。弘賢の下に諸學者が編纂に從ひ、各項目により和漢の故事をよく集め、稿本には彩色の圖をも加へてある。
○類聚名物考（山岡浚明撰。三百四十六卷。明治三十八年活版。但し誤植等少からず。然し便利なものであるから、一應見る可きものである。明治年間に編纂された○古事類苑は最も參考となる。索引がなく且つ分類も多少不便な點はあるが、詳細な調査がとゝのふ。忘れてはならぬ書である。之に對し、同類の書「廣文庫」は餘り役に立たない。

（ハ）特殊なる辭書・索引

なほ因みに特殊な辭書について附言する。
○古名錄（明治廿三年活版四十五册、畔田伴存編）動植物の辭書で、金石地質其の他飲食の事まであり、萬葉より慶長頃までを集む。專門的に博物學上より言へば不完全かもしれないが、文學上動植物を見るに便宜である。（古典全集覆印）
○同じ著者の「水族志」（十卷、明治十七年活版）は七百三十五の

魚を百九十六部の古書より抜いて說明したものである。〇貝がらの模樣等の研究には「目八譜」(モクハチフ)(帝室博物館藏。)が最も詳しい。

〇本草綱目指南（本草綱目の索引。難しい動植物の名を音訓で引き得る。三册。）

〇水上語彙（幸田露伴）明治三十年刊一册。（和漢船用集等に據る。）難しい訓讀を見るには、〇難訓字典（井上頼圀等編、明治四十年版、一册）がある。

〇神祇に關するものには〇「神道名目類聚抄」があり、圖解も挿入せられてゐる。近頃活版（一册）となつた。

〇諺語故事熟語等の辭書としては、俚言集覽などあつて、之に自見の說明を加へた藤井乙男博士の「諺語大辭典」（一册）があり、又、池田四郎次郎氏の「故事熟語辭典」がある簡野道明氏のは其の孫引である。譬へなどを見るには古いものに清水濱臣の「皇朝喩林」（刊一册）があり、出典もあげてある。

〇索引は江戸時代の學者が色々編纂して刊行したもの、或は寫本の儘傳はつてゐるものも多い。新しくわざ／＼編纂した「正續國歌大觀」もあるが、之は上下句索引であるのに、古く語句類句や、〇古今類句（山本春正編。刊本百册。二十一代集）の各句索引がある。之が續編的なものとして〇二六類句（古今六帖と新撰六帖との索引）六册もある。

〇古物語類字抄等は前章で述べたが、隨筆中に種々の事柄を求めるには（正續）隨筆索引（太田爲三郎）二册がある。この種のものは編纂が困難であるから、出來上つたものも比較的使用しにくいが、參考にはなる。

〇六國史の索引も古いものは色々あるが、大朝社の校訂本の附錄の他、特殊なものでは、近時、六國史の「神祇索引」（神宮皇學館編、一册）がある。

◇なほ茲に雜誌の論文を檢索するものとして、國語國文の研究第三卷增刊の「國語國文研究雜誌索引」がある。（昭和三年まで）不備でもあり、其れ以後のものもないが、類書がないからまづ之に據らねばならない。昭和六・七年のものは文學創刊號に附載されてゐる。又〇「本邦書誌ノ書誌」（天野敬太郎）一册も多少參考となる。〇佛教關係のものは、佛教論文總目錄（一册）及び佛教學關係雜誌論文分類目錄（一册）がある。國史關係のものは、史學雜誌・歷史地理等何れも索引を印行した。「藝文」の總目錄「國華」の總索引等も參考となる。序に解題書の事を略記する。國文學のものでは日本文學大辭典が最も整つてゐる。又、日本文學史表覽（沼澤龍雄）も役に立つ。〇「國文學書目集覽」・「國文學書史」等といふものもあるが、なほ頗る改訂を要する。「國書解題」も手引にはなる。群書一覽・續群書一覽などは殆ど役に立たない。特殊なものには、歌書は大日本歌書綜覽（福井久藏）が最も多數を網羅し、なほ特殊になるが、皇室御撰の研究（和田英松）があり、詳細に記るしてある。國語學書目解題（赤堀又次郎）も早くの出版で增補の必要があるが、纏つた殆ど唯一の參考書といつてよい。〇佛書では近頃詳細な佛書解說大辭典が

出版された。地理に就いては、「編修地誌備用典籍解題」(三十三册、刊本なし)があり、漂流記等をも加へて、二千部以上の解説がある。間宮士信編。新しいものでは高木利太編「正續家藏日本地誌目錄」(二册)がある。又、諸方の圖書館文庫の藏書目錄又は解題も參考となる。(圖書寮・內閣文庫・帝國圖書館(後のは年報)・靜嘉堂文庫等藏書目錄及び成簣堂善本書目等)

目錄類で古いものでは、藤原貞幹の「國朝書目」(寛政三年刊)があり、更に古く遡つて仁和寺書籍目錄(本朝書籍目錄)(刊本一册もあり)、目錄と名のつかぬものでも、「撮讓集」(和訓栞活版本附載・續類從所收)の下部、書籍名の條。異制庭訓往來七月の條、拾芥抄上の末、又は八雲御抄學書の部等辭書類を見るとよい。澁井孝德の國史中の「藝文志」もある。

四 風俗・習慣・有職・故實

◇「日本風俗史講座」中の當代の關係項目は一通り參考となる。又他の講座中でも、(岩波講座日本文學)――王朝文學に現れたる庶民生活(西岡虎之助)・宮廷の文化と生活・日本風俗史概說(櫻井秀)等があり、單行本としては、「日本風俗史」(藤岡作太郎)「日本風俗史の研究」(櫻井秀)等もある。江戸時代に研究編纂されたものもあるが、當時の文獻としては、前記の和名抄以下の事彙類、中でも○延喜式(皇典研究所校訂版)は最も參考となる。

◇有職故實全般に亙るものとしては、朝儀典例の方には、水戸藩で編纂した大部なる○禮儀類典がある。

○有職備考(寫十册、大日本史編纂の際に水戸で編んだもの、有職全般に亙り、地理家屋に及ぶ。延享元年成る。藤原咲方編

○貞丈雜記(伊勢貞丈)故實叢書第一篇所收。何でも網羅してある。

○寶石類書(紀宗直撰)寶曆頃成る。寫五十四册。有職備考よりも故實の調べが詳しくよく出來てゐるが、傳本が罕である。

○故實のよみ方を見るには「名目抄」(一名、禁中名目抄。洞院實熙撰、類從所收)がある。

○故實の研究に缺く可からざるは繪卷物である。之を基にして成つたものには、筆の御靈(寫二十三册。田沼善一撰。繪卷物を資料としたので正確である。僅かに卷首一部のみ活版本となつてゐる。

○御所の建築については、○歷史的に見るには皇居年表(裏松固禪撰。故實叢書所收五册)平安朝の御所は○大內裏圖考證(同撰。故實叢書所收。十四册。頗る詳細で現在は多くこの書に據つてゐる。)があり。今の京都の御所を見るには「鳳闕見聞圖說」源宗隆撰、寫三册。)がある。

○一般の建築に就いては、○家屋雜考(百家說林所收)がある。

○調度を知るには、○丹鶴圖譜(彩色刷、調度部二帖。國書刊行會縮印)。極めて簡便に見るには「(增訂)裝束圖解」「(增補)宮殿調度圖解」(關根正直)がある。

○古圖類聚(高島千春撰、文政六年刊)も古い道具がよく出てゐ

る。又、類聚雜要抄(類従本)でもよい。
○輿車・船舶は、○輿車圖考(松平定信撰。故實叢書所收)○蛙抄(寫八册、靜嘉堂文庫等藏。輿車のみでなく服飾の事も見える。撰者不明)○和漢船用集(金澤兼光撰)明和三年刊、十二卷、十二册。和漢文學上に現れた船は盡く考證し圖解してある。傳本が少いのは惜しい。
○風俗・遊戯は○嬉遊笑覽(喜多村節信撰。我自刊我本校訂よく、近時、藝林叢書(二册)其の他にも所收)○競物名彙(黑川春村)—貝合・扇合等の物合を見る可き書。○職人盡(土佐光信畫甘露寺親長撰。一册)
○年中行事については、宮中の方は、最も古い參考書としては西宮記(西宮高明撰、十六卷、史籍集覽活版)があり、平安朝の研究には必要であるが、文字の誤り等もあつて難讀である。これと併せ見る可きものに、北山抄(十一卷、藤原公任撰。一條天皇以來の儀式を記す。丹鶴叢書所收刊本は本文がよい。(國書刊行會活版)これ等よりもつと手近なものは江次第である。(承應二年刊、十九册、大江匡房撰)延喜式も見る可きものである。民間の方は、日次記事(黑川道祐撰、延寶頃成る、四册。國書刊會活版續印)は京都の事がよくわかる。華實年浪草(三余齋麁文撰、十五册)は宮中の事も民間の事も見える。
○服飾に就いては、○令(衣服令)を初め、○假名裝束抄(一名、雅亮裝束抄。久安仁平(賴長頃)の源雅亮撰寫一册。○餝抄(寫、一册、土御門通方撰。)○服色管見(田安宗武撰、寫本、十四卷、別錄八卷。調査はとどいてゐる。)以下は主として故實叢書所收本(◎印)で、
◎歷世服飾考(田中尙房撰。五册。故實叢書所收)
◎裝束織文圖會(松岡辰方撰。文化十二年刊。七册。故實叢書所收)
◎裝束着用圖(伊勢貞丈撰。二册。故實叢書所收)
◎禮服着用圖(一册。故實叢書所收)
◎冠帽圖會(一册。松岡辰方撰。故實叢書所收)
◎近代女房裝束抄・女官裝束着用圖(各一册、故實叢書所收)
○歷世女裝考(四册。弘化四年刊。岩瀨百樹撰)
○法體裝束抄(刊一册。寛永三年頃藤原永行撰)
○重色目(一卷。文化十四年刊一册。猪飼正穀編)
○薄樣色目(一卷、文政九年刊、一册。中村[illegible]撰)
○裝束色彙(寫二册)
○近頃の纏つたものとしては「日本服飾史論」(高橋健自)等もある。
◇京師の地圖に就いては、○中古京師地圖○中古京師內外地圖(故實叢書所收)があり、新しい研究には「平安京變遷史附古地圖集成」(藤田元春)がある。

五　法制・經濟

○法制は「令義解」(刊十一册)及び「令集解」(「定本令集解釋義」三浦周行・瀧川政次郎校註。昭和六年版)を見れば、凡ての方

面がわかる。但しこの兩書は難解である。又、政治要略等も見る可きである。近時の研究には「律令の研究」（瀧川政次郎・昭和六年版。）又、三浦・中田・牧諸家の論文集中にも研究が見えるが、明治年間のものでは、○「日本制度通」（萩野由之・小中村義象。明治二三年版。昭和四年三版。）もある。○經濟方面の研究としては、見る可きものが少い。「日本經濟史」（數種）として經つたものの中に見える。莊園關係のものは先に、「莊園制度の大要」（吉田東伍）一册がある。貨幣の事は、○大日本貨幣史が詳しい。○「日本文學に現れたる經濟生活」山本勝太郎（昭和六年刊）といふのもある。

六、美術・工藝其の他

○美術の方面は、全般的に「稿本日本美術略史」「日本美術史講話」黒田鵬心等の概説や「日本繪畫史」（藤岡作太郎）等、又特殊なものには○「鳳凰堂の研究」津田敬武等もある。

○古筆の草假名の研究には「歌と草假名」「平安朝草假名の研究」（尾上八郎）がある。

○工藝に就いては○「工藝鏡」（横井時冬）明治二十七年版。及び「工藝志料」（黒川春村）等も古いが參考となる。

○印刷文化に就いては、大屋德城「寧樂刊經史」がある。

○年號、暦の事は、「三正綜覽」（活版一册）がよい。神武の古より明治三十年までの暦日が明らかである。支那・回教暦なども對照する。又、年號の出典其の他を見るには、古人の記錄著述も少くないが、最近の「日本年號大觀」（森本角藏）が最も集成されたものである。

附記。本稿を草するに當つては、山岸德平先生より種々御示教を賜はり、又、中谷幸次郎・片寄正義・高橋貞一諸氏の並々ならぬ助力を仰ぎました。玆に深く感謝いたします。（昭和十年二月）

昭和十年三月二十五日印刷
昭和十年三月三十一日發行
國語科學講座
（第十二回配本）
東京市神田區錦町一丁目十六番地
編輯兼發行者 株式會社 明治書院
代表者 三樹退三
東京市神田區三崎町二丁目一番地
印刷者 株式會社明章印刷所
代表者 細谷踏三
發行所 東京市神田錦町一丁目 株式會社 明治書院